

あなたが勝つって、信  
じていますから

o—fan C100日曜日 東E49a

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

マサラタウンから旅立つ新たな二人のポケモントレーナー、レッドとグリーン。

しかし実力はグリーンの方が大きく上。

敗北の悔しきで涙を流すレッドへ、草ポケモン使いのエリカが声をかける。

# 目次

マサラタウン	1
ニビシテイ	19
ハナダシテイ	38
クチバシテイ	63
シオンタウン	89
タمامシシテイ	105
ヤマブキシテイ	153
セキチクシテイ	224
グレンタウン	261
カントー地方	284
トキワシテイ	306
セキエイ高原	332

チャンピオン



# マサラタウン

開けた草原の中に一定の間隔で点在する家屋。

マサラタウンで起こる出来事、噂は大小関わらず一時もすれば街全体に広がっていく。

そんな場所で唯一世界に発信出来る場所、ポケモン界の権威オーキド博士の研究所内で、新しい二人のトレーナーが初戦に望んでいた。

「泣き虫でしかもポケモンも満足に扱えないのな！ レッド」  
「……」

レッドとグリーン、この街に住む二人の少年の力関係はこの会話で推して知るところだ。

グリーンはヒトカゲと共ににやついた顔でポケモンバトル勝利の余韻に浸り、レッドは目から零れそうになる雫を必死でこらえ、手を震わせながら倒れ伏したフシギダネにモンスターボールのリターンレーザーを当てた。

（勝負とは残酷なものじゃな）

オーキド博士は孫の勝利を喜ぶわけでもなく、ため息を必死でこらえるような表情で

レッドを見ていた。

悲しくはないが少々虚しくはある。レッドは昔から口下手で、年の近いグリーンには毎度合うたびいじめられており、そのたびグリーン姉やオーキド博士がグリーンを叱りつけるものの、劣等者を痛めつける喜びを覚えてしまった子供、グリーンを御しきれていなかった。

レッドが精神的に強くなってくればあるいは、またポケモントレーナーとして二人に共通の話題ができればと思っていたのだが……。

「よさんかグリーン！」

「うるせえじじい！ 俺はもう姉ちゃんからタウンマップもらって旅に出るからな！

ばいびー！」

そそくさと出て行くグリーンをオーキド博士はあっけにとられたまま見送ってしまった。顔を伏すレッドとオーキド博士の間で沈黙だけが残る。

「レッド……」

レッドのポケモンを回復させる。レッド自身も慰めなければならぬだろう。

しかしいつもならレッドがぐずりだすところだが……。

「……っ！」

「レッドー！」

レッドは涙を振り払い一目散に研究所から駆け抜ける。

「あらっ？」

「!？」

レッドはドアまで走った所で人にぶつかりそうになり、少し減速した。

マサラでは見ない女性だった。肩まで伸びる黒い髪、山吹色の和服からにじみ出る優雅な立ち振る舞いと気品。しかしレッドは彼女と目を合わせるのを避けて駆け出していく。

「オーキド博士、あの子は？」

「おお、エリカさん。この前言っていたポケモンをあずける予定だった子の一人なんじゃが……。初戦に負けたショックで飛び出してしまつてなあ」

「まあ……どんなバトルでしたの？」

「相手はわしの孫でグリーン、使つたのはヒトカゲじゃ。今飛び出していったのがレッドで使つたのはフシギダネ。二匹とも今日が初めてだから、ひっかくと体当たりの応酬じゃつたのう」

「なるほど。本当に初めてでしたのね」

「おお、しまった。旅立ちのついでにトキワシテイから荷物を持ってきて欲しかったんじゃが、二人に頼みそびれてしまったわい……」

「それなら私にお任せください。飛行ポケモンを持ちあわせていますので」

「おおすまんのう。ジムリーダーにおつかいなんてさせてしまつて申し訳ない」

「いえいえ。オーキド博士のお役にたてるのなら、些細なことでも光栄なことです。それと一つ教えていただけたいのですけど」

「なんじゃ？」

エリカはふわりと微笑む。

「レッドくん、どこに行つたのか心当たりはございますか？」

彼は弱かつた。

彼は負け続けていた。年の近いグリーンを相手に、喧嘩でも、かけっこでも、川泳ぎでも。

グリーンは口々にレッドを罵り、レッドは言い返せない歯がゆさと悔しさと逃げ出すしかない。

それでもレッドは新しい勝負からは逃げなかつた。グリーンに勝てることを一つでも、その負けん気の強さだけは誇りだつた。

そしてポケモン勝負。自分だけじゃないポケモンの強さを借りれば、あるいは。

しかし、結果はいつもの敗北だつた。

「……」



草原に雨が降っていた。どこまで走ったのか、帽子と服が水分を吸って体に張り付いていたが、レッドからすれば大した問題じゃない。

「……」

少し疲れた。レッドは座り込み、雨に打たれる水たまりをなんの意味もなく見つめていた。

（なぜ、勝てないのだろう）

グリーンと自分は何が違うのだろう。グリーンはいつも自信満々だ。いつも自分は勝てるという確信があり、好戦的な笑顔を張り付かせて勝負に望んでいる。

しかしレッドはそうではない。きつと勝てる。今回は勝てる。そんな想いと裏腹に、また負けるんじゃないか、自分はグリーンには勝てっこないんじゃないか。

そんな感情が目の前を覆ってくる。いつもそうだ。

（一生、勝てないのかな）

俯いた顔、雨が後頭部から目尻まで垂れてきて、地面に1つ2つと雫となつて落ちていく。

「そんなところにいると、風邪を引いてしまいますよ」

その言葉とともに、レッドの頭上に傘があった。しかしレッドから落ちる雫が止まらない。

レッドは目元を一度拭ってから目線を横に移し、先ほどすれ違った和服の女性を視認してから、またすぐに地面へと顔の向きを戻した。

(ありや)

エリカは肩を落とした。噂に聞いていた少年は大分敗北が堪えているらしい。

彼を知るグリーンの姉曰く、

「レッド君、けつこう無口だからグリーンが調子にのっちゃうのよね……」

オーキド博士曰く、

「レッド自身は優しい子なんじゃがなあ……。グリーンが一度怪我をしたことがあったんじやが、すぐに走って大人を呼びに来てくれたんじやよ。しかしグリーンは、レッドに見捨てられた”って勘違いしてしまつてのう。後でグリーンに訳も話したんじやが、それ以来グリーンとレッドが勝負事をするようになってしまつたんじやよ」

そしてレッドは連戦連敗中。彼が逃げ出すと大抵この場所で塞ぎこむという。

エリカは別にレッドに一目惚れしたとか、泣き虫な男の子を叱咤激励したいとか、そこまでの思いがあつてレッドを追ってきたわけじゃあない。

(新しいポケモントレナーの門出に、少しだけ手助けしてもかまわないでしょう)

聞けば彼が使うポケモンは草ポケモンのフシギダネだという。エリカも草タイプを司るジムリーダーの一人。

「レッドさん」

「！」

レッドの体がぴくりと動いた。

「オーキド博士にお名前をお聞きしました。私はエリカ、ポケモントレーナーをしています。redsはなにも動かない。」

「グリーンさんに、ポケモンバトルで勝ちたくはありませんか？」

エリカは返答を待つ。数秒の沈黙の後、レッドはゆっくりと口を開いた。

「無理だよ。どうせ勝てない」

「どうして？」

「いつもそうなんだ。こつちがどんだけ頑張っても、グリーンはいつも僕よりも上なんだ。どうせ頑張ったって、無理だよ」

「なるほど……」

中々手強い。さてどんなアプローチがいいだろうか。

「……レッドさんは、ポケモンの公式試合を見たことがありますか？」

レッドがエリカの方を見ずに応える。

「テレビで、ニドリーノとゲンガーが戦っているのは見た」

「最近の公式戦ですね。あれはいい試合でした」

エリカが弾むように続ける。

「ポケモンバトルに必要な戦略、戦術、技術……それら必要な要素が全て噛み合った試合はとても心躍るものです」

レッドは無感動に、

「勝てなきや意味無いじゃん」

とにべもない。

「ええ。試合、特にプロの公式試合はなによりも結果が求められます。しかしプロの公式試合だろうと、ポケモンを初めて持ったトレーナー同士の試合であろうと、ポケモンバトルで最後に勝敗を分ける、不変の要素があります」

エリカは一度言葉を区切って、

「何だと思えますか？」

レッドに微笑みかけた。

レッドは不思議そうな顔をして、

「ポケモンの強さじゃないの？」

「いい違います」

ぱつぱつと切り捨てられた。

「わかんないよ、ポケモンの強さより必要なものなんて」

「……ポケモンバトルで勝つために一番大切な要素、それは」

雨が、勢いをなくしてきている。

「トレーナーとポケモンとの、絆です」

「……絆？」

「レッドさん、フシギダネを出してみてくださいください」

レッドは手元のモンスターボールを地面に放った。

「ダネフシツ！」

地上に出たフシギダネは、雨の中嬉しそうに背中を揺らしている。

「なんで、喜んでるんだ？」

「レッドさん、オーキド博士からいただいたポケモン図鑑をフシギダネに向けてみてく

ださい」

「えつと……」

レッドはポケットから赤い電子図鑑を取り出し、フシギダネへ向けた。

フシギダネを感じた図鑑から電子音が響く。

『フシギダネ。たねポケモン。生まれてからしばらくの間は、背中の種類から栄養をも

らって大きく育つ』

「たねポケモン……そうか、雨で背中の種から栄養もらえて喜んでるんだ」

「ええ。レッドさんこれを」

「これは……？」

レッドはエリカから茶色い種子のようなものを受け取る。

「ポケモンフードです。これをフシギダネに」

「あつ」

レッドがかがみフシギダネに差し出すと、フシギダネは一度匂いを嗅ぎ、はむはむと頬張った。

「ポケモンは剣や盾では決してありません。この地上に住む生物の一つ。好き嫌いがあり、感情があります」

食べ終わったフシギダネが、もつと欲しいとキラキラした目でレッドを見つめる。

「ポケモントレーナーとはひとつひとつのポケモンを知り、そして相手に知ってもらい、絆を育み共に強さを目指す……。レッドさんあなたは今、フシギダネの一部を知りました」

エリカがレッドにポケモンフードの箱ごと手渡す。

「しかしフシギダネの全てではありません。これからレッドさんはもつとフシギダネの事を知り、そしてフシギダネにあなた自身を知ってもらう必要があります」

「僕自身をフシギダネに知ってもらおう?」

「ええ」

フシギダネがまだかまだかと、レッドの周りを回り始める。

「互いの事を知り、共に切磋琢磨して絶対に切れない絆のもとに、望む勝利の光がある……。それがポケモントレーナーです」

「……」

レッドは餌を食べるフシギダネを見つめる。初めてグリーンのとヒトカゲと戦った時、自分はなにを考えていただろうか。

『グリーンに勝ちたい!』『このポケモンバトルでなら!』

『なんであつちの攻撃の方が強いんだ!』『あつちのポケモンにすればよかった!』

『どうせまた、勝てない』

「……」

「……僕も」

レッドは初めて、エリカの瞳を真正面から見つめた。

「僕も、なれるかな。そんなポケモントレーナーに」

「なれるかどうかは、この世界の誰にもわかりません。大事なのは」

エリカは抱擁力がこもった声で言う。

「なりたいたい」という意思があるかどうか。レッドさん、ポケモントレーナーになりたいですか？」

レッドは目をつぶった。

『レッド、お前ポケモンバトルも弱いんだな!』

『レッド、少しはグリーンに言い返したらどうじゃ?』

『レッドくんごめんね。グリーンにはいつも言ってるんだけど……』

強くなれるだろうか。

もうあんな目で見られることはなくなるだろうか。

ポケモントレーナーになれば、グリーンに勝つことができるのだろうか。

……いや、勝つことができるかどうかじゃない。

自分は望んでいる。なににも変えがたい強さを。

勝利の光を。

「……ポケモントレーナーになりたい。なって、グリーンに勝ちたい」

「はい。それでは、レッドさんはまずなにを始めますか?」

「もつとフシギダネの事を知りたい。ポケモンのことも、ポケモンバトルの事も」

「ええ」

エリカが本当の意味で微笑む。



「その、エリカ、さん」

「はい？」

レッドがフシギダネを抱え上げる。

「よかつたら、少し教えてくれませんか？ ポケモンのこと、ちよつとでいいんで」

「もちろん。構いませんわ」

雨はもう止んでいた。

トキワシティ。ここにはトキワジムの他、ポケモントレーナーの殿堂であるセキエイ高原に続く道がある。

その途上に目を合わせたポケモントレーナー二人の姿があつた。

「ようレッド。この先はジムバッジが8個ないと進めないつてよ！ まったくケチンボだぜあの警備員」

レッドは答えない。グリーンは気にした様子もなく言葉が続ける。

「そういやレッド、あれからお前ポケモンは捕まえられたか？ じいちゃんの言葉に従うのは癪だけど、俺は一応集めてる。もう4匹も捕まえちゃったぜ。レッドは何匹だ？」

「……2匹」

「俺の半分かよ！ そんな調子じゃポケモン図鑑の完成も俺が先にしちゃうかもな！」

はははっ！ とグリーンは軽く笑う。そして腰のモンスターボールに手をかけた。

「知ってるかレッド、旅の途中でポケモントレーナーの視線が合ったら、やることは一つ」

「……」

レッドが身を低くしてモンスターボールを構える。さまになっているレッドの姿が意外だったのか、グリーンが口笛を吹いた。

「へへっ。今度は長くもてよ。レッド！ いけっ！ オニスズメ！」

「いけっ！ ポツポ！」

鳥ポケモンのそれぞれの鳴き声が響く。

「オニスズメ！ つつく！」

「ポツポ、すなかけだ！」

オニスズメの攻撃に耐え、ポツポは正確にオニスズメの目にすなをかけていく。「相手のHP（ヒットポイント）を減らさなきゃ勝てないんだぜ、レッド！」

グリーンが電子図鑑でポツポのHPを確認する。

「ポツポ、すなかけ！」

「はっ、つつくだ！ オニスズメ！ この前と一緒だなレッド！」

「……」

「なあレッド。お前とお前のポケモンのために言っとくぜ、ポケモントレーナーなんてやめちまえよ」

「！」

「ポケモントレーナーていうのはな、ポケモンを道具のように自在に扱って勝利を勝ち取るもんだ！ どんなに強いポケモンを使おうが、命令してる奴がへボだと勝てねえんだよ」

「……」

「お前て弱い上に口下手だろう？ 使われてるポケモンがかわいそうだぜ！ 俺なんかじいちゃんの子孫だからポケモンのことだってお前よりわかってるし、バトルも強い！ そうだ、俺が勝ったらポケモンよこせよ！ お前の分も頑張つてやるよ。このグリーン様が、未来の世界チャンプのポケモントレーナー様がな！」

「……」

ポツポにオニスズメの攻撃が続く。レッドは顔を伏せ、帽子のつばで視線を隠す。

「……………違う」

確かな、しっかりとした言葉だった。

「あん?」

「ポケモントレーナーは、そんなものじゃない!」

レッドは顔を上げ、グリーンを正面から見据えた。

「ポケモントレーナーとはポケモンとの絆を育み、勝利の光を目指すものだ。好き勝手に命令して、道具のような扱いをして勝てるようなものじゃあない!」

「なっ!?!」

グリーンは知らない。こんな、こんな意思をもった煌きを放つ瞳のレッドなど、知らない。

「それを証明してやる! ポツポ! かぜおこし!」

攻撃に耐えていたポツポの眼が開き、一気にオニスズメから距離をとって羽ばたく。

「くっ! オニスズメつつくだ!」

しかしオニスズメの攻撃は外れた!

「なに! どうして!?! もう一度だ!」

グリーンは気づかない。オニスズメの攻撃がポツポのすなかけによって、途中から空を切っていたことを。

レッドはオニスズメの命中率が十分に落ちてから、反撃にでたことを。

「トドメだ！ かぜおこし！」

ポツポが一段と甲高く鳴き、羽ばたいて作り出した風のかたまりをオニスズメにぶつける。

オニスズメは力のない鳴き声を上げて、倒れ伏した。

「そんな……俺の、オニスズメが……」

グリーンが呆然とした表情でオニスズメをモンスターボールに戻す。

「こんな……こんな認めねえ！ 畜生！」

グリーンはバトルを中断して、走り去っていく。

「待てグリーン！……」

レッドは追うのをやめて、ポツポに近寄った。

「よくやったぞポツポ。頑張ったな」

「ポー♪」

ポツポにキズぐすりを使って背中を撫でると、ポツポが陽気にレッドへ擦り寄ってくる。

「皆、出ておいで」

レッドが残り二つのモンスターボールをほおる。フシギダネとコラッタが元気に飛び出した。

「お前たちの出番、今回はなかったな。でも油断せずに行こう」

フシギダネとコラツタ、そしてポッポがレッドの周りに集まる。

「さて道を変えて、まずはトキワの森か、今度はどんなところかな」

(あつ……そういえば、僕、グリーンに勝ったのか)

しかし、今は些細な事に思える。不思議だ。

「ダネフシ？」

もつと大事なことが、できたからだろう。

「……なんでもないよ。さて行くこうか皆。まだまだ旅は始まったばかりだよ」

少年は本当の意味で歩み始める。

ポケモントレーナーになるために。

タマムシシテイであの人に礼を言うために。

ポケモン達と共に勝利の光を目指す旅に。

## ニビシティ

ニビシティ。そこではニビ科学博物館で宇宙博覧会が行われており、多くの観光客や研究者が訪れている。

またニビシティにもトキワシティと同じくポケモンジムがあり、代々岩タイプを司るジムリーダーが訪れるポケモントレーナーの挑戦を受けていた。

「……ふう」

ここはニビシティジムリーダーの事務室。

普段は多くの関係者が出入りし、隣接するバトルスペースには多くの掛け声やポケモン達の咆哮が響く場所だったが、今はガランとして静かで、一人の男のため息だけが漏れていた。

コン、コン。

「はい」

「入るわよ、タケシ」

「カスミか」

ニビシティジムリーダータケシはデスクで片付けていた書類を置き、同業者であるハ

ナダシティジム所属のカスミを出迎えていた。

タケシは茶色いTシャツに緑のズボン、カスミは丈の短いTシャツとショートパンツのへそ出しルック。互いにかしこまった関係ではないことが見て取れる。

ハナダシティはニビシティと隣接しており、またカスミとタケシは歳が近いこともあって、ポケモンの事を話すことは少なくなかった。

二人の間の空気は静かだった。

タケシは元来口数が多い方ではなかったが、今日は一段と寂しげな雰囲気を纏っており、カスミもそんなタケシを認めながらもさして興味なさげに人のいないジムを眺めていた。

カスミはただの広い空間になったジムの天井を見上げ、声を響かせる。

「本当にやめるのね。ジムリーダー」

「ああ、明日がニビジムの、いや、ジムリーダータケシの最後の営業になる」

「ふーん。代わりの人はすぐ来るの？」

「もうポケモン協会の方が新しいジムリーダーを選定しているそうさ。長くても一週間もすれば新しい人間が来るだろう」

「そう、一週間ね。その間旅のトレーナーは待ちぼうけってわけ」

カスミの語気は強くない。ただ事実を言っているだけだった。



「俺を止めに来たわけじゃなさそうだな」

「そりやそうよ。止める理由がないもの」

「……そうだな」

カスミが今は誰も居ないバトルスペース中央、モンスターボールを横した白線の中央に立つ。手を頭の後ろに組んで目をつぶった。

タケシはカスミの大分後ろに立って、明日で最後になるバトルスペースを眺めた。

「じゃあカスミはここに何しに来たんだ？ バトルならまあ、今なら付き合うが」

タケシは苦笑しながら言った。カスミは水のエキスパート、対してタケシは岩。自分で言っという勝ち目は薄い。

カスミは目を開ける。タケシを見ない。どこか中空を見ている。

「バトルは別にいいわ。あんたがどんな顔してるか、興味があっただけ」

「なんでやめるのかは聞かないのか？」

「別に興味ないわ。まあでも、あんたの顔が見れてよかったわ。少し判断材料になった」

「ジムを姉に任せて、最近ハナダに戻ってないって聞いたぞ」

「別に問題ないでしょ。ジムバツジ譲渡の権限は私達4姉妹なんだから、誰かいればいいわ」

「お前が4姉妹の中で一線を画す強さなのにか？」

カスミはタケシに返答せず、タケシの横を通りすぎて手をひらひらと振る。

「明日最後の挑戦者を待つつもりだ。暇だったら来てくれ」

タケシの言葉にカスミは何の反応もせずジムを去った。

「……さて、書類を片付けるか」

タケシが庶務を終えた時にはもう日が落ちていた。街灯に沿った道のりに人通りは少ない。

「今だ、フシギダネ！ ようし、いいぞ！」

「ん？」

道から少し外れた場所、家々から離れた場所で掛け声が聞こえた。

見たところ、10歳そこそこの子供。フシギダネというところからまだポケモンをもらったばかりのトレーナーだろう。

いいコンビネーションだな、とタケシは感じていた。フシギダネの行動と反応を見てから、ちゃんと次の命令を繰り返している。

「いい連携だな、少年」

「え？」

「すまない、邪魔をしてしまったかな」

タケシは気づいたら声をかけていた。ジムリーダーという仕事はジム所属のトレーナーの指導も多い。タケシはそれが嫌いではなかった。

「君は、ニビシテイの子ではないのかな？　あまり見ない顔だけど」

「うん、マサラタウンから来たんだ。ここではジムに挑むつもりで、今はその練習」

「名前は？」

「レッド」

「そうか。俺はタケシ」

フシギダネがレッドの腕に飛び込み、レッドもフシギダネを抱きかかえながら笑顔で撫でる。

「タケシさんもポケモン持つてるの？」

「……ああ」

タケシは少し考えてから腰のモンスターボールを選び、自らの隣に放る。

「コンっ！」

現れたのは赤い毛にこじんまりとした6つの尻尾が特徴的なポケモン、ロコン。

「わっ。はじめて見るっ！」

「ロコンというんだ。この辺では珍しいかもしれないな」

タケシはかがみ、ロコンの体を撫でる。ロコンは心底リラックスしたように、タケシ

に体を任せた。

「すごく懐いてるね」

「ありがとな。なあ少年、一つ聞いてもいいか？」

「ん、なに？」

「ジムに挑むということは、その先にあるポケモンの殿堂、セキエイ高原を目指すんだろう？ どうしてそうしようって思ってたんだ？」

「どうしてって……？ ポケモントレーナーは皆目指すんじゃないの？」

「ポケモンとの付き合い方は様々だよ。セキエイ高原を目指す人は多いだろうが、中にはポケモンをペットとする人、ポケモン研究者や、土木作業や治水工事、ポケモンのケアや健康を扱うポケモンブリーダーという職業もある」

タケシは口コンから手を離し、レッドに向かい合った。

「人それぞれのポケモンとの付き合い方がある中で、どうして君はポケモントレーナーになつたんだい？」

タケシは努めて優しく言った。別に糾弾しているわけじゃない。このフシギダネと良い関係を築いている少年がどうしてバトルの道に行ったのか、純粋な興味だった。

「……勝ちたいから、かな」

「勝ちたいから？」

「うん。ポケモンバトルつてき、僕だけじゃなにもできないじゃない。でもポケモンだけがいても、なにもできない。ポケモンがいて、トレーナーがいて、二つの心が通じあつて初めて、勝てる」

「……」

「二人だけじゃできないことでも、ポケモンと力を合わせれば。仲間と一緒に勝ちたいから、喜びを分かち合いたいから、バトルで勝ちたいから、かな」

少年の表情はキラキラしていた。タケシは憧憬にも似た感情でそれを眺める。

「ごめん、ちよつとうまく言えないかも」

「……いいさ。立派だな、君は」

ニビシティジムで毎日連戦する日々。しかしタケシはある日、傷ついたポケモンを癒やすポケモンクリニックでのブリーダーたちの献身を見て、迷いが生まれていた。

自分はポケモンに戦いを強制してしまっていないか。もつと他の、ポケモンを愛する者としての付き合い方があるのではないか……。

そんな迷いが生まれていた矢先、先日ヒトカゲを伴った挑戦者が来た。

一度目はタケシが退ける。相性から見て当然の結果で、タケシはがまんやタイプ相性の事をレクチャーしようと思ったのだが……。

「……うっ」

その時、ヒトカゲを連れた少年から放たれた憤怒の視線。強烈な敵意。それに圧倒され、声をかけられずに彼を見送ってしまった。

時を置かずしてその少年は再来した。今度はリザードを伴って。

タケシは相手が持っているジムバッジの個数によって使うポケモンが決められている。

リザードの力はタイプ相性をものともせず、タケシのイシツブテとイワークを撃破していった。

力技で押し通るのは悪いことじゃない。しかし、バトル相手に対しギラついた視線で攻撃してくるトレーナーとリザードの姿が、どうしても脳裏から離れなかった。

(俺がやっていることは、正しいことなんだろうか)

この迷いに対して、タケシは考える時間が欲しかった。気づけば空いた時間、1から始めるポケモンブリーダー教本なんてものを読んでいる。

(今の俺は、ジムリーダーをやるべきじゃない)

周囲の反対をよそに、タケシは一度自分の道を見直すことを決めた。

「そういえばレッド君は、ポケモン博物館に行ってみたかい？」

「ううん」

「貴重なポケモンの化石や、ポケモンに関わる岩石を展示している。時間があれば行っ

てみるといい」

「うん、そうするよ」

「今日はもうほどほどにしときなさい。明日ジムに挑戦するなら、体調もポケモンも万全にしとかないと」

「わかった。ありがとうタケシさん！」

「ああ、おやすみ」

少年が駆けていくのをタケシは笑顔で見送る。

自分もさっさと今日は寝よう。明日は朝一番に元気なフシギダネ使いが来るだろう。

(……俺の、ラストマッチのためにも)

心地良い朝だった。天気は快晴。湿度も程よく、ポケモンたちのコンディションが万全であることは一目見て分かった。

「おはよう皆」

ニビジムにタケシ他、ジム所属のトレーナー達が勢揃いしている。皆一様に、複雑な顔をしていた。

タケシの門出を祝うべきなのか、寂しさから彼を引き留めていいのだろうか。

「タケシさん、やめないでください！ 俺……まだまだ1000光年だってタケシさん

に教わりたいつすよ！」

「光年は距離の単位だぞ、まったく」

タケシがジムリーダーになってからジムに所属した少年が、こらえきれない涙を流しながらタケシに懇願する。

「ありがとな。今日の挑戦者の前座試合は、お前に任せる」

「……はい！」

「良い返事だ。さあ皆、俺の最後のジム戦だ。気合入れていくぞー！」

『はい！』

（今の俺には、ジムリーダーとして悔いが残っているかどうかすら自分でもわからない。だが、君のバトルに答えるくらいはできるだろう）

ジムに開業のベルが鳴り、入り口のシャッターがゆっくりと音を立てて上がっていく。

バトルスペースに朝日が差し込むと同時に、赤い帽子を被った少年の影が伸びる。

「ようこそ、未来のチャンピオン！」

朝一番の挑戦者を受付が元氣に向かい入れた。

タケシは自分の出番が来るまで、自室で精神を集中させていた。

手持ちは相手のジムバッジの個数に合わせ、イシツブテとイワークの二体。イワーク



は耐久力を活かしたカウンター技、がまんを備えている。

正攻法で来る初心者相手に、相手を見る戦術性を教える極めて簡潔なデモンストレーションとも言える。

(ポケモン同士で傷つき傷を付け合うバトルにおいて疑問をもった俺でも、これから夢を目指す者の手助けくらいできるだろう。イシツブテ、イワークどうか俺に付き合ってくれ)

「!?……なんだ……!?」

今まで聞いたことのないような歓声だった。自室までバトルスペースの轟音にも似た人々の声が響いてくる。

「タケシさん、出番ですよ」

「あ、ああ。しかし、この声は……?」

「いけばわかりますよ、皆待つてます」

バトルスペースへの道を行く。いつもの数倍の眩しさと熱を感じるのは、気のせいではなかった。

「これは……!?」

まるで一級スタジアムのようなだった。突貫で作ったのであろうイワーク達を利用して作った階段上の観客席。

そしてその席を埋める老若男女の大勢の観客たち、ニビシティの人口を考えれば驚異的な人数が集まっている。

『タケシさん！』『頑張れー！』『その坊主つええぞー!!』『やめないでくれー！』

「にいやーん!! がんばれー!」

タケシの弟と妹達まで勢揃いしている。

「なっ……俺がやめることは、ジムの皆に口止めしていたはず……いや」

(……あのおせっかい娘め)

「すいませ〜んタケシさん……負けちゃいました〜……」

「わかった。後は任せろ」

タケシはバトルスペースに立つ。相対するは、

「タケシさんって聞いて驚きました。でもすごく光栄に思いますー!」

レッド。タケシの心に徐々に、熱い衝動が沸き起こってきている。笑っていた。

(馬鹿だな俺は。初心者にレクチャーなどど何を偉そうに。この観客達と、レッド君、そして俺のポケモンが望んでいることは)

「……俺はニビシティジムリーダーのタケシ。岩ポケモンを操るポケモントレーナーだ

ー!」

「マサラタウンのレッド!」

『バトル開始い!』

「行くぞお! 行けえ! イシツブテエ!」

「行け! コラツタ!」

ポケモンの挙動ひとつひとつにジムが揺れる。

「コラツタ! 体当たりだ!」

「イシツブテ! 体当たりだ!」

文字通り低レベルの争い。しかし、観客たちと、戦うトレーナーとポケモンが持つ熱気はどうだ。

『そこだあ!』『いいぞお!』『頑張れー!』

「コラツタ! もう一度体当たり!」

「イシツブテ! かたくなる!」

(この少年は本気だ! ポケモンが持つ力、ポケモンとトレーナーとの絆を信じて戦っている! 俺はどうだ!)

タケシが久しく忘れていた感情が、目を覚ましかけている。

「コラツタ、しつぽをふる!」

(こ)だ!

相手がこちらの防御をさげようとした隙をつく。タケシとイシツブテの考えはシン

クロしていた。

「イシツブテ！ たいあたり！」

（イシツブテがこんなに早く！ いや、俺の考えをイシツブテがわかってくれた）

コラツタを倒したイシツブテがタケシをちらりとみる。タケシも頷いた。

「さあ、レッド。まだまだこれからだぞ！」

「くっ！ いけ！ ポッポ！ かぜおこし！」

イシツブテも連戦では長くもたなかつたが、ポッポにある程度の打撃を与えることは成功していた。

「よくやったイシツブテ。もどれ」

レッドはたまらず、タケシに叫ぶ。

「タケシさん！ 俺今、すごいわくわくしてる！ これがジムリーダーとの戦いなんだね！」

「ああ！ 俺も久しぶりに熱くなってきたぜ！」

タケシのポケモンは本気の編成ではない。だがそれがどうした。今持ちうる全ての力を出しきり、勝利を得ることになんの疑いを持つとか。

「これが切り札だ！ いけ！ イワーク！」

舞い降りる巨体。種族値こそ見た目に反しているが、その巨影はマサラからやってき

たレッドを圧倒する。

(でかい……だけど、俺と俺のポケモン達の熱い闘志が囁きかけてくる。トレーナーとポケモンとの絆があれば、勝利の光をたぐり寄せることができる!)

「いくぞ! フシギダネ!」

「草ポケモンか。だがその小さな体で、イワークの硬い体を打ち砕けるか?」

「超えられない壁などないと、俺は教わりました。俺とフシギダネの力を合わせれば、また一つ、見えなかった強さを身につけることができる!」

「なら見せてみる! イワーク! たいあたり!」

「フシギダネ! たいあたり!」

(最初は体当たりの応酬、このフシギダネの火力なら耐えることができる! よし)

「イワーク、がまん!」

イワークの動きが丸まつてとまり、フシギダネのたいあたりに対し反撃しなくなる。

「これは……一体?……まで! フシギダネ!」

(気づいたか。だが遅い、とめるのがあと一瞬早ければな!)

既に数発フシギダネの体当たりがヒットしている。

「イワークのがまん、知っていたのかレッド?」

「いえ、初めて聞く技です。だけど、イワークの挙動から予測はできる。フシギダネ！ やどりぎのタネ！」

「なに!？」

フシギダネの背中をつぼみから種子が発射され、イワークの体を覆う!

「だが、イワークのがまんは開放される。イワーク! こうげきだ!」

「あとは削りきるまで! フシギダネたいあたりい!!」

イワークとフシギダネの額が激突し、あたり一面に砂埃が舞う。

「……」

「……」

砂埃が晴れた時、立っていたのは巨影だった。フシギダネは倒れ伏している。

『……フシギダネ戦闘不能! ……え?』

イワークの巨体が傾き、ずしんと大きな音を立てて倒れた。その巨体からは地面を伝って、フシギダネへ養分を送るやどりぎが伸びていた。

それが一度脈打つと、フシギダネがゆっくりと立ち上がる。

『しつ失礼! ……イワーク戦闘不能! 勝者! 挑戦者レッド!』

『うおおああああああああああああ!!』

「勝った……? 勝った……!! 勝ったぞ!!」

レッドがフシギダネに駆け寄って抱き上げる。

「やった……!!」

「おめでとう。レッドくん」

「タケシさん……」

イワークを戻したタケシが歩み寄る。

「こんな清々しいバトルは久しぶりだった。おめでとう。君にジムリーダーが認めた証、グレーバツジを進呈しよう」

「あ、ありがとうございますー!」

レッドは副品としてがまんのわざマシンも受け取る。

「俺、こんなに楽しいバトル初めてでした。ジムリーダーのポケモントレーナーって、本当に憧れます」

「憧れ、か」

「だって、イシツブテもイワークとも息ピッタリだったじゃないですか。俺も、そんなトレーナーになれるように、頑張ります!」

「……ありがとう。君のフシギダネの扱い方も見事だった。誰かに教わったのかい?」

「教わったってほどではないんですけど……でも、今の戦い方見たら、優雅じゃないって

「言われそうです」

「優雅……？……！！」

草ポケモンを優雅なんて言う人は、タケシには一人しか思い浮かばない。

「いい師に巡りあつたようだね。タمامシまで気が抜けないな」

「はい、それじゃあ」

「ああ、いい旅を」

少年はまた駆け出していく。

しかし去ろうとするタケシに対し、歓声と拍手がなりやまない。

それを見て、ハナダのおてんば娘は微笑んでジムを後にした。

ジムのトレーナーたちがタケシに駆け寄ってくる。

「タケシさん、俺、俺」

「皆、話したいことがある」

ポケモンバトルで、ポケモンとの絆を証明している者達がいる。自分もそのうちの一人になりたい。熱いバトルを通して。

「書類を片付けたのが無駄になってしまいが、どうか俺を、ジムリーダーとして鍛えさせてもらえないか。まだまだ、ジムリーダーとして学ばなきゃいけないことがありそうなんだ」



「……!!」「もちろんです!!」「やった!! タケシさん!!」

『タ・ケ・シ・!』『タ・ケ・シ!』『タ・ケ・シ!』

(ありがとう、レッド。君ならばきつと……!)

またひとり、ポケモントレーナーとして新たな扉を開く。

レッドの旅はまだまだ続いてく……。

## ハナダシテイ

「おーし皆、集まってくれ」

オツキミ山のニビシテイ側麓にある草むらの中、レッドはフシギダネ、コラッタ、ポツポ、バタフリーといった手持ちのポケモンたちをモンスターボールから外に出していた。

「俺達の新しい仲間だ。出てこい！ コイキング！」

光とともに跳ねまわる魚影。地上におけるその姿は川から打ち上げられて身悶える魚の姿そのものでしかない。

「こいつはコイキング！ 技は今は……攻撃技じゃない」はねる” しかないけど、俺達にとつて貴重な水ポケモンの仲間だ。レベルアップして水の技を覚えれば、岩ポケモンの多いオツキミ山できつと活躍してくれる。皆サポートよろしくな！」

レッドの言葉にポケモンたちがそれぞれ鳴き声を上げて答える。皆レッドに大事に育てられて強くなってきたことをわかっており、新しい仲間のサポートにも理解を示してくれているようだった。

「さて、それじゃあオツキミ山の入り口を少し探索してみようか。ポケモンセンターに

もよって、もう一度あの人にお礼を言っておこう」

ポケモンが500円で売っている。しかも草むらでは中々お目にかかれない水ポケモンということもあり、レッドはすぐに心惹かれコイキングを購入した。

純粋な少年は売ってくれた男性に対して深く感謝している。

(あれ、なんだろう?)

ポケモンセンターから警察であるジュンサーが複数人現れ、布を被せた男を連れて行っている。

「あいつ、ポケモン売買の許可証を持たずにポケモンを販売してたのよ」

「え」

レッドが振り向くと、そこにはノースリーブのTシャツにショートパンツといった相の短髪の少女がいた。可愛さとワイルドさが同居している、そんな格好だった。

「売買って……」

「ってあら!? あなたこの前ニビジムに挑んでた子じゃない!？」

少女の声のトーンが急に上がり眼がきらりと光った。

「えっと、確かにこの前タケシさんと戦ったけど……」

「やっぱり! あの時合私も見えたの! 凄く楽しい試合だったわ!」

少女がはしやぎながらレッドの手を握ってくる。こんな直接的に喜びをあらわして

くる同年代の少女に対し、レッドは気恥ずかしさと嬉しさから少したじろいだ。

「あっありがとう……」

「えっと確か、レッド君だったわね。私はカスミ。私もポケモントレーナーなの」

「え、そうなの!？」

「そうよ。あなたとポケモン息ぴったりって感じで最高だったわ。イシツブテもイワークもレベルが上なのに力を合わせてぎりぎりの勝利……! あなたみたいなポケモントレーナーって本当に素敵」

今度はうつとりとした表情でカスミはレッドを見つめてくる。

可愛らしい少女の好意を帯びた視線に、レッドの頬が純粹に紅潮する。

「そ、そこまで言ってくれるなんて……。でも、俺だけの力じゃないよ。皆がいてくれたから、あきらめずに頑張ってくれたから勝利できたんだ」

「そうね……」

カスミが急に声のトーンを落とし、レッドから距離をとって背を向ける。

「?」

「ねえ、レッド君。君はこれからオツキミ山に入るんでしょ?」

「? うん。でもしばらくはオツキミ山でポケモンのレベルを上げるつもり。新しい仲間が入ったばかりなんだ」

「そう……」

カスミは体をよじり、レッドを流し目で見ながら、

「私も一緒に行つていいかな？」

と首を傾げた。

「う、うん。でも、しばらくこのポケモンセンターを行き来するけど……」

「構わないわ。さ、行きましょ！」

カスミがレッドの手を掴みぐいぐいと引いていく。レッドの初めての洞窟探検には、大きな渦が待ち構えていた。

オツキミ山内部、入ったレッドとカスミにはすぐさま野生のポケモンが出迎えた。

「野生のズバットよ」

「行け！ コイキング！」

(!?)

カスミが声を上げそうになるが、喉で押し殺してレッドの動向を見守る。

「よし、もどれコイキング！ 行け！ バタフリー！」

「……」

バタフリーがズバットを念力で倒し、ボールを収めたレッドは一息つく。

「ねえ、レッド君。そのコイキングって攻撃技もつてないんでしょ？ どうして育てて

いるの?」

彼は知っているのだろうか。そのポケモンのポテンシャルを。

「えっと……初めて手に入れた水タイプのポケモンってこともあるんだけど、なんていうのかな」

レッドがぼりぼりと頭をかく。

「確かに今は強くないけど、これから戦いの経験を積めば、きつと強くなるって、そう思ったからかな」

レッドがコイキングの入ったモンスターボールを期待に満ちた目で見る。

育てれば進化するという知識をひけらかすわけではない。かといってとぼけているようにはとても見えない。

普通知識のない人間がコイキングを見ればなんと役に立たないポケモンと判断するだろう。

しかしレッドは、期待している。努力の積み重ねの先にあるものを。

「レッド君はさ」

「?」

「もし絶対に勝てない相手、何度戦っても実力の差を見せつけられるような相手がいたら、どうする?」

カスミはレッドではない虚空をみて質問している。

(絶対に勝てない相手……)

『やい、泣き虫レッド!』

「……あきらめない。例え一時的に逃げることや、落ち込むことはあっても、でも絶対勝つてやるって、頑張るかな」

レッドの顔は真剣そのものだった。

「今は、一緒に頑張ってくれる仲間もいるしね」

そして手に握るモンスターボールを見てほころんで笑顔になる。

カスミはレッドの答えに高揚していた。

「うん、そうよね。私やっぱりレッド君のこと、好き」

「え!？」

「ポケモントレーナーとして、ね。そういう風に頑張れる人が、私は好き」

「あ、ああ、そういうこと」

レッドはいつになくどきまぎまぎしていた。

「……」

「カスミさん?」

(……)

ハナダジム、カスミ達4姉妹がジムリーダーになったばかりの頃。

「カスミ！ いい加減にしなさい！ もう勝負はついていたわ！」

泣きながらジムから走り去った挑戦者に見向きもせず、カスミは姉の声に苛立っていた。

「はあ？ 相手のヒットポイントは残っていたわ。そこに全力で技を放って何が悪いの？」

「相手に降参する隙を与えなかったでしょう。最初の一撃で力の差は明らかだったわ。相手もあきらめてた」

（くだらない）

「それがなに？ ポケモントレーナーだったら最後の瞬間まで勝利を目指すのは当たり前でしょ？」

「ポケモンは戦いの道具じゃない。私達と同じ生き物なのよ。ポケモンとの正しい付き合い方、自分達の力量を把握して正しい決断をするのもトレーナーの仕事。そういうトレーナーとして必要な事を教えるためにジムがあるのよ」

「冗談じゃないわ！ ポケモンバトルを行うトレーナーなら常に勝利が一番大事。ボタンス姉達がそんな甘い考え方だから、私に一度も勝てないのよ」

「カスミ!!」



「スターミーも言ってるわ。もつと強い敵を圧倒的に倒す。……ジムリーダーになればカンナさんに近づけると思ってたけど、とんだ勘違いだったみたいね」

「カスミ、待ちなさい！ カスミ！」

（タケシもレッド君も、最後までポケモン達と勝利を目指したからあんな素晴らしい戦いができた。どうしてわからないの、お姉ちゃん……）

「カスミさん？」

「……？ わっ!？」

気がつけばカスミの目の前にレッドの顔があった。

「ごっごめん！ カスミさんすぐくぼうつとしてるみたいだったから……」

「あはは、ごめんなさい。そのとおりです。ねえ、そのカスミさんっていうのむず痒いから、カスミって呼んで？ 私もレッドって呼ぶからさ。お互い堅苦しいの無しにしよ  
うよ」

「そう？ じゃあカスミ、そろそろフシギダネ達のHPが少なくなってきたから、ポケモンセンターに戻ろうと思うんだけど、いいかな」

「ええいいわよ。行きましようか」

姉たちの考えが間違っていることを、この子も証明してくれている。勝利にむかつて邁進する姿がポケモントレーナーの真の姿なのだ。

「うん？ この石つてもしかして……」

レッドがきれいな鉱石を拾う。光が顔に反射して、あどけなさが残りながらもたくましさを備えつつある男子の瞳が洞窟に浮かび上がっていた。

（レッド、本当にいい子だな……。年下だけど結構……）

カスミが持つレッドへの感情がゆるやかに上がっていく。しかし、そんなところに空気を読まない闖入者。

「待て、その二人！ 俺達はロケット団だ！」

「有り金とポケモン全部置いてつてもらおうかあ！」

前方に一人、後方に一人。洞窟の道を塞ぎレッドとカスミ二人を閉じ込める黒尽くめの男たち。

「ロケット団……!?!」

「気をつけてレッド。やつらはポケモンを使って悪事を働く不逞者よ。まさかこんな場所にまでいるなんてね……」

驚くレッドと対照的にカスミは落ち着いていた。少女の一人旅、この程度の修羅場は慣れているし、打開できる実力があると自身確信している。

「行くぞ、坊主の相手は俺だ」

「じゃあ俺は女の子だな。任せてよ兄貴！」

しかし位置がまずかった。前後ろに陣取られてはカスミが二人同時に相手にできない。

(まずいわね……レッドは今回復に向かおうとしていたばかり。戦えるポケモンは)

「大丈夫だよ、カスミ」

「え」

カスミの心配を悟ったのだろう、レッドが落ち着いた言葉を発する。

レッドの手持ちはコイキング以外大分疲弊している事をカスミはわかっていたが

……。

「わかったわ。レッドはそっちをお願い」

「うん」

相対する4人が一齐にモンスターボールを構える。試合とはまた違う、息の詰まる戦いはレッドは初めてだった。

「行けっ！ズバット!!」「イシツブテ！」

「行きなさい！ ヒトデマン！」

「行け！ コイキング！」

『えっ!?!』

驚愕。この状況でレッドが繰り出したのはコイキング！

「ぶっはははあははっは!! なんだそのポケモンは！ やけくそか?!」

「兄貴い！ 楽勝じゃないっすかあ！」

「れっレッド！ 今はレベル上げなんてしてる場合じゃないのよ?!」

「ふざけてなんかないさ」

レッドは大真面目だった。帽子から垣間見える鋭い眼光にレッドに対していた口ケツト団の笑い声が止まる。

「……ほう。なら存分に痛めつけてやる！ ズバット！ きゅうけつ！」

「レッド！ もうっ！」

「やっちまえ兄貴！」

（すぐにこいつを倒してレッドの援護に向かわなきゃ！）

カスミからすればレッドが何を考えているかわからない。幸いイシツブテを出したこの相手は大したことなさそうだった。

「ヒトデマン！ ハイドロポンプ！」

「ぐえっ!？」

カスミがイシツブテを出したロケット団の手持ちを蹂躪していく。

対して、レッドは全員の予想通り苦戦していた。

「どうしたどうしたあ！ この程度かよ」

「……頑張れ、コイキング」

レッドは静かに待っていた。勝利のチャンスを。

「ぐあああ！ 兄貴！」

「レッド！ 今行く！」

そうこうしているうちにカスミが決着をつけたようだった。しかし、

「うおお！ 兄貴の邪魔はさせねえ！」

「え!? しまった！」

カスミは逸る気持ちで油断していたのだろう。相手がまだ一体残していたことに気がつかなかった。そして最後に繰り出してきたイシツブテの狙いは、天井。

「いわおとしだ！」

「あっ!？」

狭い通路の中で岩の天井が崩れる。カスミは間一髪でかわしながらヒトデマンを操りイシツブテとロケット団の一人を戦闘不能にしたが、レッドと完全に分断されてしまった。

「レッド！」

「ははは、そんな弱っちいポケモン出してよくカッコつけたもんだな坊主！」

「……」

しかしレッドの眼光の鋭さは変わらない。コイキングもよく耐えていた。

「ちっ！ 気に入らねえなその眼！ ズバット！」

「ギャア!!」

コイキングを襲っていた刃がレッドの頬をかすめる。

「あつあんた！ レッド！ どうして他のポケモンを出さないの！」

岩をどかし、かろうじて顔が見える程度に穴が空いた土砂からカスミの悲鳴が響く。

「違う」

「なに？」

レッドの声は、憤怒に満ちていた。

「あんたにはわからないのか。ズバットの気持ちか」

「ズバットの気持ちだあ？ なにを訳のわからないことを」

「コイキングがここまですんでなぜ耐える事ができていると思う。あんたの命令に対して、どうして俺がこの程度ですんでいると思う？」

「なにい？」

ロケット団の男はレッドの顔を見る。確かに顔を切り裂いたつもりだったが、かすり傷程度ですんでいる。コイキングも思えば、硬すぎるような……。

「ポケモントレーナーはポケモンと息を一つに合わせ、お互い理解しあわないと力を発揮できない。あんたが何回ズバットに命令しようと、俺と俺のポケモンは倒せない」

「何を馬鹿な！ いい加減とどめを刺せ！ズバット！」

ズバットが何度もレッドの顔や体を襲う。しかし、レッドを守るかのようにコイキングがズバットの回りを跳ねまわった。

「ちよこぎいな魚が！……え？」

そこでロケット団の男は初めて気づいた。ズバットが傷んでいる。

水ポケモンのエキスパートであったカスミも、その言葉でやつと気づいた。

（コイキングははねてたんじやない！ あれは、”わるあがき”）

「想いが通じあっていない力など、ありはしない！ あんたもポケモントレーナーのはしくれなら、ズバットの声をかたむけてみる！」

「なっ……!!？」

ズバットの羽ばたきが疲労からか、がくんと落ちた。

「そこだコイキング！」

コイキングのわるあがきは急所にあたった！ズバットは倒れた。

「嘘だろ……!!？」

「嘘……!!？」

カスミですら目を疑った。こんな勝利見たことがない。

「ぐっ……………」

「レッド！」

レッドも経験したことの無い痛みで膝をつく。しかし、それでもなお彼は語りかけた。

「くっ…………ポケモンを道具になんか使わないでくれ。俺は…………あんなつらそうに戦うズバットを…………見たくない…………」

「なっ…………!？」

(つらそうだと…………こいつ、ポケモンの気持ちがわかるとでもいうのか!?)

「レッド!!」

カスミがレッドに駆け寄る。ロケット団の男の手持ちは残っていたが、コイキングが見せた常識外のガッツ、そして年端もいかない少年の感情に満ちた言葉に、なぜか体が動かない。

「小僧…………お前は」

「あっ…………兄貴！ ジュンサーが!!」

オツキミ山で誰かが騒ぎを聞きつけて通報したのだろう。ロケット団二人はあつと  
いう間にお縄になった。



「レッド……」

「大丈夫、ありがとうカスミ」

レッドがカスミの手を借りて、なんとか立ち上がる。

「小僧、一つ聞かせろ」

ジュンサーに手錠をかけられた男が、レッドに問う。

「どうして、お前はコイキングで勝てると思った」

レッドは迷わずに言った。

「コイキングの熱い闘志が、伝わってきたからだ」

シラフでこんなことを言う奴がいる。ポケモントレーナーという称号は、こんな少年

を生むのか……。

「熱い、闘志……」

カスミも思わず、レッドの言葉をつぶやく。

「……そうか。俺のズバットは、なんて言っていたのかな……」

「ちゃんと向き合うんだ。その手にモンスターボールを掴んだのなら。聞こえる日が来るはずだ」

「……」

「兄貴……?」

ロケット団の男は連れいかれる最後に、微笑んだような気がした。

「ふう、もうすぐ山頂だねカスミ」

「……そうね」

一度ニビシテイまでもどつた二人はレッドの傷の回復を待ち、オツキミ山の踏破に望んだ。

正直カスミは途中でレッドを残して引き返すつもりであった。カスミはただ今家出中である。

しかしレッドと別れるのが名残惜しく、結局ここまでついてきてしまった。

「カスミ！ あれピツピだよね！」

洞窟から外に出た山頂付近、満月の下の円形にくぼんだ場所にピツピが群れで円を作って踊っている。

「えっうそなにあれ!? 私もあんなの初めて見た……」

そのうちの一匹が円から外れ、レッドとカスミの手を引く。突然の友好的な動きにポケモンを出すという選択肢が頭に沸いてこない。

戸惑いながらも円の中心に導かれるレッドとカスミ。一匹のピツピが、レッドのポケットをしきりにつついている。

「あつ……そうか、博物館で見たのとやっぱり同じ、これは月の石か」

レッドはそれをピツピに導かれるまま、天高くかかげる。月の石が輝き、円になって踊っていたピツピ達が光の粒子をまとって宙に浮いていく。

可愛らしい鳴き声と共に夜空に光のカーテンを作りながら、月の石の力を得たピツピが夜空に舞いながらピクシーへと進化していく……

「綺麗……」

「すごい……」

「レッドへの、ご褒美かもね」

「ご褒美？」

「オツキミ山の平和を魔の手から守ってくれたっていう、ご褒美」

「それだったら、カスミも同じじゃないか」

「私は別にいいわ」

光のカーテンが終わり、ピクシーが夜空へ消えていく。

それと同時に、カスミはレッドから距離をとった。

「カスミ？」

「ここからは一本道だから、ハナダシティまで迷うことはないわ。私は一足先に行つてるね」

「カスミ……？」

カスミがレッドへ背中を向ける。

「ハナダで待つてる」

その一言でカスミは闇に消え、レッドから見えなくなった。

カスミが待つているであろう場所が、レッドの頭に浮かぶ。

なんの根拠もなかったが、不思議な確信があった。

コイキングの勝利を疑わなかったのと同じような確信が。

(私があの時、レッドと同じ状況だったらコイキングを勝利に導けただろうか)

ハナダジムは波立っていた。久方ぶりの帰還。ジムリーダーだけが許される最奥の間、出て行く時は陰鬱でしかなかったこの場所が、今は妙に馴染んでいる。

「一体どういふ風の吹き回し、カスミ」

「お姉ちゃん……」

姉はカスミを咎めなかった。今の言葉も笑顔で言っている。

「勝手にごめんね、おねえちゃん。私がここで抱いた疑問、お姉ちゃんに言われた言葉

……私の心に霧がかつていたものの形が見え始めてる」

あのロケット団の男の心には確かに、ポケモントレーナーの火がくすぶり始めていた。そうさせたのは間違いなく……。

(ただ勝つだけじゃない。ポケモンと人との心のつながり)

「その霧は、あの子によって晴れるのかしら」

姉が入り口に現れた男の子を見つめる。

「わからない。でも私は、確かめたい！」

おてんば娘はモンスターボールを手にする。

「待っていたわレッド」

「カスミ……」

「ふふっ。驚いた？」

「少しね。でも、納得したかな。今のカスミはきつと、俺が今まで相手してきた誰よりも

手強い気がする」

「気がする、じゃないわよ」

水辺のバトルスペース。互いに好戦的な笑顔を向け合い、構える。

「私はハナダジムリーダーのカスミ。水を司るポケモントレーナーよー」

「マサラタウンのレッド！」

『バトル開始！』

「行け！ フシギソウ！」

「行きなさい！ ヒトデマン！」

フシギソウのつるのムチを、ヒトデマンが水鉄砲の水圧ではたき落とす。

（私は勝利こそがポケモントレーナーの至上の喜びだと思っていた。勝利を目指せない奴はただの根性無しで眼中に入れる必要なし。そう思っていた。だけど、レッドの考えは違う。ポケモントレーナーで一番必要なのは勝利じゃない！ ポケモンは私達と同じ、感情のある生き物）

フシギソウのつるのムチが逃げるヒトデマンを追い詰めるが、ヒトデマンはひるまずフシギソウに肉薄する。

カスミは懸命にヒトデマンを見つめる。今草ポケモンに追い詰められたヒトデマンになにを命令すればいい。

（ヒトデマンはフシギソウを恐れてない！ ならば！）

「ヒトデマン！ スピードスター！」

「なに!？」

『フシギソウ戦闘不能!』

（昔の私だったら、ヒトデマンをあきらめて即効で次のポケモンで仕留めようと考えてたわね……）

「さすがだ。カスミ」

「当然よ。さあまだ終わりじゃないでしょ」

「もちろん。行け！ コイキング」

「容赦しないわよ」

しかし、ヒトデマンの動きが鈍った。鳶が絡みついている。

(やどりぎ!?)

「コイキング、たいあたり!」

『ヒトデマン、戦闘不能!』

(そうよねレッド。私達は強くなれる。ポケモンと二つ心を合わせれば、どこまでも!)

「行きなさい! スターミー」

コイキングが光がかやき、青き龍となってスターミーに相對する。

レッドが図鑑を確認し微笑む。

「すごい……やったなコイキング。いや、ギャラドス! 行くぞカスミ!」

「ええ、この戦いで決めるわよ!」

「バブルこうせん!!」

「かみつく!!」

大口を開けたギャラドスがスターミーに迫り、その口めがけてスターミーのバブルこうせんが炸裂する。

迫るギャラドスの動きはゆっくりになるが、確実にスターミーに迫る。スターミーの

バブルこうせんの勢いは止まらなかったが、ギャラドスの勢いもまた、止まらなかった。

ガシッ！

「行けっ！ ギャラドス!!」

「スターミー!!」

カスミは勝利のためスターミーを懸命に見た。そして、理解した。スターミーが引いている。

(あ………あんた、結構臆病だったのね………ごめん)

『スターミー戦闘不能！ 挑戦者レッドの勝利!』

「新しいポケモンかと思ったわ……」

「まさかあれが預かりボックス開発者のマサキさんとは……」

戦いが終わり、レッドはカスミにそのまま腕を引かれハナダの岬にまで来ていた。

名目はポケモントレナーならば一度ポケモン預かりボックス開発者のマサキさんに会った方がいいという事だったが、どうやら本命はその帰り道にあったらしい。

「かつカスミ………ここって」

「ふふ、なに恥ずかしがってるの?」

二人がいるのはハナダで話題のデートスポット。夕焼けが綺麗に見えるハナダの岬。



レッドとカスミの回りには多くのカップルが自分たちの世界に浸っている。

「私達もそう見えるかしら？」

カスミはいたずらっぽい笑みを浮かべて舌を出す。レッドからすれば本気なのか冗談なのかわかりかねる。

「えっと……」

「レッド、目をつむって」

「え」

レッドの顔が赤くなる。恐る恐る目を瞑ると、カスミがレッドに近づき……

「はい、これ」

「あ」

カスミがレッドの手を取り、何かを握らせる。目を開けるとハナダジムバッジが輝いていた。

「ハナダジムリーダーカスミがレッドの実力を認め、これを進呈します」

「ぶっ、似合わないよ」

二人静かに笑い合う。そして、ゆっくりと見つめ合う。

「私、もう一度ジムで頑張ってみる。ポケモントレーナーとして強く、大きくなりたいから」

「そっか、じゃあお別れだね」

「レッドは、これからどこへ？」

「とりあえず、タمامシティを目指すよ。フシギダネとの付き合い方を教えてくれた、大切な人がいるんだ」

「それって……」

カスミに芽生えた静かな対抗心。

「レッド、眼を瞑って」

「え、さすがに二回目は……」

と言いなながらも目を瞑るレッド。

チュツ

「……………?!?!?!」

呆然としたレッドをよそに、真赤になった顔を悟られまいとカスミが逃げ出し、距離があいたところで振り返って叫ぶ。

「中途半端な所であきらめちゃだめよ！ レッド！」

「……………ああ！」

ハナダの岬で、二人のポケモントレーナーが一つ扉を開く……。

## クチバシテイ

「そこだフシギソウ！」

「フシー！」

フシギソウが木々から落ちる葉っぱをつるのムチで正確に撃ち落としていく。

豪華客船サントアンヌ号が停泊する港町クチバシテイ。レッドは3個目のバッジ、クチバシテイジムへの挑戦のため郊外でポケモン達とトレーニングを進めていた。

「OKだフシギソウ。少し休憩にしよう」

「フシー」

レッドは地面から突き出た木の根に腰を下ろし、フシギソウにポケモンフードを投げた。フシギソウは元気に口で受け取る。

レッドの気分は期待で高揚していた。ニビのタケシ、ハナダのカスミ、二人共ポケモン達と強い絆で結ばれている素晴らしいポケモントレーナーであり、そのバトルは非常に心躍るものだった。

クチバシテイジムリーダーとはどんなポケモントレーナーなのか、どんな熱いバトルができるのか。今から楽しみで仕方がない。

「わあ、すごい！」

「ポケモンだあ！」

「ん？」

「フシ？」

レッドよりも背の低い男の子と女の子。二人はフシギソウの事を物珍しそうにキラキラとした目で見つめている。

「フシギソウを見るのは初めてかい？」

レッドは優しく微笑んで二人に話しかける。

「うん！」

「ねえ、触ってもいい？」

「ああ、フシギソウ」

レッドが声をかけるとフシギソウが二人に近づいていく。二人は歓声を上げてフシギソウに手を伸ばして頭をさすった。フシギソウも嬉しそうだ。

「ねえ、お兄ちゃんもポケモントレーナーなの？」

「ああ。ジムバッジ8つ集めて出場できる、ポケモンリーグを目指してるんだ」

「すごい！ 今何個？」

「今は二つ。これからクチバシテイのジムに行くつもりだよ」

「いいなあ」

「私もポケモン欲しい……」

「慌てなくても大丈夫さ。10歳になれば誰だってポケモントレーナーになれるんだ。君たちだってすぐに……?」

「……」

そこまで言って、レッドは二人の顔が沈んでいることに気づいた。レッドも戸惑う。

「旅の方、その子たちはポケモントレーナーになれないんじゃないよ」

「え」

レッドたちから少し離れたところから、紳士服に黒のシルクハット、白い立派なひげにサングラスをかけていながら、丸々とした体で愛嬌のある老人が歩いてきていた。

「あなたは……?」

「失礼、わしはこの街に居を持つポケモンだいきクラブの会長じゃ」

「ポケモンだいきクラブ?」

「ポケモンが好きなき者達が集まる集会のことじゃ。その子たちの親もポケモンだいきクラブの会員なんじゃよ」

「そんなクラブが……えつ、でもそれならなぜこの子たちはポケモントレーナーになれないんですか?」

「……ポケモンだいすきクラブへの入会にはいかなる制限も設けておらん。ただポケモンが好きならば誰でも歓迎するクラブなんじゃ。じゃが……」

老人がサングラスの奥に悲しさを臨ませる。

「中にはポケモンを好きなあまり、ポケモンを戦わせるのを良しとしない者達もいるのじゃ。他人のポケモンでもバトルを見るだけで拒否反応をしめしてしまう。その子たちの親もな……」

「……！ ……だからポケモントレーナーにはさせないと……!?!」

レッドは驚愕で目を見開き、固まってしまった。フシギダネと出会い、バトルを通して様々な人とポケモンと大切な絆を築き上げてきたレッドからすれば、この事実は晴天の霹靂だった。

「ねえ、お兄ちゃん。ポケモンで戦うことってだめなことなの?」

「無理やり戦わせることは、野蛮なことなの?」

「え……」

二人の少年少女の純粋な視線が突き刺さる。会長もレッドを見ていた。

レッドは目をつむり、心を落ち着かせる。そして湧き上がる自分の正直な気持ちを伝えた。

「そんなことはないさ。俺とフシギソウは今まで様々なトレーナーと戦ってきたけど、

戦わなかった方がよかったなんて思ったことはない」

レッドがフシギソウを手招きし、フシギソウがレッドが差し出したてに頬を寄せる。

「ポケモンは感情のある生き物。だからこそ共に心を通わせて自分たちが目指す高みに一緒に登ることができる。喜びも悲しみも分かち合い、辛くて諦めそうになっても自分の中の弱さに打ち勝ち、新しい自分に成長できる」

あの人が最初に教えてくれた、ポケモントレーナーで最初に必要で、もつとも大切なこと。

「熱いバトルを通して絆を深めることができる、それがポケモントレーナーのポケモンバトルなんだ！」

二人の少年少女にレッドの熱が伝染したのか、二人は拳を握りしめて頬を緩ませわくわくしている。

老人は一度下を向き、なにか意を決したのかレッドに向き直る。

「旅の方、その心意気を見込んで、一つ頼まれてはくれんか」

「頼み？」

「クチバシテイのジムリーダーマクスは、戦争帰りのポケモントレーナー。戦いを冗長させるとして、最近うちの一部の者達と一悶着おきてしまったのう」

「……それで、俺がなにを？」

「クチバシテイジムリーダーに挑むさい、マチスとトラブルを起こした者達を観戦させたいのじゃ」

「え!? でもそれって」

「ポケモンと人とはそれぞれに合った千差万別の付き合い方がある。ポケモンをだいきと称する者達として、ポケモンバトルに好悪があっても理解はして欲しいのじゃ……」

「会長さんは、バトルのことは？」

「積極的に戦いはせんし、観戦する趣味も持つとらん。だがのう、ポケモンと人が一つになれる舞台であるとは思っておる」

「……」

「君はポケモンと確かな絆を築いているようにわしは見た。どうか、ポケモンを愛するが故視野が狭くなった者たちに、あつと目を覚まさせるようなバトルを見せてくれんか」

（俺は……）

レッドの脳裏に、穏やかな草ポケモン使いの淑女が浮かぶ。

『ポケモンに一つ命令するのもこんなに難しいんだね。フシギダネと呼吸を合わせられ



ない……』

『なら諦めますか』

『まさか。……でもフシギダネは、命令を聞くのが嫌なのかな』

『最初から心が通じ合うことはそうありません。相手の気持ちを考え、そして自分の考えを伝える。通じるまで伝え合うことが肝要です』

『通じるまで、か……。でも例え全部伝え合っても、考えが違ったら？ 考えの違いで衝突することもあるんじゃない？』

『結構なことじゃないですか。お互いの本音をぶつけ合わずに得た絆など、紙のように薄いものです。一体何を目指しているのか、目指しているものがぶれなければ、その道程で曲がりくねっても引き返しても、歩みは決して無駄なものではありません』

『目指している、もの……』

レッドの瞳を真っ直ぐに貫き、厳しさと優しさを伴った彼女の言葉を、レッドは心に刻んでいる。

『“その先にある喜びを、大切な仲間と共に”。……その心を忘れなければ、ポケモン達はきつと、応えてくれますよ』

「……やります。俺と仲間で、ポケモンとポケモントレーナーとして、できることがあるなら」

クチバシテイジム、そこは電気ポケモン達の館。

ゴミ箱に秘められた電磁ロックを解き明かした先に待ちかまえるは、ジムリーダーの中でも屈強な経歴を持つアメリカン。

(元軍人……一体どんな……)

レッドの短い人生経験では想像もつかない。文字通り命をかけて戦場を駆けたポケモントレーナーが、レッドの実力を量るために待ち受けているのだ。

目に見えぬプレッシャーに耐え、ゆつくりと扉をくぐる。そこには……。

「ヘーイ！ コン、ニチハ！ ミーがここのジムリーダーのマチスね！ プアリトルボーイのチャレンジャーでもお、フウルパワーネエ！」

「……は？……はい……？」

迷彩服の上からでもわかる分厚い胸板に大柄な体、四方に尖った金髪にいかつい顔。その全てに似つかわしくないハイテンションな笑顔で、マチスはグツと拳を突き出したポーズでレッドを歓迎した。

だいすきクラブの会長から聞いた話から、もつと厳格な壮年の男性を想像していたのだが……。いや、見た目は割りと想像通りだが、纏う空気が斜め上に行っている。

「オー、あれは……」

マチスが観客席を見て目を細める。レッドも気づいた。ポケモンだいすきクラブの

会長と大勢の大人達、そしてレッドに以前話しかけてきた二人の子供もいる。

「お兄ちゃん！」

「頑張つてー！」

「ああ！」

はしゃぐ子供と笑顔で応えるレッドをよそに、他の大人達は皆一様に渋い顔だった。会長がどう言つて連れてきたのかは知らないが、彼らはこの状況が面白くないのだから。

「マチスさん」

「オー！ ソーリーネ！ ユーとのバトル、ミーもとっても楽しみネー！」

「はい、俺もです。一つ聞きたいことがあるんですけど、いいですか？」

「モチロンネー！」

「マチスさんはどうして、バトルを嫌うあの人達をポケモンバトルに誘つたのですか？」

それが原因で喧嘩の一手手前までいったと、会長さんから聞きました」

「……」

マチスの纏う空気から陽気さが消える。

「ユーには関係ないネ」

「！」

マチスは別にレッドを睨みつけたわけでもなければ、語気を強めて言ったわけでもない。むしろ余計な事には首を突っ込むだけ面倒になるというような、氣遣いすら感じた。

しかしここで引くわけにはいかない。

「俺も考えていました。もし俺と俺のポケモン達が続けてきたバトルが否定されたら、どんなに悲しいか。バトルを嫌う人たちにも考えがあるのはわかっている。だけど、俺の感情がどう動いてしまうのか想像もつかない。あの人達になんて言えばいいのか、答えがでない」

レッドは声を張り上げる。観客席にも聞こえているだろう。

「やめるネ。ボーイみたいなチルドレンは純粹にバトルを楽しめばいいネ」

「俺は昔、無口で泣き虫だった。ずっと自分を変えたくても弱い自分に打ち勝つ勇氣がなかった。そんなときフシギダネと出会って、ポケモンとの絆の大切さを教えてくれた人がいた。努力と研鑽の上に、人とポケモン二つの心を合わせたバトルの勝利が、新しい世界の扉を開いてくれた！」

「……」

観客からざわめきが聞こえる。マチスは笑顔を消し、レッドの言葉を待っている。

レッドはフシギソウが入っているモンスターボールを握りしめる。

「見方を変えれば暴力のぶつかり合い。だけど、バトルを通して得られる確かな光があることを伝えたい。言葉では言い表せない、心を震わせる光を！」

「……ユーは本当にホットなポケモントレーナーネ。タケシとカスミの言うとおりネ」

「え」

レッドが疑問の声を上げるまもなく、マチスがモンスターボールを構える。戦場で好敵手と対峙した時のような笑顔を張り付かせて。

「それじゃあ、エキセントリックなバトウ！ 見せてみるネエ！ 電気を操るクチバシティジムリーダー、マチス！」

「マサラタウンのレッド！」

「GO！ ライチユウ！」

「行け！ フシギソウ！」

『バトル開始い！』

「そこまで言うならミーの一撃、耐えてみるネエ！ ライチユウ！ 10万ボルト!!」

「ラーイイ!!」

レッドが今まで見たことない痛烈な一撃。あまりの電撃の眩しさにレッドは目を細める。

「フシギソウ!!」

「フシい……!!」

フシギソウの立っている場所、その横の地面にすざましい焦げ跡残っている。

「なんとかダイレクトを避けたネ。だけど……」

「よしフシギソウ、反撃だ!……えっ!」

「フっフシ」

フシギソウの様子がおかしい、動きがぎこちなく反応が遅い。

「ミーのライチュウの10万ボルトは凄いパワーを持つてるネ! 足が止まれば、エレ

キトリカルカーニバルネ!」

「まずい! フシギソウ! はっばかったー!」

「フツ……!?!」

(ダメだ! しびれて動けない)

「今度は直撃ネ! ライチュウ! 10万ボルト!!」

「ラー……イイ!!」

「避ける、フシギソウ!」

無情だ。レッドの悲鳴は意味が無い。

「フシイアアア?!」

フシギソウに10万ボルトが直撃する。草タイプは電気技に強いとは言え、強烈な一撃にフシギソウの悲鳴が響く。

「ああっ!」「フシギソウ!」

観客席の二人の子供の声が木霊した。それだけじゃない。

「一気にとどめね! ライチユウ! 10万ボルトワンモア!!」

「くっ……フシギソウ! つるのムチ!」

しかしつるはライチユウに伸びず、10万ボルトがまたもフシギソウに直撃する。

「フシイイイ!」

(耐えてくれ! フシギソウ!……この声は!?)

『……なんてかわいそう』『やっぱり野蛮ねバトルなんて』『会長に言われてきたが、これはよくない』

「ほら二人共、帰るわよ。ポケモンが苦しむところなんて見てどうするの!」

「え……でも!」

「ん……」

(レッド君……)

会長は何も言わず、戦況を見つめている。

(違う……)

「……悲しいけど、これもポケモンバトルネ」

マチスの顔から好戦的な笑顔が消えていた。ただ、戦場で傷を負う相手を介錯するようライチユウに命令を下す。

(違う)

ライチユウが帯電し、マチスの命令を待つ。フシギソウは動かない。

(違うよなフシギソウ)

「ジ・エンドネ。ライチユウ！ 10万ボルト！」

特大の電光がフシギソウへ走る。

『おめでどうレッド君。こんな清々しいバトルは久しぶりだった』

『中途半端な所であきらめちゃだめよ！ レッド！』

『“その先にある喜びを、大切な仲間と共に”。……その心を忘れなければ、ポケモン達はきっと、応えてくれますよ』

(俺達のバトルはっ！ なによりも強靱な……絆の証だあ!!)

「……今だあ!! フシギソウ!!」

フシギソウの眼がかと開き、フシギソウの体から伸びていたつるのムチが脈動する。

(ワッツ!? あの動きは何ネ? ……あ!)



フシギソウのつるのムチはしっかりと発動していた。しかし目的は攻撃ではなく、地面。地面に突き刺さったつるのムチが地表をすくい上げるように張り巡らされ、一気に跳ね上がる。

(地面を、めくり上げる!!)

つるによつて繰り上がった地面がフシギソウの前方に展開され、電撃と相殺する!

『なっなんだ!?』『いつあんな命令をしたの!?』『あのフシギソウ、痛くないのか……?』

「……すごい!!すごいよお兄ちゃん!フシギソウ!!」

「(ハ、ハ)ら……!」

「頑張れ!!」

地面と電撃の衝突でライチュウとフシギソウの間に砂埃が舞う。レッドは畳み掛ける。

「はっばカッター!!」

「フツシー!!」

「ライイ!?!」

「オーノー!?!」

砂塵を切り裂き現れたはっばカッターがライチュウに直撃する。

「フシギソウ！」

「フシ！」

それだけで二人は通じあっていた。ライチュウが怯んでいる隙にフシギソウがレッドのもとに駆け戻り、レッドは回復アイテムを施す。

「卑怯とは言いませんよね？」

「モチロンネ！ 状況を見て的確にアイテムを使うのも、ポケモントレーナーネ！」

ライチュウが体制を立て直すと同時に、マチスがレッドに笑顔でサムズアップする。

「さあ、仕切りなおしだ！ 勝つぞ！ フシギソウ!!」

「フシ!!」

「迎え撃つネ！ ライチュウ！」

「ラアイ！」

『なんて息のあった動きが……』『どうやったたらあんなに分かり合えるんだ？』『戦っているのに、どうして』

「楽しそうなのか、かな？」

「え」

連れてきた観客のつぶやきに、会長が答える。

「傷ついても、倒れてもなお、フシギソウは前を向いて戦う。それは、レッド君が強制させているからじゃろうか」

フシギソウとライチユウの技がぶつかる。二匹は、笑っていた。

「皆、あの子、レッド君とフシギソウを見てどう思う」

「……」

「……かつこいいい！」

小さな男の子は、眼を輝かしている。

「私も、ポケモンとあんな関係を築きたい」

小さな女の子は、胸に手を当てる。ポケモンから目を離さない。

「……わしもじゃ。ポケモンとトレーナー、共に頑張り、共に理解し、共に苦難に立ち向かう。そんな事ができるのは彼らが」

戦う彼らが輝いて見える。

「ポケモンが、大好きだからじゃろう」

「……………!!!」

「行けー！お兄ちゃん!!」

「フシギソウも頑張つてー!!」

二人の子供の声援が、観客席から届く。

「……ああ！ やれるよなフシギソウ！」

「フシ!!」

「……………頑張れー!!」

（!!今のは!?!）

子供の声じゃない。この声援は…………!?!

『頑張れー!!』『そこだー!行けー!!』『もつといいとこ見せてー!!』

「レツドくーん! 頑張るのじゃあー!!」

あの大人たちが、ポケモンバトルに反対していた大人たちが叫んでいる。会長まで。

「……………凄いね、ユーは」

レツドは首をふる。

「俺のフシギソウとあなたの素晴らしいライチュウの熱い闘志が、伝わったんです。彼らが傷つき、それでも立ち上がって見せる不屈の精神と頑張りが、暖かく熱を持った声援となつて帰ってきた」

ポケモン達が中央で対峙する。帯電するライチュウ、葉っぱカッターを蕾の発射台に備えるフシギソウ。

「さあ、決めるぞ。フシギソウ」

「フシ!!」

「クライマックスね! ライチユウ!」

「ライ!」

戦いの中、ライチユウの位置取りは絶妙だった。フシギソウが追い詰められていたのは自分がめくり上げた地面の場所。土が柔なくなっておりこれでは砂埃しかあげられない。

「もう地面のバリアは使えないネ! ライチユウラストアタック! 10万つボルトオオオ!!」

レッドも慌てない。フシギソウもしっかりと前を見据えていた。

「はっば、カッターア!!」

「ノー!? はっばカッターが曲がる!」

フシギソウが放ったはっばカッターはライチユウの電撃には真向から当たらず、フシギソウの左右から弧を描くようにカーブしてライチユウに直撃した。

しかし当然、フシギソウに10万ボルトが直撃する。

「フシっ!?!……フシイイイ!!」

「ラアアアアイ!!」

悲鳴ではない、勝利を得るための戦士の雄叫び。痛みに耐えながら、フシギソウが、ラ

イチユウが絶え間なく相手に攻撃し続ける。

「ゴオオオオオオオ!! ライチユウ!!」

「行けえええええ!!」

少年と少女は、この日を一生忘れないだろう。

「凄い……」

「これが、ポケモントレーナー……」

決着がつこうとしている。

フシギソウがライイチユウの10万ボルトに押され、後退していた。

「ライイチユウ!! ユーアーザ・ベストネー!!」

「フシギソウ……!!」

「フシィ……!!」

それでもフシギソウは、はっぱカッターのカーブを正確に制御して打ち続ける。

（フシギソウの闘志は、決して諦めていない!! 俺がここでフシギソウの力になってやらなければ! なにか、なにか勝利の手立ては……）

レッドは閃く。しかしこれは大きな賭け。失敗すれば均衡がやぶれ敗北は確実。しかしこのままでは。

『やれる!!』

(!!)

幻聴か。いや。

「……フシギソウ！ つるのムチ!!」

「ワッツ!!」

信じられないことが起きた。フシギソウはライチュウの10万ボルトを受けながら、はっぱカッターを放ちながら、つるを勢い良く伸ばしてライチュウに叩きおろした！

「ラ!？」

ムチは正確にライチュウの脳天を叩き、10万ボルトの勢いが弱まる。そして、

「ラア……イ」

10万ボルトとはっぱカッターの放出の終わりはほぼ同じ。しかし地面に伏すライチュウと、悠然と立つフシギソウ。

レッドは両の拳を天に突き上げて、感情を爆発させた。

『ライチュウ戦闘不能！ 勝者、挑戦者レッド!』

クチバシティジムのバトルスペース。今は回復させたライチュウと共に、マチスは観客達を招いてバッジの授与式を行った。

「ナイスファイトネ！ これがジムリーダーが認めた証、オレンジバッジネ！ コングラッチュレーション！」

「ありがとうございます……!! やった……!!」

「わしからも言わせてくれ。おめでどうレッド君」

「会長……!!」

「お兄ちゃん! おめでどう!」

男の子と女の子もレッドに駆け寄ってくる。

「けどミーもびつくりしたネ! あそこでするのムチを使うなんて! ユーにはなにか確信があつたノ?」

レッドは気恥ずかしそうに答える。

「フシギソウの、声が聞こえた気がしたんです。やれるって。今思えば、変な話なんですけど」

「全然、変じゃないヨ!! それはユーとポケモンの心が通じあつてる証、スペシャルフレンドなら当然ネー!」

笑顔でレッドを称えるマチスに、会長が連れてきた大人の一人が近づく。

「マチスさん、私達はあなたを誤解していた。あなたが話しかけてきた時、ロクに話も聞かずに敵視して……」

「ミーの経歴を考えれば仕方ないね。でもミーはただ、最近ロケット団がポケモン泥棒を行つてるから、ポケモンをセーブするための講習に誘いたかっただけネ」



「なっ……そうだったのか……。私達はそうとも知らず……」

「お母さん、受けよう」

「そうだよ。バトルのやり方くらい覚えとかなないと、なにかあつた時に守れないよ！大切なパートナーなんだから！」

二人の子供が親に訴える。いや、ここにいる全員に訴えていた。

「！ あなた達……そうね。そうよね」

「マチスさん」

会長がマチスに話しかける。

「ポケモンだいすきクラブを代表してお願いしたい。どうか私達に、大切なパートナーを守る術を授けてはくれまいか」

「モチロンネ！ バット、一つだけ条件ありまーす！」

「条件とは……？」

「ミーも、ポケモンだいすきクラブに入れてほしいネ！ ミーはピカチュウがだいすきネー！」

後ろでライチュウがおいとツツコミを入れてる気がするが気にしないほうがいいだろう。

「……っ。もちろんじゃー！」

「イヤッホー!! じゃあさっそく、今日の午後からネー!」

「それと、レッド君。本当にありがとう、心ばかりの礼に、これを……」

「これは……!」

レッドが受け取ったのはポケモンだいすきクラブの会員証。そしてもう一つは高級マウンテンバイクの引換券、レッドの年齢ではまず手が出せない代物だ。

「ありがとうございます! でもこの引換券は……」

「君とポケモンとの絆には、それ以上の価値があるとわしは思っているよ」

「はい……ありがとうございます!」

クチバシテイジムを出ると、レッドは旅支度を整えてクチバシテイの端に来ていた。

「もう、行っちゃうの?」

見送りには少年と少女、そしてポケモンだいすきクラブの会長が来ている。

「ああ、まだまだ新しいポケモンと冒険が待っているんだ。またクチバシテイに寄ることもあるだろうから、その時は……」

「違うよ」

「え」

「私達、こことは遠い場所の出身なの、明日、サントアンヌ号で帰っちゃう」

「そうだったのか……。じゃあこれならどうかな」

レッドが二人の手を握る。

「俺はここで、誰よりも強いポケモントレーナーになって有名になる。そしたら君たちもポケモントレーナーになって名を挙げるんだ。そうすればどこに行っただってお互いの事がわかるし、会うことができるだろう？」

「そっか」

「うん、そうだね」

「……っと。そういういえば二人の名前を聞いてなかったな。聞かせてくれないか？」

「ブラック！」

「私はホワイト」

「ブラック、ホワイト。俺は絶対に、二人を忘れないよ」

「うん!!」

「レッド君、ポケモンだいすきクラブは、いつでも君を待っている」

「はい、また必ず伺います。会長もお元気で」

「うむ」

「ヘーイ！ プアリトルボーイ!!」

大声をあげながら走ってくるマチスは怖い。

「マチスさん!？」

「オーキド博士から伝言ネ! ニビシテイの博士の助手の元に行つて、届け物を取りに来て欲しいって言つてマース!」

「ニビシテイ!? 仕方ないか。少し遠回りになるけど……」

レッドはタウンマップを開く。すると会長が指差し、

「ニビシテイならここからダイグダの穴を抜けてすぐじゃ。それからハナダに行けば引換券の使える自転車屋がある。今ヤマブキへは通行止めになつているから、ハナダからイワヤマトンネルを通つてシオンタウンに行き、地下道からタمامシシテイに行くのがいいじゃろう」

「なるほど……ありがとうございます……それじゃあ、行つてきます!!」

レッドは会長、マチス、そして未来のポケモントレーナーに手を振つて旅立つ。

ポケモンを大好きな心と、熱い闘志をその胸に宿して。

## シオンタウン

シオンタウン。そこはイワヤマトンネルを抜けた先にひっそりと軒を連ねる小さな町。

目を引くのはカントー地方全体を見ても一二を争うであろう高さを誇る、ポケモンタワー。

(タケシさんと特訓したり、カスミを自転車の後ろに乗せて遠乗りに行ったりで、妙に時間がかかってしまった)

イワヤマトンネルを悪戦苦闘の末に突破したレッドは、自転車を降りてこの小さな町が放つ異様な雰囲気戸惑っていた。

(なんだか、寂しげなところだな……。とりあえず、今日はこの街で一泊しよう)

「おや、旅の方かい」

「!？」

静かな町で不意に穏やかな声で話しかけられたために、レッドは珍しく体をびくつかせた。

しかし見れば、話しかけてきたのはこれまた声と同じく穏やかそうな御老人。レッド

は向き直り、

「はい、マサラタウンから来たレッドと言います」

「おや、マサラ……つい先日にもマサラタウンからポケモントレーナーがこの町に訪れたよ」

「え」

マサラタウンのポケモントレーナー。レッドの頭に浮かぶのは一人しかいない。

「その様子だと、君のお知り合いかな」

「ええ多分。そのポケモントレーナーの名前って……？」

「すまんねえ。その子は名乗らずにさっさと町を出て行ってしまったんだ。お礼を言いたかったんじゃが……」

「その子って俺と同じぐらいの年頃で、茶髪でツンツンとした髪の子ではありませんでしたか？」

「おおそうじゃ。その子の名前を教えてくださいませんか？」

「……グリーンです。オーキド博士の孫の……」

レッドは努めて落ち着いて言った。レッドの心には、まだグリーンへの複雑な感情が残っている。

「おお、あれがユキナリの……。長く生きていると、不思議な事もあるもんじゃ……」

「さつきお札と言っていました、グリーンが何か？」

「ふむ、そうじゃな。立ち話もなんじやし、わしのポケモンハウスに案内しよう」

ポケモンハウスとは、外から見れば一般的な住宅と変わらない。しかし中は、ポケモンたちが窮屈を感じずに動けるよう広く改造されている。

家の中央ではニドリーノとコダックがのんびりと昼寝している。レッドは老人に案内されて椅子に腰掛けた。

「わしはフジという。町の皆にはフジ老人と呼ばれているから、そう呼んでもらっても構わんよ」

「はい。こここのポケモン達は……」

「このポケモンハウスでは、捨てられたり傷ついたポケモン達の保護を行っているんじや。保護したポケモンの里親になってくれる者も探しておる」

「そうなんですか……」

ニドリーノとコダックが眼をこすりながら起き、レッドが物珍しいのか興味深そうに近づいてくる。

レッドは微笑んでモンスターボールを取り出し、

「遊んでおいで、フシギソウ、ラッタ」

レッドが出した二匹のポケモンがニドリーノとコダックに近づき、友好的に鳴き声を

出す。ニドリーノとコダックもそれに答え、4匹でじゃれあいながら家の中を駆けていく。

「話の続きじゃったな。レッド君は、ポケモンタワーには行ってみたかな？」

「いいえまだ。ポケモンタワーとは一体どういうところなんです？」

「ポケモンタワー、あれはポケモンたちのお墓じゃ。死んだポケモンたちを埋葬し、安らかな眠りにつかせる場所なのじゃ」

レッドが家の窓からポケモンタワーを眺める。

「そうなんですか……。それで、グリーンは」

「事の始まりは、あのポケモンタワーをロケット団が占拠したことから始まる」

「ロケット団……！ でも、ポケモンのお墓を占拠して……？」

「狙いはわしじゃった。昔わしはポケモンの研究に携わっていてな。ロケット団はわしの知恵を必要としていたのじゃ。しかし愚かにもわしがそれに気づいたのは、占拠をやるよう単身乗り込み、奴らに捕らえられた後じゃった……」

遊んでいたニドリーノとコダックが、部屋の隅に置かれていたぬいぐるみに近づく。いや、ぬいぐるみではなかった。

部屋に入ってからぴくりとも動かなかったため、レッドは勘違いをしていた。

茶色い小さな体に、頭に被ったポケモンの頭部の骨、そして手に持つホネこんぼう。



そのポケモンはニドリーノに小突かれて遊びに誘われていたが、悲しげに声を出さなかった。

「カラア……」

「あのポケモンは……?」

「ポケモンタワーには野生のポケモンが住み着いていてな。その内の一匹のカラカラじゃ」

カラカラはニドリーノに応えない。しばらくすると、また部屋の隅で背を向けて動かなくなった。

「……あのカラカラの親のガラガラは、ロケット団がシオンタワーを占拠した時に、奴らに殺されたんじゃ」

「!」

「わしはそれを見ていることしかできず、拳銃の果てに捕らわれて奴らに連れて行かれるのも時間の問題じゃった。しかしそこで助けてくれたのが、マサラタウンから来た少年、グリーン君じゃった」

「あのグリーンが……」

グリーンとはトキワシテイで戦って以来会っていない。ポケモントレーナーとして

旅は続けているだろうと思っていたが、まさかこんな人助けをしているとは……。

(……いやグリーンだつて、目の前でこんな事が起きればロケット団を許せないだろう。けど、やっぱり驚いたな……)

「わしはロケット団が拠点を作っていたシオンタワーの最上階で捕らえられていた。グリーン君がやってきたのは、大勢いたロケット団が野生のポケモンを痛めつけていた時じゃ……」

数日前のシオンタワー最上階。そこでは多くのロケット団員が、縛り上げられたフジ老人をにやついた目で見下していた。

「まったく手間取らせやがって。あんまりにも来るのが遅いから、この辺のポケモンを暇つぶしに狩り尽くしちまったぜ」

回りにはシオンタワーに住んでいたであろう多くのポケモン達が倒れている。

「経験値をかせぐならここまで痛めつける必要はなからう！ 野生のポケモンといえども殺していいはずはあるまい！」

「俺たちロケット団は悪事を働いてなんぼ。人だろうがポケモンだろうが、ロケット団の行動一つ一つに全ては恐れおののくさ」

倒れ伏しているガラガラに、その子であろうカラカラが泣きついている。

「こんなふうにな!!」

ロケット団が手持ちのポケモンをけしかけ、泣きじゃくるカラカラに迫る。  
「やめるんじや!!」

その攻撃はカラカラに届かなかった。ガラガラが最後の力を振り絞って立ち上がり、カラカラを庇つたのだ。

庇つたガラガラは壁にたたきつけられ、今度こそ完全に動かなくなった。

「なんてことを……!」

「はっは! よかったじゃないか死んだのが墓場で。埋葬にも時間を取らないぜ」

「そうだな。ここには墓石もたくさんあるし、新しく人が埋葬されたって構いやしないよな」

「!?!」

聞きなれない少年の声、ロケット団員達は一斉に階段の入り口に振り返る。

「おい、小僧でめえはなんだ。下にいた奴らは……」

「少し小突いたらすぐに裸足で逃げ出してつたぜ。つたく、野生のポケモンより根性がねえとは、呆れてものも言えねえぜ」

尖った茶髪、紫色のTシャツに黒のズボンというスマートな出で立ちに、圧倒的な敵意がこもったギラついた瞳。

言いながらその手に握っていたモンスターボールを放り、相方を君臨させる。

現れたのは、古に伝わるドラゴンそのものの容姿を誇るオレンジ色の炎の龍。

「リ、リザードンだど!? こんなガキが!?!」

「グルルルル……!?!」

リザードンにグリーンの怒りが伝染している。

それでもグリーンはニヒルに笑い、ロケット団を指で招く。

「こいよ、遊んでやる」

「つ?!? ガキが!?! 野郎ども!?!」

「おうっ!?!」

ロケット団はルール無用だった。全ての団員がポケモンを出現させ、一斉にリザードンへ襲いかかる、

「いかん!?! これはいくらなんでも、逃げるんじゃ!?!」

フジ老人の言葉はもつともだった。しかし、

「リザードン。かえんほうしや」

グリーンの心境に変化はない。リザードンが炎の意思を代弁する。

ロケット団のポケモンは一匹残らず火炎放射に吹き飛ばされ、ロケット団員達は唾然とした表情で手元に戻すしかなかった。

「くつくそ、こうなったら……!?!」

「ありがとなストライク」

「なっ!？」

いつの間にかフジ老人の後ろに回っていたグリーンが、ストライクが、フジ老人の縄を切り、そのまま老人を足で抱えてグリーンの前へ運んでいた。

「さてと、こうなったら確かに、このまま俺のリザードンに焼かれるか、下で待ち構えているジュンサー達に捕まるかの二択かな。さてどうすんだ？」

「そっ……そんな……」

ロケット団員達は一人残らず膝をつき、完全に戦意喪失していた。グリーンは一息つく。

「あんたがフジ老人だよな？」

「あっああ。君は？」

「町の人に頼まれてな。ゴーストポケモンも手持ちに欲しかったから、そのついでだ」  
グリーンにとってはあくまで手持ちを強化するついでだったらしい。

「つたく、このポケモン達に死なれちやさすがに目覚めが悪いな。おいあんたら」

グリーンがロケット団員達を睨みつける。

「ひっ!？」

「言わなきやわかんねえか？」

倒れているポケモン達を回復させろということだろう。

「わ、わかった……」

ロケット団員達が回復アイテムを取り出し、野生のポケモン達にほどこしていく。程なくジュンサー達がやってきたが、ロケット団のやっていることを認め、ポケモン達の回復を手伝っていった。

それを見ていたグリーンは倒れたまま動かなくなったガラガラに近づいていく。

「……」

グリーンはポケットからげんきのかたまりを取り出したが、やめた。既に無駄であると気づいてしまった。

その傍らには泣きじやくって鳴き声をあげるカラカラが立ち尽くしている。

「悪いなフジ老人。このカラカラ頼む」

「あつああ。しかし君は……」

「俺もまだまだだ。あんな連中に手間取らなければ、こんな事には……マサラタウンのポケモントレーナーが聞いて呆れるぜ」

グリーンはリザードンを戻しガラガラを抱えあげ、階段へ歩いていく。

「ま、待ってくれ。君のおかげで本当に助かった。礼を言う。君が来てくれなければ、もつと酷い事態になっていたよ」

「さあな。フジ老人、カラカラに後で伝えてくれ。世の中には辛いことがあつてその度に泣くようなやつでも、何度も立ち向かつて勝利を目指してくる奴がいる。自分を最強度だと思つてた俺はそんな奴がいるとは気付かず、冷水を浴びせられた。情けねえ話だがな」

グリーンは立ち止まる。

「つまりだ。辛くて認められないことがあつても、絶対立ち直れる。他人に助けられなくていい。色んな物に助けられたつていい。絶対立ち直るんだ。そうすれば前を向いて、また歩いていける」

グリーンは腰のモンスタールボールを見る。彼もまた旅を通して感じるものがあつたのだろうか。

「カラカラが立ち直つてるかどうか、また会いに来るぜ。バイビー」

そうしてグリーンはガラガラを埋葬して去つていった。彼に依頼した町の住人のお礼も受け取らず、疾風のように。

聞き終えたレッドは、呆然として動けなかった。

ロケット団の横暴もそうだが、なによりグリーンへの行動と強さに驚嘆した。

レッドも認めざるをえない。グリーンに一度勝利したとはいえ、グリーンはまだまだレッドの先を行っている。

「さすが、グリーンですね……。彼は昔からなんでもうまくこなしたけど、そこまでは……」

「うむ。わしも長年ポケモントレーナーを見てきたが、あそこまで圧倒的な強さを見せつけられたの初めてじゃった。それにポケモンへの優しさも……」

「……」

レッドはそれを聞いて無言で考えた後、立ち上がって壁の隅のカラカラへ近づいていく。

「レッド君？」

グリーンはガラガラを埋葬し、カラカラの回復を願った。

自分もなにかしたい。ポケモンを愛するものとして、心に深い傷を負ってしまったカラカラに。

「カラカラ、俺はレッド。フシギソウ達と一緒に旅をしてるんだ」

背を向けるカラカラに話しかける。言葉は通じていないだろうが、カラカラはすこしばかりレッドに振り返る。

「親を失った悲しみは、俺には想像もできないほどだ……。立ち上がって元気を出せなんて言えるわけもない」

レッドはカラカラに手を差し伸べる。この旅でレッドは、多くの人から優しさと暖か



さを貰つて来た。今、自分からカラカラに伝えたい。

「カラカラ、悲しみを乗り越えるのは自分のペースでいい。ゆっくりと自分の心を癒やす方法を探していこう。俺も、君の力になるよ」

レッドの手はカラカラの背に触れないで中空で止まっている。

カラカラはレッドを見たまま、動かない。潤んだ瞳は何を思っているのだろう。

レッドは辛抱強く待った。カラカラが今回手を取らなくても、カラカラの助けになれるまで、この町を離れない。そう心に決めていた。

(カラカラ……)

カラカラが背負っている悲しみを想うと、レッドの瞳に涙が溜め込まれていく。

それを見たカラカラは……。

「あっ……!?!」

「おお……!?!」

カラカラの手がゆっくりと伸び、レッドの手のひらの上に置かれる。フジ老人も驚いて声を上げた。

レッドはその手を優しく、しっかりと握った。

「カラカラ……?」

カラカラが立ち上がると、レッドの手を引いて歩いて行く。

「どこかに行きたいのかい？」

「ああ、カラカラは、多分……」

フジ老人は察していた。カラカラが行きたいのはおそらく……。

シオンタワー。その墓石が立ち並ぶなかで、カラカラに手を引かれたレッドもどこに連れて行かれるか察した。

ポツンと立つ墓石の一つに多くの献花が手向けられている。つい先日起こった悲劇で犠牲になった、一匹のポケモンに対して。

「カラア……」

カラカラがその墓の前で止まる。目には涙があふれ、寂しげな鳴き声が響く。

(カラカラ……)

「レッド君、これを」

「あつ」

レッドはフジ老人から献花用の花を託される。

「……カラカラ、祈ろう。ガラガラの安らかな眠りを……」

レッドはカラカラと合わせた手の間に花を差し込み、共に墓へ供える。

ゆつくりとカラカラの手を離すと、カラカラは上を向いて、叫んだ。

「……カラーー！ カラーー！ カラーー！ カラーー！ カラーー……」

母へ捧げる雄叫びが、いつまでもシオンタワーに木霊する。あの日、カラカラが母を失った時から続く悲しみを受け止めるための、最初の一步だった。

レッドは程なく、旅立ちの時を迎えた。カラカラはもう、一人でちゃんと立っている。

「色々ありがとうございます。フジ老人」

「礼を言わなければならぬのはこちらじゃよ。元気だな」

「はい、カラカラ、また会いに来るよ」

レッドは体勢を低くしてカラカラに視線を合わせ、頭骨をかぶる頭をなでた。

しかしカラカラはその撫でる手を無視し、レッドの服の裾を掴んで離さない。

「カラカラ？」

「……連れて行ってください。カラカラはあなたについて行きたいようじゃ」

「えっ!? そうなのか、カラカラ……?」

「カラア……」

その瞳が、レッドを真っ直ぐに見つめる。

「グリーン君が来た時にはわしから言っておこう。信頼できるトレーナーに託したとな」

「……わかりました。それじゃあフジ老人、お元気で」

「レッド君とカラカラも息災でな。カラカラに広い世界を見せてやってくれ」

「はい。行こうか、カラカラ」

「カラ……！」

カラカラの手を引いていく。今度は共に旅を歩む仲間として。

そしてレッドはカラカラへの優しさと、今もなお先を行くライバルを想い、前を向いて一歩一歩新たな冒険へと足を踏みしめていった。

## タマムシシテイ

マサラタウン、レッド旅立ちの日。レッドは自室で荷物をまとめ、最後にパソコンの電源を落としていた。この部屋に帰ってくることは、当分ないだろう。

(行つてきます)

快く送り出してくれた母に感謝し、町の外へ繋がる草むらに向かう。

レッドが現時点で知る最高のポケモントレーナーは、その場所でレッドの見送りに来ていた。

緑と赤を基調とした袴姿の淑女。それでいて少女と言つても過言ではない艶のある黒髪の本ブカッと可憐な唇と瞳。

「エリカさん、ありがとう。僕はフシギダネと一緒に……立派なポケモントレーナーを目指します」

「ええ。期待していますよ」

穏やかな微笑みと共に可愛らしく首をかしげる。レッドはドキンとした胸の高鳴りに戸惑いながら、紅くなった顔を隠すように帽子のつばでエリカの視線をさけた。

しかしそんなレッドをお構いなしに、エリカはレッドに数センチというところまで近

づき、レッドの両肩を優しく掴んでほぐす。

「力を抜いて……。旅は長く、つらいこともあるかもしれませんが。それに奮起するのもよし、けれど人に頼ること、ポケモンに頼ることも忘れないで。あなたは決して、一人ではないのですから」

「……うん」

レッドは立派な敬語を言えたものではなかったが、エリカは気にしなかった。ポケモントレーナーとして高みを目指す同士、彼とは近い関係を望んでいる。

「セキエイ高原へ行く手順は大丈夫ですか？」

「うん。各地のジムバッジを8つ集めるんだよね。エリカさんも、セキエイ高原を？」

「……いいえ」

意外だった。彼女がレッドの指導の中で見せてくれた草ポケモンの扱い方は、初心者  
のレッドから見ても凄まじい練度であることが見て取れたからだ。

「各地にはポケモンと様々な付き合い方をしている方たちがいます。私もその一人……  
例えばポケモン達と戦いに赴く身でも、目指すものがセキエイ高原とは限りません」

「……」

レッドには想像もつかない。一体彼女は、どうしてポケモンバトルをしているのだら  
う。

「私はタمامシシティにいます。レッドさん、あなたがその町に来るとき、私がどこであなを待っているのか、わかってくれるのを期待していますよ」

彼女の声は優しさに満ち、それでいて人を発奮させる魅力と愛が込められている。レッドはその全てを飲み込んで心体に循環させ、前を向いた。

「……はい」

「それでは、行つてらっしゃい」

「行つてきます！」

街を見下ろせる丘でレッドは目をつむっていた。そして今、傍らのフシギソウと共にゆっくりと目を開く。

眼下にあるはタمامシシティ。そこはタمامシデパートやマンションが存在感を放つ、栄えある街。

「……ついに来たな。フシギソウ」

「フシー！」

ポケモントレーナーの最初の扉を開く、その時に背を押してくれた人がこの街で待っている。

レッドの心には熱い感情が二つ渦を巻いて高揚している。新しいバトルへの期待。そして大切な人に自分の成長を見せたい。

戦力も心も整えた。あとはあの人に恥ずかしくないようなバトルをし、仲間たちと勝利を手にするだけ。

(あの人が待っている場所は、きつと……！)

タケシ、カスミ、マチス。彼らとの熱い戦いの経験がレッドに囁いている。レッドは叫び出したい気持ちを懸命におさえながら、フシギソウと共に彼女が待つ場所へと向かって走りだした。

タمامシシティジム。そこは草木に囲まれ、このジムがどのタイプを司るのか外観から物語っていた。

レッドとフシギソウはそれを前にしてごくりとつばを飲む。

「……」

レッドは扉のドアノブを掴む。逡巡する理由はない。この先であの人が……！

「あれ、挑戦者の方？ エリカさんいないよー」

と、がっくりとバランスを崩しドアに頭をぶつけた。なんて軽い声色で確信を持つことになろうとは……。

「なにやってんの？」

レッドに話しかけたジム所属のミニスカートの少女はレッドの行動を訝しげに見つめる。



「……ええと。ジムは今日お休みですか？」

「ちよつとジム戦だけ臨時休業なのよ。エリカさん、今ロケットゲームコーナーにどうしても外せない用事があるみたいで。あつこれ言っちゃいけないんだっけ？ まいや」

「ロケットゲームコーナー……？」

レッドは不思議がった。ロケットゲームコーナーをレッドは知らないが、名前からしてどういふところかは想像できる。

エリカがゲームコーナーに……彼女の外見からすれば、ちよつとミスマッチに過ぎはしないか。

(ロケット……まさかね)

「わかりました。それじゃあまた出直します」

「ごめんね〜」

さて、出鼻をくじかれた形になったが仕方がない。レッドは一気に退屈そうになったフシギソウをモンスターボールに戻し、これからどうするか検討する。

(幸い時間を潰せるところは多そうだな。エリカさんが行ってるロケットゲームコーナーも気になる……)

どこから行くか。タمامシデパートの品揃えも気になるが、特別な用事があるわけ

じゃない。

(やつぱり気になるな、ロケットゲームコーナー。ここから行こう)

ジムから歩き程なく到着すると、レッドは見たことない喧騒空間に驚いた。ロケットゲームコーナーの内部に鳴り響くゲーム音とコインの音、そして人の歓声。

ゲームを一通り見てみたが、どうやらエリカはいないようだ。次いで壁に貼られた張り紙とポップを見る。

(コインでポケモンの交換も行ってるんだ……。ストライク、ポリゴン、聞いたことないポケモンだ)

そういえばこういったゲームはグリーンが得意だったなど、レッドは思い出してくずりと笑った。協力ゲームでは常にレッドをリードして助けてくれた……。

(あ、今俺……)

グリーンの事を思い出して明るい気持ちになれたことなど、かつてあっただろうか。レッドは手持ちのカラカラの入ったモンスターボールに手をやる。

(早く追いかさないと。カラカラ見たらどんな顔するだろう)

先を行くライバルを思いながら、レッドはゲームコーナーの端にたどり着く。

(特にこれといって変なところはなかったな。エリカさんもないし、少し遊んでくか

……? あれ?)

レッドが視界の端にとらえた、黒い制服。オツキミ山で見覚えがある。  
(まさか!?)

レッドは駆け出す。黒い制服の男は遊ぶ人とゲームの間を慣れた様子でぬって行き、ゲームが立ち並んで死角になっている場所へと進んでいった。

(あそこはポスターが貼ってあるだけでなにもない!)

レッドはやつを追いつめたと確信し、曲がり角を曲がってロケット団が入っていった死角を見た。

「え……!?!」

ロケット団員が消えた。そこには壁にそって貼られたゲームポスターしかない。

(馬鹿な!?! 奴は一体どこへ……!?!)

驚愕しているレッドをよそに、一枚のポスターの端がペラリと剥がれる。

「……?」

レッドは気になって、一部が剥がれたポスターに手をやった。

(裏に何かある……?)

少し力を入れて剥がす。するとそこにあつたのは一つのスイッチ。

「……」

レッドは恐る恐る押して見る。ポチッと音がなつたあと、スイッチがあつた壁の一部

が横にスライドしていく……。

現れたのは下へと続く階段。

(ロケットゲームコーナー。エリカさんの臨時休業。消えたロケット団員……)

レッドの脳裏に描かれる予想絵図。ポケモンとの絆を説いたあの人が、故郷に巣食う悪を許せるだろうか。

(……行く……)

この先で、今何かが起こっている。

階段を降りた暗闇の先。そこが悪がはびこるロケット団のアジトということは、フロアに点在する黒い団員達の姿ですぐに理解できた。

しかしレッドは警戒よりも、戸惑いの方が大きかった。

(皆寝てる……? 手持ちのポケモンは出してるみたいだけど……どういうことだ?)

あるものは地べたで、あるものは椅子に座って。ポケモンを出していても主人ポケモン共々深い眠りに落ちている。

(……)

いっどこでなが出てくるかわからない。レッドはフシギソウを出して周辺を警戒したが、人の話し声や動く音は聞こえず、ただ寝息しか聞こえてこない。

(あそこのエレベーターで下に行けそうだな。お)

よく見れば先ほどレッドが追っていた男が道端で寝入っている。しかも倒れた拍子にだるうか、ポケットからエレベーターで使うであろうカードキーが覗いている。

(ラッキー)

「うわ!？」

レッドが取りに行こうとした瞬間、フシギソウがレッドの前をつるで制する。

「どうしたフシギソウ?……!」

これ以上進んではならないとフシギソウは暗に言っている。皆寝入っているこの状況、そして争った形跡はない。

フシギソウはレッドを見ながら鼻を鳴らす動作をしたあと、花粉を舞い散らせるかのように背の蕾を揺らす。その動作のおかげでレッドは気づいた。

「ねむりごなが漂っている……。行け、ピジョン。ふきとばし」

ピジョンが男の周りの空気をふきとばすと、フシギソウもつるを降ろした。レッドはピジョンとフシギソウの頭をなでカードキーを手取る。

エレベーターに差し込むとすぐに動き出し、レッドは乗り込んで地下へ降りていく。

(フシギソウが気づいたことから、草ポケモンによるねむりごなだろう。やはり、エリカ

さんか?)

エレベーターが開くと、これまたロケット団員の二人組とニヤースが寝入っている。

「なんだ……かんだと……聞かれたらあ……むにや……」

「答えて……あげるが……世の情けえ……むにや……」

「待つてる……むにやむにや……」

(あれ今しゃべんなかったか?)

気になったが今はそれどころじゃない。先に進むと、今度はさらに開けた場所に出た。ジムで見るバトルスペースに似ている。

大型のポケモンが闊歩できるほどの十分な奥行きがあり、天井も高い。

(地下にこんな場所が……)

レッドはあたりを伺いながら、バトルスペースのトレーナーゾーンに立つ。

その瞬間、レッドと対面のトレーナーゾーンにスポットライトが集中する。

「! なんだ!」

突然の光にレッドは目を細めたが、懸命に対面の相手の顔を確認しようとした。そして、ゆっくりと鮮明になっていく。

「ほほう。こんなところまで、よく来た」

壮年の男性の声。スーツを着込んだ落ち着いた佇まい。しかし、その眼光は鷹よりも鋭い。

(っ!?! この圧力は!?!)

畏怖と威厳が入り混じった圧倒的な戦意が、レッド一人に向けられている。

(あいつもポケモントレーナーなのか!?!)

「エリカ嬢がしかけたねむりごなの罠、ここのわたしの部下は誰一人として潜り抜けることができなかったが、君みたいな子供が踏破するとはね。中々に楽しめそうじゃないか」

「あなたは誰だ!?!」

「ふむ、色々と肩書は持っているが、サービスだ。子供の君にもわかりやすく教えてあげよう」

男は自らの顔を親指で指差し、笑った。

レッドは生まれて初めて他人に恐怖した。

「世界中のポケモンを悪巧みに使いまくって金儲けするロケット団! 私とそのリーダー、サカキだ!」

「……………サ……………カキ……………!」

この男が。いや、あいつは聞き捨てならない名前を言った。

「そうだ、エリカさんはどうした!？」

「彼女ならここだ」

「!」

スポットライトがサカキのさらに後方の壁に集中する。そこには壁に付けられた鎖で両手を吊るされたエリカの姿があつた。傷は見えず、身につけている袴が乱れている様子は無いが、エリカはぐったりとして動かない。

「なっ……!?!」

「安心して欲しい。さすがにタمامシの名士の娘を傷つけたとあつては、この街で金を握らせている連中も黙つてはいないからね。少々実力を知ってもらいはしたが」

「実力……まさか……!?!」

（エリカさんが、負けた!?!）

「さて、今私の手持ちは回復をしているから、部下のポケモンを借りるが……。せめてワンスайдゲームは避けてくれよ」

サカキがどこからともなくモンスターボールを手にする。レッドは激高した。

「おまえ、こんな状況で……!?! エリカさんを開放しろ!!」

「ふむ……。元々エリカ嬢や君にアジトがばれる体たらくの稼ぎ口だ。今日引き払うのが潮だろう。そうになると、どんな条件がいいか? よし、それではこうしよう。君が勝



てば、エリカ嬢をこの場で開放する。しかし君が負ければ、君が持っている技能、知識、ポケモン、その全てをロケット団員として悪事に捧げるのだ」

「貴様……!! ポケモンバトルをなんだと思ってる!!」

「君こそなんだと思ってるのかね？ まさか一トレーナーとして勝負から逃げるのか？ 案外弱虫なのだな」

ブチッ。

「お前のような人間がトレーナーを語るな！ 恥を知れ！」

「難しい言い回しをよく知っている。さてはエリカ嬢の関係者かな？ 男としていいところを見せるチャンスだぞ？」

レッドの眼が血走り歯が軋む。初めて怒りのままモンスターボールを握り構えた。

対してサカキは一貫して笑みを浮かべている。

「ロケット団リーダー、サカキ」

「貴様に名乗る名前はないっ!!」

「ふははっ、バトル開始。行け、イワーク」

「行け！ フシギソウ！」

（レッド……さん……いけ……ません……。その人は……カントー最強の……）

おぼろげな意識のエリカの声は届かない。

「イワーク、いやなおと」

「フシギソウ、つるのムチ！」

（このまま攻めきってやる！）

「いい攻めだ。思い切りがある。イワークは捨て石にするかな。いやなおと」

「捨て石だと……!?!」

タケシならば絶対に言わないし思わない。

（こんな奴に負ける訳にはいかない！）

「フシギソウ、やどり」「戻れ、イワーク。行け、ガルーラ」

「なっ!?!」

「れんぞくパンチ」

「フシっ!?!」

流れるような攻撃だった。イワークの戻り際もガルーラを出すタイミングも、そして攻撃に移るタイミングも一切のムダがなく、フシギソウが乱打を浴びて一瞬で地に沈む。

奇しくもレッドが学び信奉してきた、ポケモンとトレーナーの連携が為せる技だった。

「くっ戻れ！ 行け、ギヤラドス！」

「それが切り札か？ 少し期待しすぎたか」

「ぬかせえ！ かみつく!!」

「ガルーラ、かみつく」

「ギャ!!」

ギヤラドスがガルーラの肩にかみつuki、ガルーラも負けじとギヤラドスの長い首にかみつく。

(ギヤラドスの方が力が上だ。このまま押し切る！)

「ポケモントレーナーとは常に、物事を大局で見なければならぬ。ギヤラドスには手足がないが、ガルーラには4つの手が残っているぞ、少年！」

「！ しまっ!？」

ガルーラからすれば相手が至近距離で固定させられればよかった。

「れんぞくパンチ」

「ガルウ！」

ガルーラの腹袋の中の子ガルーラが吠え、母親とともに痛撃のラツシユをギヤラドスに浴びせる。

「ググ……グググ……!!……ギヤラア!？」

ガルーラに痛手を負わせることには成功したが、ギャラドスは耐え切れず倒れる。

(……やけにギャラドスが耐えたな。ガルーラの消耗も激しい。……！ 宿り木か。あの一瞬でよく当てたものだ)

「まだだ！ 行け！ ピジョン！」

「戻れガルーラ。行け、サイホーン」

(くっ……タイプ相性が……！)

レッドの思考は狭まっていた。元々が怒りで捕らわれ、現状は二体のポケモンが倒されて不利。結局なんのきっかけも掴めないまま、ピジョンはサイホーンに競り負ける。

「……戻れ、ピジョン」

「座興としては少し足りんな。もう少し頑張ってくれたまえ」

「……っ！ 行け、バタフリー!! ねんりき！」

バタフリーの速攻はサイホーンに攻撃の隙をあたえなかった。レッドは3体を失い、やっと一匹目を撃破する。

「行け、イワーク。いやなおと」

「ねんりき！」

(……くっ、やっと意識が……。レッドさんは……!?)

エリカは顔を上げ、なんとかレッドを視認する。なんてことか、レッドの顔は焦りでも満ちている。

「グオオ……」

「やったぞ！ バタフリーー！」

蝶によつてその巨体が沈む。元々消耗していたイワークの犠牲、サカキにとつては予定調和だった。

「ガルーラ、れんぞくパンチ」

「ああっ!？」

体力が満タンだったバタフリーが一瞬で沈む。

「……行け、ラッタ……!」

もうレッドに最初の威勢はない。ガルーラだけは別格、フシギソウとバタフリーが一瞬で倒され、ギャラドスですら倒すには至らなかつた。このままではラッタも……。

しかし、ラッタは雄々しく吠える。

「ラッター！」

（ラッタ……お前……）

ラッタが微塵も諦めていない事はレッドにも分かつた。しかしレッドは……。

（あのエリカさんですら勝てなかつた相手だ。……あのサカキは戦略もポケモンとの練

度も、今まで会ってきたどのトレーナーよりも上だ。……俺が、勝てるような相手では……)

レッドはガルーラとサカキを見る。ここまで敵が大きく見えたことは今までない。後ろには、捕らわれたエリカがいるというのに……。

(ごめんなさいエリカさん……俺は……)

最後にエリカの顔を見た。なにか薬でも打たれたのか、顔色が悪い。

しかし、エリカの口が動いている。

(なんて……?)

お・ち・つ・い・て。

そしてエリカは、微笑む。頬に汗を流し、身に残る苦痛に耐えながら。レッドの勝利を、レッドの成長の成果を、期待しているかのように。

(エリカ、さん)

そこで初めて、レッドはラッタの異変に気づいた。さつきまでガルーラを威嚇していたラッタが吠えるのをやめ、振り返ってレッドをじっと見ている。

(……………!)

ラッタはコラッタの頃にレッドが初めてゲットしたポケモンだ。付き合いはフシギソウの次に長い。

今、ラッタは何をしている？ 焦る主人に戸惑っているのか？ レッドと同じく戦意を無くしたのか？

（ラッタは待つている。俺の命令を。俺を待つているんだ。俺に信頼を寄せ、勝利を勝ち取るために、俺の命令を待つているんだ）

「ははっ」

レッドは下を向いて吹き出す。本当にかっこ悪いところを見せてしまった。

そしてレッドは顔を上げる。もう、恥ずかしい姿は見せてられない。あの人にも、自分を信じて待つ仲間にも。

そしてサカキのガルーラの動きを冷静に把握し、レッドはラッタに命令を下した。

（奴の動きが鈍くなったな。万全を期させてもらおう）

「ガルーラ、回復だ」

「ガルっ」

ガルーラがサカキの近くに寄り回復を施される。この距離ならば攻めにきたラッタを充分に迎撃できる。

サカキからすれば、少年にさらなる絶望を与えるための示威行為も兼ねていた。

（さあ、どんな命令を下したか……ん？）

ガルーラの回復が終わったが、ラッタが攻撃にこない。

「ラッタ、きあいだめだ」

（ほう……こちらの回復をみこし、唯一のくもの糸を見つけたか。確かにラッタの火力を考えればそれしかない。自棄にならなかつたのは評価しよう）

「だが、うまいかな。れんぞくパンチ」

「ラッタ、ひっさつまえば!!」

ラッタは駆ける。ガルーラのパンチを四方から浴びるが、一切ひるまない。

（むっ!? このラッタ、避ける気がない!）

ラッタのひっさつまえばは、ガルーラの脂肪が薄い首筋の急所にあたつた。そしてラッタは距離を取り、なおもあきらめない。

「くっ。ガルーラ、かみつく!」

「でんこうせっか!」

れんぞくパンチより命中率が高いかみつく、サカキがとつた安全策が仇となつた。ガルーラが顔を前面に出したため、ラッタのでんこうせっかがまたも首筋の急所に当たる。

それでもなんとかガルーラはかみつくを命中させ、ラッタを仕留めた。

「よくやったラッタ。後は任せろ」

（たぐりよせた強運が戦意を呼び起こしたか。少し舐めすぎていたかな）



「ガルーラはあと一撃といったところだ。さあ少年、勝ちきれるか？」

「既に答えは俺のポケモン達に貰っている。行け、カラカラ！」

「カラア！」

「一瞬で決める。ガルーラ、れんぞくパンチ！」

「カラカラ、ホネブーメラン！」

ガルーラがカラカラに突進する中、カラカラが先手を打ってホネブーメランを投合する。

「カラあ！」

「良い技を持っている。だが甘い！」

迫り来るホネブーメランをガルーラは首を傾けて躲す。ホネブーメランは後方に吹っ飛んでいく。

しかしレッドとカラカラは微動だにしない。既に勝負は決まったとばかりに。

(……あの少年！ そうか！)

「ガルーラ、かがめ！」

ガルーラが即時に反応し、走行を中断してかがむ。その上をカーブして戻ってきたホネブーメランが通過する。

「……惜しかったな少年」

しかしレッドは笑い、地面に消えたカラカラにサムズアップした。

「あなをほる」。ナイスだカラカラ」

かがんだガルーラは目の前を地面が盛り上がるのを確認した途端、現れた骨被りの小さな闘士に顎を正確に撃ちぬかれ、バトルスペースにその身を沈ませた。

「……君はとても大事にポケモンを育てているな。そんな子供に私の考えはとても理解できないだろう。……！　ここは一度身を引こう」

ガルーラを戻したサカキが奥の闇に消えていく。去り際に指をパチンと鳴らすと、エリカをつないでいた鎖が解かれた。

「君とはまた、どこかで戦いたいものだ……！」

「さて……！」

レッドの声も空しく、サカキが暗黒に消えると同時に扉の締まる音がした。もう、追っても無駄だろう。

（サカキは本当の手持ちではなかった……。あんなに強い人がいたなんて……）

「……エリカさん！」

レッドは鎖から解かれて地面に手をついているエリカに駆け寄る。

「レッドさん……」

「エリカさん、手を……」

「あつ……」

エリカがバランスを崩し、レッドが抱きとめる。エリカの声は、弱々しい。

「強くなりましたね……レッドさん。それに比べて……私は……私は……」

「いいえ……！ そんなこと、そんなことないです！ エリカさんがいなきや、僕は……」

抱きしめられたエリカがレッドの肩に顔をうずめ、レッドもエリカを抱きしめる強さを強くする。

カラカラが骨棍棒を首の後ろに回して回れ右し、主人の逢引を邪魔すまいと空気を呼んだ。

この後通報したレッドによって、地下で睡眠をとっていたロケット団員のほとんどが御用となった。

しかし当然、その中にサカキの姿はなかった。

エリカが単身乗り込んだのは、突入を図る治安機構からロケット団員への密告者が出て手遅れにするためだったらしい。ロケット団員が街で大手を振って稼ぐゲームコーナー、街の有力者に賄賂が及んでいることは想像に難くない。

そのための草ポケモン達によるねむりごなの罠によって、エリカの思惑は8割方成功したと言えた。ただ最後、サカキに敗れるまでは……。

エリカが受けたのはサカキが使ったニドクインからの毒針だったらしい。しかしエリカは草のエキスパート、草ポケモンは毒タイプとの複合タイプが多く、解毒は自家製漢方薬で済ませてジムに出向いた。

レッドとタمامシジムの所属トレーナーは、まさかエリカはポケモンの技を受けた身で即日ジムを再開するのかと勘違いしエリカに思い直させようとしていたが、それは杞憂に終わった。

「皆さんありがとう。ここには今日忘れ物を取りに来ただけですから、どうか安心してください。ご心配をおかけして、申し訳ありませんでした」

エリカは深々とジムのトレーナー達に頭を下げる。

「謝らないでくださいエリカさん！」「エリカさんが無事でよかったです……！」「街では既に悪を打ち倒したエリカさんって話題が持ちきりですよ！」

エリカの薫陶を受けてきたジムトレーナーの女性たち。皆一様にエリカの無事と功績に歓喜している。

「でも、私達に心配かけるのはこれつきりにしてくださいね！ 大事な私達のリーダーなんですから！」

レッドにエリカの行く先をもらしたミニスカートの少女がぴしやりとエリカに言う。エリカも申し訳無さそうに今一度謝罪した。

そしてミニスカートの少女はレッドにウインクする。

(あの時言ったのは、わざとだったのか?)

レッドが驚いていると、エリカが用を済ませたのかレッドのそばまで来る。

「今日は本当にありがとうございました。あなたが来なければ、私はどうなっていたか……」

「いえそんな! ぼ……俺が勝てたのは、エリカさんのアドバイスがあったからだよ。

”落ち着いて”って。それがなければ、俺は大切なものを失っていた……」

「レッドさん」

エリカはレッドにさらに近づき、レッドの手を取り両手で包む。

「そうかもしれない。しかし、一番の勝利の要因はあなたとポケモンが最後まで勝利を信じたからです。それを忘れないで」

「……はい」

しかしレッドの心には、靄がかかっていた。

『さて、今私の手持ちは回復をしているから、部下のポケモンを借りるが……』

おそらく、サカキの言葉はエリカとのバトルによるものだったのだろう。レッドはサカキの3体のポケモンに対し6体でやっとの勝利だった。

別にポケモン達の頑張りを否定するつもりは全くない。

(もし、サカキが万全の手持ちだったら……)

それが脳裏からどうしても拭えなかつた。

「レッドさん。タمامシにいる間はどうか、私の家を宿として使ってください。私とタ

مامシを救っていただいた礼を、是非させてください」

驚くレッド、そしてジムの女性たちが歓声を上げる。

「えっでも……」

エリカはレッドだけに聞こえるよう耳元でつぶやく。

「サカキの事で、お話したいことがあります」

「……………わかつた」

そんな二人に割って入るようにミニスカートの少女がレッドを指さす。

「ちよつとあんた！ エリカさんに手を出したら承知しないわよー」

「いやいや子供になに心配してんのよ……」

大人のお姉さんが呆れたように言い、屈んでレッドに視線を合わせ、

「ありがとね坊や。私達のリーダーを助けてくれて……あら？」

レッドはグラマラスな大人の女性の接近に、つい頬を紅潮させ顔を背けてしまう。

(む)

「……………行きますよ、レッドさん」

するとエリカが口を尖らせながらレッドの手を引き、そそくさとジムを後にする。背中にジムトレーナーの冷やかしやら暖かい視線を受けながら、エリカはレッドを伴って帰路についた。

レッドが案内されたエリカ宅は、見たこともないような和の邸宅だった。庭だけでレッドの家の敷地の何倍あるかわからない。

多くの使用人がレッドとエリカを出迎え、客室に案内されたレッドはそわそわと最初は落ち着かなかつたが、部屋から見える庭でのんびりと過ごす草ポケモン達を見ていくらか和んだ。

程なくエリカが部屋に来て、夕食をそのまま二人で馳走になった後、エリカから今日の話を切りだした。

「あのポケモントレーナー、サカキについてお話します。彼はかつて、カントー地方で”大地のサカキ”と恐れられた伝説のポケモントレーナーです。当時はカントー最強の呼び声高く、ポケモンリーグ優勝も時間の問題と言う人もいたほど。しかし彼は何の前触れもなく、表の世界から姿を消しました」

レッドは戦慄したが、しかし驚きはなかった。あれほどの実力者が世に知られていないはずがない。

「私がロケットゲームコーナーの最深部に到着した時、彼と対戦になりました。……結

果は、言うまでもありません」

「エリカさん……」

エリカの顔は沈鬱だ。レッドは声をかけるが、あまり彼女を慰める有用な言葉が思いつかない。

それでもエリカは顔を上げ、レッドへ笑顔を向ける。

「本当のタمامシの英雄はレッドさんです。サカキを退け、私を助けてくれました。あなたには、ジムリーダーが認めたこのバッジを……」

レッドが信じられないような目をしながらエリカを止める。

「ま、待つてエリカさん。俺はまだ、エリカさんと直接バトルをしてない。気持ち嬉しいけど、今まで正規の方法で手に入れてきたし、これじゃあ他のジムバッジを目指すトレーナーに申し訳が立たないよ……」

「しかし……」

なおも洩るエリカに、今度はレッドが優しくエリカの手を取る。

「俺にとつて一番のお礼は、エリカさんがまた元気な姿で元のジムリーダーに戻るんだよ。俺に協力できることがあったら、なんでもするから」

「あ……」

エリカはしばしポカンとしていたが、すぐに穏やかな笑みを作りレッドの手を優しく



握り返す。

「本当に見違えました。あなたに教授した身として、恥ずかしい姿は見せられませんね。わかりました。このジムバッジは、また改めて」

「はい」

あとは他愛無い雑談に変わり、夜も更けたためレッドは来客用の寝室に案内された。

「さて……寝るかな」

レッドは厠から縁側を通って寝室に向かっていた。月が綺麗な夜空、庭にはポケモンの寝息が聞こえてくる。

(ん……エリカさん?)

庭にエリカがクサイハナを伴って立っている。

(……え?)

心配そうにエリカを見上げるクサイハナ、エリカはモンスターボールを握った手を、目を細め口を一文字に結んで見つめている。

声をかけられるような雰囲気に見えない。レッドは寝室に戻ったあと目を瞑ったが、どうにも寝れなかった。

庭で見たエリカの表情が、何故か忘れられない。

(なにか、心配事でもあったのだろうか)

明日、機会があつたら聞いてみようか。そんなことを考えていたが、レッドも昼間の緊張感が切れたのか、久々の暖かい布団の中で深い眠りについた。

明くる日。

(ジム戦は休みか……)

「レッドさん、申し訳ありません……」

「そんな、むしろ当然だよ」

「そうですよー。ジムに来るのだからって心配なのに」

ミニスカートの少女がエリカをジト目で見る。ジムのスタッフ達の判断で、タمامシジムのジム戦はエリカの大事を取り今日も休みとなった。

それでもなんとかエリカはスタッフに掛け合い、せめてトレーナーたちへの簡単な指導だけでも譲らなかつた。

結局スタッフたちが折れたため、エリカはジムに残りレッドもそれを見守っている。

「今のタイミシングを忘れないで。もう一度技を使ってみましょう」

「はいー!」

レッドよりも年下の少女が今エリカの指導を受けている。

「エリカさん！ ちょっとお手本見せて」

「ええ、もちろん……」

エリカが少女に変わり、ポケモンの前に立つ。すると……。

（エリカさん……？）

レッドはすぐにエリカの異変に気づいた。エリカが声を出そうとした状態で呆然としたように固まっている。

「……は、はっばカッター」

「わあ！ エリカさん、ありがとう！」

少女は自身のポケモンに駆け寄ってあやす。エリカのそばに寄ったレッドの顔はひどく心配そうだった。

「エリカさん、あなたは……」

「大丈夫です」

エリカは振り向き、レッドへ微笑む。

「大丈夫」

そう言われてしまったては、レッドはエリカを見ているしかない。

「エリカさん！ モンスターボールの投げ方教えて！」

また別の少女が、エリカに羨望の眼差しを向けながらポケモンの捕獲方法を乞う。既

に街中にエリカの功績が知れ渡っていたから、新しくジムに来る子供が大勢いた。

「ええ。まず相手を弱らせたあと、ボールを握って……」

エリカが少女からモンスターボールを受け取る。しかし、なんでもないはずの動作の中で、エリカはボールを落とした。

彼女の手が、震えている。

「ご、ごめんなさい。相手を弱らせた後に、ボールをこう握って投げます。ボールを当てる位置も気をつけて」

「はいー」

(……)

レッドはその一部始終を見ていた。険しい顔になり、覚悟を決めた顔になる。

エリカはジム戦の再開を明日にすることをジム関係者に告げ、レッドを伴い笑顔で帰路についた。

(明日はちゃんと、レッドさんとのジム戦を行わなければ……)

夜半、エリカはまたもクサイハナを伴い邸宅の庭に立っている。

(せめて、せめてこの震えだけは……)

エリカはモンスターボールを手にしている。しかし、今にも手から零れ落ちそうだった。エリカの顔が悲痛にそまる。

(どうして……!)

「エリカさん」

「!」

エリカはすぐさまレッドに顔を向けたが、すぐに表情を崩した。

「まあレッドさん。こんな時間まで夜更かしなんて感心しませんよ」

いつもの穏やかな笑みでことなげな事を言う。しかし、レッドの視線はエリカを貫いていた。

エリカはその意思と闘志がこもったレッドの瞳に気づき、表情を引き締める。

「俺の夜更かしよりも、大事なことがあります」

「なんででしょう?」

「とぼけないで。あなたは今、ジム戦に復帰するべきじゃない」

「心配は嬉しい限りです。しかし、体はもう大丈夫。医師の許可もとっています」

「かもしれない。しかし、あなたのポケモンは敏感に気づいているはずだ。そこにいるクサイハナも……」

その言葉で初めて、エリカの体がぴくりと震えた。

「私がポケモンバトルをこなせる状態ではないと、そう言いたいのですか」

今エリカが言葉の刺を隠せないことが、なによりの証拠だった。

「あなたのポケモンに対する接し方に迷いがあった。あなたはサカキとの戦いで、深い傷を負ってしまったのではないのか？」

レッドのその言葉で、エリカの目が見開かれる。心優しい少年と思っていた相手から信じられないような言葉を聞いて、エリカは感情のまま放つ。

「あなたにつ……あなたに何がわかるんですか！ ポケモンとの絆も、努力も研鑽も！ 負けてしまったら何の意味もない！ あのゲームコーナーでは、多くのポケモン達が金儲けの道具にされ、各地に出荷されてしまった……。もう救うことができない！ サカキも取り逃がして、私はなにも、することができなかつた……！」

レッドは、エリカの言葉を真正面から受け止める。

「サカキを倒さなければならなかつた。あんなポケモンを金儲けの道具に使う人間を倒し、ポケモンとの信頼を築き、絆を得ることが正しい道だと、示さなければならなかつた。私達ポケモントレーナーが進む道が正しいのだと……。でも私はできなかつた。ポケモン達が蹂躪されるのを、見ているだけしか、できなかつたんです……！」

エリカがどれほどの絶望を味わったのか。正しいと信じて進んできた道が、圧倒的な力によって破壊された。結局レッドもエリカもサカキの気まぐれによって平穩無事であることを理解している。

理解しながら、レッドは前を向いていた。

「勝てないならば、勝てるようになればいい」

エリカはレッドの言葉に顔を背けて自嘲した。

「……勝ち目があると、本当にあなたは思っているのですか」

レッドはあの日変わった。そしてあの日から、

「結果はこの世界の誰にもわかりはしない。大事なのは」

レッドの気持ちは、変わっていない。

「勝ちたいという、意思があるかどうか」

(……！)

エリカは目を見開く。その言葉は、かつてエリカがレッドを導いたときと同じ道。

「自分のポケモン達が傷つくのは、誰だって嫌だ。それでもバトルの道を選んだのは、ポケモンと共に得られる光があるからだ。何にも変えがたい絆の力があるからだ！」

レッドはモンスターボールを放り、フシギソウを出現させる。フシギソウはレッドの意思を汲み取り、咆哮する。

「俺はあなたから学んだ。ポケモンとトレーナー二つの心を一つにすることを。仲間の力を！ 正義の心を！ 不屈の闘志を！ あなたが道に迷い戸惑っているというのなら！」

レッドは帽子をかぶり直し、フシギソウと共に熱い闘志を魅せつける。

「俺があなたを導く！ 今まで旅をし、仲間と培ってきた全ての想いをのせて！ 一人のポケモントレーナーとして!!」

エリカはゆっくり顔を上げ、月を見た。クサイハナがエリカの裾を引く。

このクサイハナは特別だ。エリカが幼少の頃にはじめて手に入れたポケモンナゾノクサ。このポケモンだけは家で大事に育て、レベルこそ上げたものの、荒事には程遠い生活をしてきた。

(それでも、あなたは……)

クサイハナは全身で語っている。主の役に立ちたいと。エリカの中で縮み焼つているものを、今一度新しく芽吹かせたいと。

そのために力になると。

時計の鐘がなった。レッドとエリカの静寂の中、日を跨いだ。

「……」

レッドはプレッシャーを感じた。揺らぐようにエリカがクサイハナを携えて、レッドに向き直る。

しかし、その瞳には戻っている。レッドを導いた光が。

ポケモントレーナーの意思が。

清廉なる戦士が、レッドの前で月を背に桜色の唇を開く。



「……草ポケモンを司るタママシジムリーダー、エリカ」  
「マサラタウンのレッド！」

バトル開始。

ジムリーダー。それは、栄光を目指すポケモントレーナー達の登竜門。

あるときは高き壁として。あるときは次への踏み台として。またある時は良き友として、ポケモンとトレーナー達に戸を開けて栄光への道を示す。

（私はその職務を、全うしていると思っていました）

「フシギソウ、はっばかったー！」

「クサイハナ、しびれごな」

タママシジムにエリカが赴任してから、その人柄とポケモントレーナーとしての強さを慕い多くのトレーナーがジムに集まってきた。

ポケモンと過ごす日々には不満などあるうがはずがなかった。うまくいかない苦しみも絆ある仲間と共に立ち向かえば、心暖かな喜びへの途上に変わる。

（そう確信していた。なのに、圧倒的な力の前に積み上げてきた努力と絆が全て無力であったと証明された。タママシの危機の前になにもできず、私の心は、泣き崩れていた……）

「クサイハナ、はなびらのまい」

「ひるむなフシギソウ！ つるのムチ！」

しびれて動きが鈍るフシギソウに、クサイハナが猛然と襲いかかる。エリカはまだ、戦うクサイハナを直視していない。

（手の震えは未だに止まらない。あの時、サカキの圧倒的な力の前に蹂躪される仲間の姿が瞼の裏に焼き付いて離れない。悲鳴が耳から離れない。私が戦う選択をしなれば、私のポケモン達が傷つくことはなかった！）

「よく耐えたぞ！ やどりぎのタネ！」

「クサイハナ。すいとる」

（私のやり方は間違っていたのか。もしジムのトレーナー仲間たちがサカキと出会ったら、勇気を持って立ち向かう。だけどその結果……）

傷つき倒れていく仲間が脳裏にフラッシュバックする。勇気でなく無謀。勇者でなく愚物。果ては諦念と悲劇の墓石。

わかつている。わかつているはずなのに。

「クサイハナ、メガドレイン」

「フシ!？」

（私はどうして、まだ戦っているの？） 草ポケモンの扱い方の差は、段違いだった。クサイハナは闘いながら自ら回復して、戦うにつれて活力を増していく。

対してフシギソウは、クサイハナの緩急つけた戦いに翻弄され、既に満身創痍。その姿が、かつて敗北した時のエリカのポケモン達に重なる。

「……もう、降参なさい。フシギソウに勝ち目はありません」

「まだだ……!」

「!・ポケモンが傷ついている事がわからないのですか? 勝ち目のない戦いにポケモンを付きあわせても、それはトレーナーのエゴでしかありません!」

エリカには闘志が戻り始めている。しかしその叱責には、涙が混じっていた。愚かな自分がたどった道を、前途有望な、大切なレッドに歩ませたくない。

それでもレッドの闘気は、いや、レッドとフシギソウの闘気は、さらに輝きを増している。

「フシギソウが戦いたいと言っている。俺の魂が勝ちたいと叫んでいる。その心意気があれば、自分たちの限界を超えることができるっ」

「そんなこと……!!」

「俺があの時サカキに勝てたのは! あなたが思い出させてくれたからだ。俺の心に雨が降っていたあの日に傘をさして、光射す道を示してくれたからだ! 多くのポケモンとトレーナーと出会い、絆が形作る素晴らしい世界の扉を開いてくれたからだ!!」

「!!!」

「俺達は決してあきらめない。ポケモンとトレーナーが織りなすこの世界で、真実の絆が、心震える真の強さを花開かせるまでは!!」

フシギソウが傷ついたからだを揺り起こし、底なしの闘気を眼光に宿らせる。蕾が、光を放っている。

そしてゆつくりと開花する。

「……戦っているさなかに、進化……?!? つはなびらのまい!」

「これが、俺達の! 築いてきた絆の力だ!! ソーラー!、ビームウウウウ!!!」

花から放たれた、夜を照らす太陽の光。それが完全に発射しきる前に、クサイハナが相手の花弁へ突撃する。

しかし、その光は一切勢いを弱めることなく、輝きを増していく。

「行けええええ!!」

「っ!!」

激しい爆音と発光があたりを覆い、レッドとエリカは自分たちのポケモンを見失う。

『これが、私の初めてのポケモン……!』

『ナゾ』

『私はエリカともうします。あなたとはいい関係を築きたいですわ』

『ナゾ?』

『ふふ、さあ共に頑張っていきましょう。これから一緒に。新しい世界に……』

静寂と砂塵の先、光の中心だった場所に、2体のポケモンが倒れている。

レッドとエリカがすぐに近づく。どちらも満身創痍、立てる状態ではないのがすぐわかった。だが……。

(「こんな、満ち足りた顔が……) )

決して思い込みではない、2体のポケモンは最高の戦いができた喜びで、安らかな顔をしている。

そして愛する主人に2体とも気づき、目を開けて鳴き声をもらす。

「よく頑張ったな、フシギソウ」

レッドが抱え上げ、回復を施す。

「! あっ……」

フシギソウの蕾は閉じていた。あの時エリカには確かに開いたと思ったのだが……。

(いえ、開いたのでしよう。レッドさんの気持ちに応えて……)

「頑張りましたね、クサイハナ」

「ハナ……!」

本来悪臭を放つはずのポケモン、しかし今は芳しく、花畑にいるかのような甘い匂いを放っている。それがクサイハナの今の気持ちを雄弁に物語っていた。

エリカもクサイハナに回復を施す。

熱い健闘。二人は相棒を誇りながら視線を交わす。

「エリカさん。ポケモンが戦いの経験で強くなるように、ポケモントレーナーもポケモントレーナーとの戦いで強くなれる。俺達はどこまでも、無限に高みへ行ける」

レッドがエリカへ手を差し伸べる。

「生きとし生けるもの全てが持つ可能性……。私は、こんなに当然で大切なことを、一時の敗北で忘れてしまっていたのですね……」

エリカがレッドの手を両手で包み、胸元に抱き寄せて、瞳から頬を伝った雫を落とす。

「俺の中の弱さを認め、一歩進む勇気を与えてくれたのはエリカさんだ。そのおかげで、俺はここまでこれた」

「レッドさん……」

エリカが涙を拭い、なんとか顔を引き締めて、レッドへジムバッジを差し出す。

「……どうか、どうかこれを、受け取っていただけますか。」

差し出されたのは雨上がりにかかる光の架け橋の証、レインボーバッジ。

「はい。ありがたく、光栄に思います！」

レッドはエリカの前でジムバッジを身につける。そこには既にグレー、ブルー、オレンジのバッジがレインボーバッジと共に輝きを放っている。

それを見て、またエリカから涙があふれ、たまらず顔を下に向ける。

あの日出会った少年が、こんなにも……。

(ああなんて)

「……レッドさん……。あの日、ひつく、あなたに会えた事は」

エリカが顔を上げ、レッドへ向ける。くしゃくしゃの顔で、なんとか微笑みを作る。

「私が生きてきた中で、一番の、幸運です……！」

「エリ……！」

エリカがレッドの腕の中に飛び込み、レッドの首へ腕を回して泣き声をあげた。

レッドは戸惑い、顔を赤くしながらも、彼女の役に立てた喜びと嬉しさで顔を綻ばせ、彼女を優しく抱きしめる。

そんな二人を、フシギソウとクサイハナは誇らしく見上げていた。

翌日の昼下がりに。

「おいしい水でいいの？ エリカさん」

「ええ」

ガコンと、タمامシデパート屋上の自動販売機はサイコソーダが入った缶ジュースとおいしい水が入った缶ジュースをはき出す。

レッドとエリカ並んで二人ベンチに座り、缶ジュースを空けて口につけ、そして空を見上げた。

「今日は有難うエリカさん」

「いえいえ。私も楽しかったですから」

エリカに案内されて多くの買い物をしたレッドのカバンはパンパンだった。後で整理しないといけないだろう。

買い物の最中はいつも楽しく会話して時を忘れるほどだったが、今は二人沈黙している。しかし決して居づらくはない。お互いがそばにいる、それだけで安心できる時間。

しかし、それももう長くはない。レッドの旅は、やっと折り返し地点に差し掛かったばかり。

エリカはそれを十分に理解していた。名残惜しい気持ちを誤魔化さず、レッドへ言葉を紡ぐ。

「あなたがタمامシに来る前にタケシやカスミ、マチスさんから連絡が来た時は驚きま



した。熱くて面白いトレーナーが来た。タケシにはあなたの差金かと冗談交じりに言われ、カスミには何故かライバル宣言されてしまいました……」

「そんなことが……。なんか、恥ずかしい」

「どうして？」

「いや、結構ギリギリの時のほうが多かつたから。今思えば、もうちよつと皆の気持ちに応えられたかなって」

レッドは腰のモンスタールボールを軽く叩く。

「ジムバツジを得られたのだからもつと胸を張っていいんですよ。じゃないと、まるでバツジを託した私達が見る目がないみたいじゃないですか」

エリカが目に見えて拗ねる。

「ごっごめんなさい!! そんなつもりは……!」

「ふふつ、冗談ですよ。あなたのもつと強くなりたいてって想い。わかってますから」

「……はは、敵わないな」

お互いが笑みをこぼし、ゆるやかに静寂が訪れる。

寂しげな一陣の風。もう、行かなくてはならない。

エリカは最後に、レッドに案内したいところがあると連れ出した。

そこはタマムシの郊外にある人里はなれた場所。そこから一本道でとなり町のヤマ

ブキに行けるが、エリカはさらに道を外れ樹木森林の間の小道に入る。

エリカのクサイハナが先導し、レッドのフシギソウも後に続く。

森を抜けると、そこには秘密の花園。エリカとその側近数名しか知らない、草ポケモン達のエデン。

一面の極彩の花々、レッドも感動し息を呑む美しさだった。

「あなたを送り出すのは、ここしかないと決めていました。私とポケモン達にとつてかけがえのない大切な場所。私をはじめポケモンの手を取った、始まりの場所……」

花畑の中、エリカはレッドと手をつなぎ見つめる。

「ここで私は、もう一度歩き出します。勝ちたいから。自分の中の弱い自分に、もう一度

……」

「……応援しています。あなたならきっと、身につけることができる」

「ありがとう……レッドさん」

二人の手が離れる。

「それじゃあ、エリカさん」

「待って」

（今まで意識してなかったけど、カスミの言っていることは、こういうことだったのね……）

弟のように思っていた。しかし今は、エリカを支え手をとってくれる、共にいて心温かくなるこの少年のことが……。

エリカは自身の指を唇に長く当てる。レッドが何をするのかと疑問に思っていると、エリカはその指をレッドの口に優しく押し付ける。

呆然としていたレッドだったが、その意味を悟ると途端に顔を赤くして口をパクパクとさせたあと下を向いてしまう。フシギソウがやれやれと首を振った。

エリカも最初はそんなレッドを可愛く思っていたが、次第に大胆な事をしてしまったと自覚し始め、結局レッドと同じく顔を赤くして俯いてしまった。

顔をあげると視線が重なりあい、お互い吹き出して軽く笑い合う。

「また、会いに来ます。必ず」

「はい。私もレッドさんと、また……」

もう一度手を握り合う。名残惜しげに指先が少しずつ離れていく。だけど、もう大丈夫。

エリカは祈りを込めて。レッドは元気な姿を見せて。

「ハナ〜」

「フシ〜」

「……武運を。……行ってらっしゃい」

「はいー……行ってきますー！」

二人の道が交わる、その日まで。

## ヤマブキシテイ

ヤマブキシテイの入り口の関所、レッドはそこに向かう途中、多くの通行人にそこが通行止めになっていることを聞いていた。

しかしどうしても諦めきれず、またそれでも駄目なら、せめていつ開通になるのか直接聞きたいがために関所まで訪れていた。

レッドが関所まで入ると、やる気のなさそうな警備員が肘をついてこちらを見ている。

「ダメダメ。今はここは通行止め……あれ、君は……」

「？」

警備員がレッドの顔をまじまじと見る。

「……いや、失礼。今開通になった。通っていいよ」

「え、本当ですか!？」

「嘘言っただうする。早くとおりな!」

警備員が笑顔でレッドを手招きする。

「は、はい!」

レッドもそう言うならばと足早に関所を通り抜ける。

「……すまねえな。坊主」

レッドが通り抜けた後の警備員のつぶやきと、すぐさま通行止めになった関所にレッドは気づかなかつた。

ヤマブキシティ。そこは多くの企業オフィスを内包した高層ビルが立ち並ぶ、カントー地方の中心地。

(……これは、一体？ 経済の中心地って聞いてたけど……、こんなに人通りがないものなのかな……?)

街の大通りはレッド以外人っ子一人いなかった。しかしこの街を初めて訪れたレッドからすれば、今のこの状態が異常なのか正常なのか判断しかねるところだった。

(……とりあえず、ポケモンセンターとジムに向かおう。そこに人がいないことはないだろう)

が、レッドの思惑は外れた。ポケモンセンターは臨時休業。その後に向かったヤマブキジムもまた、臨時休業。

「嘘だろ……」

レッドは呆然とジムの前で立ち尽くすしかない。

「おっ！ 少年。そのジムは今日は休みだぞ！」

「!?」

突如レッドは後ろから話しかけられた。振り向くと道着を着たガタイのいい男性がいる。

「えつと……」

「ふむ、見たところ君はヤマブキジムへの挑戦者だな！　しかし休業と知ってどうすればいいか悩んでいると見える」

「え、ええ、その通りですが……」

「ならば腕試しに、隣のこちらの施設はいかがかな!?　かつて現在のヤマブキジムと覇権を争った格闘道場だ！　旅のトレーナー達を格闘ポケモンのエキスパート達が出迎えるぞー！」

そう言つて道着の男性は誇らしく格闘道場を見上げる。レッドも閑散とした街中で明るく話しかけてくれた男性に対して安心したのだろう。

「そうですか。それじゃあ、胸を借りたいと思います！」

トレーナーとして断る理由もない。それに、ポケモンセンターが休業だというならこの街の宿についても誰かに聞かなくてはならないだろう。バトルの後にこの人たちに情報を貰えばいい。

「それでは、案内だ！」

レッドが入ると、そこには同じく道着を着た格闘ポケモン使い、俗に空手王と呼ばれるポケモントレーナー4人が出迎えた。

そして外からレッドを案内した空手王も入れて5人。

さっそくレッドもモンスターボールを構える。

「押忍！ よく来たぞ挑戦者！ 俺達空手王5人衆を見事突破してみよ！」

「わかった。行け、バタフリー！」

「まずは俺だ。行け、ワンリキー！」

「バタフリー、サイケこうせん！」

「ぬお!? 一撃で!？」

レッドの采配は冴えていた。時に引き、時に怒涛のように攻めるポケモン達は空手王の扱うポケモンを次々に撃破していく。

「いいぞピジョン！ その調子だ。つばさでうつつ！」

「お、オコリザル!? つ……強い……!？」

気づけばレッドのポケモンは一匹も力尽きることなく4人の空手王のポケモンを撃破した。

「む……!？ それでは最後は俺だ！ 行けエビワラー！」

最後の空手王が扱うのはパンチのエビワラーとキックのサワムラー。しかし、ジムを



4つ突破しサカキとの激戦をくぐり抜けたレッドの敵ではなかった。

「フシギソウ！ はっばかったー！」

「……………ぐっサワムラー戻れ……。見事だ少年」

「こちらこそバトルありがとうございます。その、一つ聞きたい事があるんですが、いいですか？」

「む、なにかな？」

「この辺で安く泊まれる宿はないでしょうか？ ポケモンセンターが臨時休業しててどうしようかと……」

ポケモンセンターはポケモントレーナーに対して無料で宿を貸している。しかし休業中ならば他に泊まるしかない。

「……………そのことか……」

「？」

レッドの言葉に空手王達が皆一様に顔を暗くした。レッドが不安げに問う。

「ポケモンセンターに、なにかあったのですか？」

「実はセンターだけではないのだ……。君、この街をおかしく思わなかったかい？」

「街……………？ 確かに人がいないなあとは思ってたけど……」

「本当は昼間もつと賑やかな街なんだ。だけど、ロケット団の奴らが来てから……」

「ロケット団!?!」

レッドは声を上げる。脳裏に浮かぶは大地のサカキ。あの男のロケット団が、この街にも……。

「ロケット団が、一体この街に何を!?!」

「この街にあるカントーいちのポケモンアイテム開発企業、シルフカンパニーを占拠したのだ。そこからこの街はロケット団のいいなりになって、街の皆は外に出ないよう戒厳令がしかれてしまったんだ……」

「なんでそんなことを……!?!」

「おそらくシルフカンパニーの機能を麻痺させ、ポケモンアイテムを独占するのが目的だろう。そうなればトレーナーがアイテムを買えなくなるのはもちろん、センターでの回復も滞ってしまう……」

「そんな……!?! どこまで卑劣な手を……!?!」

レッドは目に見えて怒りを滾らせる。

「格闘道場の我らとヤマブキシムのトレーナー達もシルフカンパニーの開放のため、奴らに戦いをしかけた。戦いは熾烈を極めたが、ロケット団のある一人の男によって均衡は崩れた……恐ろしい地面ポケモン使いの男だった……」

(……サカキだ)

「じゃあ、ヤマブキジムが閉鎖しているのは……?!」

「ヤマブキジムリーダーナツメは、奴らに人質に取られたのだ」

「!?」

「それだけじゃない。我らと共に戦ったポケモンの一部も、奴らに人質に……」

(なんてことだ……!)

タマムシのことなど、まだまだ序の口だったというのか。ロケット団のとどまることを知らない外道ぶりに、レッドの感情が悲しみと怒りに支配されていく。

しかし、傍らにいたフシギソウはすぐに主の危うい感情を察し、声を上げた。

「フシ!!」

「!・ ありがたいな、フシギソウ」

(……いや落ち着け俺。感情はあくまで行動の理由でいい。為すべきことを為す時は、頭は冷静でなければ)

そうレッドが自分を戒めている内に、空手王の面々が一齐にレッドへ頭を下げる。

「すまない少年! その強さを見込んで、どうかシルフカンパニーのロケット団を倒すのに協力してくれないか!」

「み、皆さん……! それを聞いて、断れるはずなんてありません。俺も奴らとは因縁があります。是非こちらこそ協力させてください!」

「なんと……ありがとう少年。それではさっそく、我らの反攻作戦を聞いてくれ！」  
「はいー！」

作戦は単純な陽動作戦だった。レッドがシルフカンパニーの正面から突入し、ロケツト団を引きつける。

その隙に空手王とジムのトレーナーが裏口から侵入し、捕らわれたポケモンとナツメを救出する。

「危険な役目だが……頼めるか？」

「任せて下さい！」

（エリカさんが受けた傷、そしてサカキとの決着。こんなにも早く精算できる機会が訪れるなんて、願ってもないことだ！）

レッドがサカキに勝てるかどうかはわからない。しかし、また何時戦えるかもわからない相手だ。

（今の俺達で、勝つんだ。勝たなくちゃいけない）

レッドがフシギソウを見つめると、フシギソウも頷いた。

「それじゃあ、時刻通りに。少年、頼んだぞ！」

「はい、皆さんも、シルフカンパニーで！」

レッドは格闘道場を後にする。そのあと、罪悪感に満ちた顔をした空手王達の背後の

物陰から、赤いRの文字が書かれた黒い制服を着た男があらわれる。

「はは、お前ら役者になれるぜ。よくやった」

「……これでいいんだろう。早く俺達のポケモンを解放してくれ!」

「ああ。全てが終わったら無事に解放してやるよ」

「なっ?! 約束が違う!!」

「おいおい、こっちは作戦の途中でこれは作戦の一部だ。約束が違うなんて場違いな事言わないでくれよ。……人質を取っているのを忘れるな」

「くっ……」

空手王の言っていることはほぼほぼ真実だった。彼らが敗北した後、人質によってロケット団の言いなりになっていることを除けば……。

(すまない……少年……どうか無事で……)

しかしレッドはそんなこと知るよしもなく、シルフカンパニーの前まで来た。

遠慮の必要はない。レッドは初めて6体全てのポケモンを出現させ、突撃体勢をとる。

レッドを中心に囲むのはフシギソウ、バタフリー、ギャラドス、ピジョン、ラッタ、カラカラ。

「行くぞ皆。……ポケモントレーナーとポケモンの絆にかけて、ロケット団を倒す!」

レッドのポケモン達が一斉に雄叫びを上げ駆け出す。それを見たシルフカンパニー入り口にいた多くのロケット団が驚愕する。

(エリカさんの想いを受け取った今の俺が、負ける訳にはいかない！ この街とナツメさんを救い、サカキを倒す！)

レッド達のやる気と正義が全て筋書きであることは、彼らはまだ知らない。

シルフカンパニービル前は荒れに荒れていた。

「ラッタ、でんこうせっか！ カラカラ、ホネブーメラン！ バタフリー、サイケこうせん！」

「うわあ!? なんだこいつは!?!」

「援軍だ！ 人をこっちに回せ！ 止まんねえぞ！」

水流とサイケこうせんが相手を押し流し、ホネブーメランが飛んでは相手のポケモンを撃ち落とし、つるが地面を砕き葉っぱが敵を切り裂いていく。

1階ロビーから出てきたロケット団員達が次々にポケモンを繰り出す、レッドはお構いなしに攻撃を続ける。

「くそ！ 俺のポケモンがあ！」

「引け！ 引けえ！」

(よし、ポケモンが倒れたら引いてくれる……)

人に攻撃を向ける気がないレッドからすればありがたい。しかし、逆に言えば彼らにとつては戦いにおいて人にポケモン技を向けるのが当然ということでもある。

(サカキもエリカさんを……！ いや、その怒りは後だ)

「ピジョン、ふきとぼし！、ギャラドスたたきつける！」

二匹のポケモンが一気に敵をなぎ払う。ロケット団員達の氣勢が削がれた。

「屋外じゃ不利だ！ 一旦引くぞ！」

(む、仕方ない。中に入って戦うか)

「いくぞ、皆！」

レッドは小回りが効かないギャラドスを一旦引つ込めて1階ロビーに突入する。

1階ロビーの戦いは長引かなかつた。ロケット団員達のポケモンを数匹撃破すると、

「くそ！ 上で態勢を立て直すぞ！」

「いや待て！ おい小僧！ こっちには人質が……」

(人質?! いやこの距離なら！)

ロケット団員の一人が縄で縛られた黒い長髪の女性を盾に取ろうとする。レッドの判断は早かつた。

「ラッタ！ ひっさつまえば！ ピジョン！ 空をとぶ！」

ラッタが地上から跳ね上がって縄を前歯で切り裂き、ピジョンがロケット団員の顔に急接近する。

「うわ!？」

ロケット団員がひるんだところでピジョンは女性の肩を掴んで舞い上がり、そのままレッドの所へ運んだ。

「しまった! くそ、二階に引くぞ!」

「よくやったラッタ、ピジョン。お姉さん、大丈夫ですか?」

ピジョンから降ろされた女性はバランス感覚が取れないのか、その場で前かがみになつて地面に手をつく。

近くで見ると、凛とした顔立ちの女性だった。長い黒髪 of 艶からか、神秘的な雰囲気がある。

そして、たゆんとしたリッチな胸。

「ん……」

(……………いやいやいや。それどころじゃないだろ俺!……そうだ、確かにヤマブキシムのリーダーは、神秘的な女性のエスパークタイプ使いと聞いている。もしかしたら)

「……まったく、あの男覚えてなさい。ありがとう、きみ。助けられたわね」



女性はレッドの顔を一瞥してすぐに立ち上がり、黒髪を翻しながら向き直った。

「あなたはもしかして、ナツメさんですか？」

「ええその通りよ。私がこの街のジムリーダーのナツメ……情けないことにね。見たところ、あなたは私を助けに来てくれた、でいいのかしら？」

長い髪をかきあげながら極めて静かな口調、感情の起伏の乏しい女性だった。しかし、その瞳にはしつかりとした闘志と意思が感じられる。クールビューティとはこのことだろう。

レッドはエリカとベクトルの違う女性の魅力に少し見とれていた。だがすぐに頭を切り替える。

「ええ。格闘道場とジムのトレーナーとの協同で、あなたと捕らわれたポケモンを救いに来ました。とりあえずナツメさん、一緒に外に……」

「待って、私はポケモンが捕らえられている場所を知っているわ」

「！ 本当ですか！ それじゃあすぐに他の人に連絡をとって……」

ナツメは首を振った。

「ダメよ。時間をかければ奴らに場所を移されてしまうかも。時は一刻を争うわ」

「……確かに。じゃあ教えてください。俺が先に助けに行きます。バタフリーをつけますから、ナツメさんは他の方と合流して」

「ダメよ」

「え」

「説明しにくい場所なの。私が案内するわ」

そう言いながらナツメは自身の服を首からボタンを外していき胸元を開く。レッドは突然のナツメの行動に軽く悲鳴を上げ目を背ける。

「なっなにを!?!」

ナツメはすぐに胸元を直す。その手には2つのモンスターボールが握られていた。

「さすがにここまで奴らも調べなかったわ。足手まといにはならない、いいでしょ?」

「え、ええ」

(そういうことか……………)

リッチがリーズナブルになっている。

「どこを見てものを言っているのかしら?」

「はっ!?!」

ナツメがビキビキとこめかみを痙攣させている。

「い、いえ! なんでもないですよ。…………俺はレッド」

「レッド……。トレーナーとしての腕は信用して良さそうね。それじゃあ行くわよ。こっち」

ナツメは即座に階段への道を早歩きで行く。レッドも慌ててナツメについていき、徐々に速度をあげるナツメにならって上階へと駆け出した。

人質に取られたポケモンの救出、その道程には多くのロケット団員達がレッドとナツメを出迎えた。

「一気に行くわ、フリーデイン！」

「はい、ラッター！」

四方から襲い来るロケット団員のポケモン達。しかしフリーデインのサイコキネシスで動きがピタリと止まると、階段への道に近いポケモンをレッドのラッターが速撃して道を開ける。

強行突破のための戦術はピタリとハマリ、ナツメとレッドは数分もしない内に二階フロアを踏破し上階へと進む。

「戻ってフリーデイン。行つてバリアード、バリアー！ これで階段はしばらくシャットアウトできるわ」

「なるほど……。でもエレベーターは？」

登り切った所でナツメがバリアードのバリアーで下からの階段口を塞ぐ。

「誰かがエレベーターを壊したみたいね。意図はわからないけど……とりあえず階段で先を急ぎましょう」

「ええ。幸いここはロケット団員が少ないみたいですし……」

「……そうね」

ナツメが訝しげな顔をする。

（おかしいわね……。1階にいた人数を考えればまだまだ先にいるはず。なにかあったのかしら？）

1階と2階の戦いが嘘のように、3階は誰一人としてレッドとナツメの行く手を阻まなかった。

「この階は誰もいないみたいですね……。ナツメさん、ポケモンたちは何階に？」

「5階よ、油断しないで行きましょう。シルフカンパニーを占拠した時の人数を考えれば、まだまだ奴らが来るはずよ」

「わかりました。……格闘道場の人たちは大丈夫だろうか……」

「……」

レッドの眩きにナツメは答えず、足早に次への階段を登る。

そして4階。

「なっ……?!？」

一足先に到着したナツメが4階フロアの光景を見て立ち尽くしている。レッドも後れて見て、驚愕した。

「ロケット団員のポケモンが……全滅!?!」

ポケモンがそこかしこに倒れ、そのトレーナーであったロケット団員達はエレベーターに押し固められている。ロケット団員達は皆一様に怯えた表情、無理やり押し込められたのだろう、道理でエレベーターが動かないわけだった。

そんな中4階フロア中央に佇むは一匹のポケモン、そしてトレーナー。

赤き竜リザードン。そして。

「そっちは……ジムリーダーのナツメか。お、レッドじゃねえか!」

「……グリーン!?!」

「よう奇遇だな。こんなところでなにやってんだ?」

ニヒルなやつき顔は見間違いようがない。しかしレッドは敏感に感じていた。

確かな力に裏打ちされた畏怖。サカキにも似たそのプレッシャーを、あのグリーンが放っている。

「グリーンこそ……! ここは今ロケット団に占拠されてる場所だ!」

「ああ、そんなことは聞いたな。俺はただ、フレンドリイシヨップの在庫がここで抑えられてるって言われてな。買い物でサービスしてもらおうかわりに取りに來ただけだぜ!」

「あなた、どうやってここに……って聞いた私が馬鹿だったわね」

ナツメの言葉通りだった。4階の窓が盛大に割れている。レッドとナツメが2階で戦っている間にリザードンで突っ込んできたのだろう。

「さて、トレーナーとトレーナーが出会ったらって言いたいところだが、連中のポケモンを始末している間に俺のポケモンも消耗してな。リザードンも在庫持つてひとつ飛びしないと行けないから、勝負はおあずけだ。突っ込んだ場所にものがあつて助かつたぜ。他のロケット団も倒そうかと思つたが、レッドとジムリーダーがいるなら任せても良さそうだな。じゃあ後頑張れよ、バイビー」

そう言うのとグリーンはリザードンに飛び乗り疾風のように割れた窓から去つて行つた。レッドとナツメは呆然と見送るしかない。

「お……俺達は今、戦えるポケモン持つてねえ！ 勘弁してくれー！」

エレベーターのロケット団員達はよっぽど怖い目にあつたのか、動こうとしない。中には腰が抜けて立てないものもいるようだ。

(グリーン、一体何やつたんだ……)

「……上に行きましょう、レッド」

「……はい。あの、ナツメさんもグリーンと面識が？」

「シルフカンパニーが占拠される前にジムで挑戦を受けたわ。結果は彼の勝ち。あの実

力を持ったトレーナーは中々いないわね。ここまでとは思わなかったけど……」  
(とういかまだ街にいたのね……予知で見えなかったなんて)

「さあ、この階段を昇った先よ。……途中にまだトレーナーがいるわね。ここまで来たら、一気に突破しましょう」

「ですね」

レッドがフシギソウを出し、ナツメもフリーデインを繰り出す。

「む、侵入者だな！ 行けゴルバット!!」

階段の途中にいたロケット団員が気づきゴルバットを繰り出す。

「ここは任せて、毒タイプは相手じゃないわ」

ナツメが一步出てフリーデインに指示を送る。ロケット団員はにやりと笑った。

「!? 後ろだ！ つるのムチ！」

「!?」

レッドの叫びにナツメが振り返る。背後から襲いかかろうとしていたのはもう一匹のゴルバット。天井に付いて待ち伏せていたのだろう。

「ちい。だがそんなつるじゃ、ゴルバットは止まらないぜ！」

ゴルバットはフシギソウのつるを切り裂き、今度はフシギソウ本体へと標的を変えらる。フシギソウのいる場所はどうか、階段下と防火扉に挟まれた袋小路。

しかし、今まさにゴルバットの牙が迫る所でレッドはフシギソウを引つ込めた。

「ナツメさん、走って！」

「!? ちょっと！」

フリーデンが最初のゴルバットをサイコネシスで止めている間に、レッドはロケット団員とナツメの横をすり抜ける。慌ててナツメもレッドを追った。

「なっ！ 貴様ら勝負から逃げる気か！」

「地の利を得ただけだ！ 行けピジョン！ ふきとばし！」

「！ フリーデン、テレポート！」

ピジョンの突風はテレポートで避けたフリーデンを除き、2体のゴルバットを階段下へと吹き飛ばす。

「ぬう！ だがそれしきの突風で！」

「ゴ……ゴル……！」

「な!？」

ロケット団員の言葉とは逆に、ゴルバットは吹き飛ばされて着地した場所から動けない。

「どうした!?! 動けゴルバット！」

ナツメも訳が分からなかったが、すぐにその場所が先ほどまでフシギソウがいた袋小



路だと気づく。

「しびれごなを散布させていたのね……ゴルバットを追い込んだ風は袋小路で巻き上がり、とどまった敵にしびれごなが振りかかる……」

「ある人の受け売りの技なんですけどね」

（エリカさんなら、草ポケモンへの指示一つで散布場所を点在させられる）

「ふふ、やるじゃない。あなたはどうする？ 2体とも動けないようだし、フリーデンでまとめてトドメをさしてもいいけれど」

「くつくそー！ 戻れゴルバット！ 覚えてろー！」

ロケット団員はゴルバット2体を回収し、下階と逃げて行く。

「もう、敵はいないようね。行きましよう。すぐそこよ」

「はー！」

5階フロア、そこにはシルフカンパニーの重役室と会議室がある。

廊下も今までの場所とは違い小奇麗で、あまり人が出入りしたような形跡がない。

（こんなところにポケモンが……？）

「ハイ！」

レッドの疑問をよそに、ナツメは社長室と書かれた部屋の前でとまる。

「……よし、それじゃあさつそく」

「レッド君」

「？」

「さつきはありがとう。後ろの敵から守ってくれて」

「……………ナツメさん？」

ナツメはレッドの方を向かず、扉を開けてレッドを誘う。レッドも入るしかない。

「そして」

レッドとナツメが部屋に入ると、ナツメは後ろ手にドアの鍵を閉めた。

「ごめんなさい」

「え」

レッドが声を上げると、部屋の奥、社長席の椅子が回転し、座っている人物が露わになった。

鷹の眼光、紳士服の胸のRに強大な悪意を集約させた冷徹なる首領（ドン）。

「ナツメ殿、ご苦労だった。タمامシ以来だな少年。いや、マサラタウンのレッド」

「?!?!」

「?!……………サカ、キ……………!!」

「少々予定外の事が4階で起きてしまったようだが、大勢に影響はない。よくここまで来てくれた、レッド君」

サカキはゆつくりと立ち上がり、社長机に片手をつきながら机を軽やかに飛び越え

る。そしてレッドと距離を保ったまま仁王立ちした。

「なっ……どうしてお前が！ それにナツメさん……!?」

「……」

レッドは部屋の隅へと引いたナツメを見るが、ナツメは顔をうつむかせたまま反応しない。

「借りたポケモンとはいえ、久方ぶりに私に土をつけたトレーナーだ。君のことは調べさせてもらった。是非もう一度会いたくてね。ああそれと、彼女は我がロケット団の一員だ」

「なんだって!?!」

「我らロケット団の意思に彼女も同調してくれてね、はは、とういのは冗談だが。彼女にも色々あるのだよ。まずは君のことだレッド君」

サカキよりも背の低いレッドをあからさまに見下す視線。完全に子供を見る目だった。

「レッド君。君は私が仕掛けたテストに見事合格してくれた。格闘道場の空手王、シルファンパニーの我が部下、人質の救出、そして階段にいたゴルバット使いはロケット団の中でもそれなりの使い手だったが、君はナツメ殿を援護しながら見事に突破した。その腕は見事、私の片腕となる素質がある」

「どうしてお前が格闘道場のことを……?! まさか!」

「もう一度わかりやすく言おうか。関所から格闘道場、そしてここに到達するのが私が君に仕掛けたテストだ。まあ、及第点を上げるとしよう。ナツメ殿も名演技だっただろう」

「なん……だと……?」

愕然とする思いだった。格闘道場の空手王もナツメも、レッドは微塵も疑いはしなかった。

「及第点と言うのがそこだ。君はバトルの素質はあるが、人を疑う事を知らなすぎる。人は自らの利益のためなら他者にたやすく嘘をつく。いい教訓になっただろう」

「……どうせ、お前がポケモンを人質にとるなりして無理やり従わせたんだろう!」

「まあそうだが。しかしそのナツメ殿は例外だぞ。彼女のポケモンを私は捕らえていない。彼女は彼女の意味で従っている」

「……そうなんですか?」

レッドの再度の問いかけにもナツメは無反応だった。ただ、拳をいたく握りしめている。

「なんだ、ナツメ殿の事を知らないのか。彼女はエスパークタイプのエキスパートというだけでなく、彼女自身がエスパーク少女なのだよ。幼少の頃からその筋では有名だった」

「!?」

「彼女の 에스パー能力はテレポート、テレパシー、サイコキネシス、そして未来視。彼女は未来視によって、自ら我らに身を捧げた。街の人々に手を出さないことを条件にはあったが、私にとっては些細な事だ」

「未来視……?」

「教えてやろう、彼女が見た未来視、それは」

サカキが自信たっぷりにはげ笑む。

「我がロケット団のカントー制覇、ジムリーダー共々全てのトレーナーがロケット団に膝をつく未来だ!」

「!?」

ナツメがサカキの言葉を聞くと、顔をそむけて目尻から雫を飛ばす。それだけでサカキの言葉が事実だと告げていた。

「当の本人もそれなりに考え、先んじてロケット団に入ることでも中から暴力の抑止力になろうとしたのだろう。あくまで傷つく人間が少なくなるようにな。はは、殊勝なことだ」

「……………めんなさい」

ナツメの謝罪は消え入るような声だった。

レッドの握られた拳は震えている。

「さて、ここまで来たらナツメが君をロケット団に入るよう説得しそうなものだが、それも無駄だと未来視で見えているようだな。ナツメの顔を見る限りは、結果ももうわかっているのかな。どうする少年？ それでもバトルをしたいというのなら」

「ナツメさん、質問があります」

「え？」

レッドはサカキを黙殺した。虚をつかれたナツメがつい声を上げる。

「あなたの未来視は、百発百中なんですか？」

「……そうよ。生まれてきてから今まで、外れたことはないわ。レッド君は、負ける」

ナツメが顔を上げる。レッドを見つめるその表情は、レッドを心底心配している、優しい女性のものだった。

「お願い。いたずらに傷つく必要はないわ。私がサカキに口利きするから、どうかレッド君も……」

「ナツメさん。あなたは優しい人だ。フーディンとバリアードを見ていればわかります。俺がこの旅で学んだことは、ポケモンと硬い絆を結んでいる人に悪い人はいないということ。そしてもう一つは」

レッドが帽子をかぶり直し、モンスターボールを手取る。

「ポケモントレーナー、それはポケモンと人との絆で、不可能を可能にする人を言うこと。あなたが自分の中の未来視に屈したというのなら、俺が代わりに証明します。超えられない壁はないということをして！」

「レッド！ 駄目！」

「止めるなよナツメ殿。この少年には私も借りがあつてね。どの道バトルは避けられん」

レッドとサカキ、対峙した二人モンスターボールを構えて睨み合う。

「エリカ嬢は息災かな？ もうシヨックから立ち直つてるといいが」

「あんたは人もポケモンも見くびりすぎだ。あんたの言うとおり、俺は人を疑うことを知らなかった。だが、あんたが知らない価値あることを俺は知っている」

「ほう？ なんだね？ 絆でも言うつもりか？」

「言うつもりさ。わかつていながら見下して笑うのなら、俺が今一度気づかせてやる。俺と、俺の仲間と！ このポケモンバトルで！」

「相変わらず口だけは二丁前だ。面白い！ ロケット団リーダー、サカキ！」

「……………ポケモントレーナー、レッド！」

二人の声が重なった。

「バトル開始!!」

「行けえ! ピジョン!!」

「行け、ニドリーノ」

お互いに繰り出したポケモンは共に最終進化を残したポケモン。レッドのピジョンはまだレベルが足りないにしても、ポケモントレーナーとしてキャリアが段違いのサカキが使うにしては、ニドリーノは小粒に見える。

事実、サカキがレッドを見る目は変わらない。あくまで生意気な子供を見る余裕の笑み。

レッドはサカキのその顔を歪めると誓う。

(サカキ! お前がその気なら、俺は全力でお前を倒す!)

「ピジョン! つばさでうつ!」

「ニドリーノ、どくばり」

ピジョンの翼とニドリーノの角が激突する。吹き飛んだのはニドリーノだった。

「いいぞ! ピジョン!」

「充分だ、もどれニドリーノ。行け、サイホーン」

「……ピジョン! すなかけ」

「ほう? さすがに以前とは違うアプローチでくるか。つのでつく」



「くっ!？」

（あたたつたか。ピジョンの消耗がやけに激しい……？ ニドリーノの毒針か!）

「戻れ、ピジョン。行け!」

「ポケモンが出た所は大きな隙となる。サイホーン、ふみつけ」

モンスターボールが割れ、光輝くところにサイホーンが先手を打って踏み潰しにかかる。

しかし、躍り出た青き龍によって逆にサイホーンがひっくり返る。

「これは不利だな。戻れサイホーン。行け」

「今だギヤラドス! バブルこうせん!」

負けじとレッドもサカキの交代の隙を狙う。

（大地のサカキ。異名通りならこれでまず一匹……!）

しかしサカキの繰り出したポケモンはバブルこうせんを耐えた。現れたのは……

「……ガルーラ!」

「さて、今度はどうさばく?」

「サカキ……お前、また部下のポケモンか」

「ジムリーダーと同じさ。君のバッジの個数に合わせて戦力を整えた。だが今回は特別に、部下のポケモンを突破した後、私の本気の一匹が控えている。言い訳はしないさ。

私の今の手持ちを倒すことができれば、ヤマブキシティからロケット団は撤退しよう」

「その言葉、忘れるな！ ギャラドス、かみつく！」

「ガルーラ、かみつく」

タマムシと同じ。ギャラドスがガルーラの肩、ガルーラがギャラドスの首にかみつきあう。

「ギャラドス、バブルこうせん！」

「ほう？」

ギャラドスはそのままかみついたままうなり、口内からバブルこうせんを発射する。ガルーラは肩に痛撃をくらい思わず口を離し、バブルこうせんによって壁にたたきつけられた。

社長室の壁が崩れ、廊下があらわになる。

（思い切りがいいな。読みも悪くない。短い間でいい経験をしたようだ）

「ギャラドス、たたきつける！」

「ガルーラ、れんぞくパンチ」

しかしガルーラの猛攻は激しく、レッドはギャラドスが不利と見るやすぐにフシギソウに切り替え、しびれごなどでガルーラの足を止めにかかる。

今度はサカキがすぐにガルーラを引つ込めて、ニドリーノでフシギソウを相手に時間を稼ぐ。

一進一退の攻防。プロリーグと比べ扱っているポケモンのレベルは双方少し足りないが、ポケモンとの連携、戦術、思考スピードは遜色ない程であることを、ナツメはひしひしと感じていた。

(あのサカキと戦術で渡り合ってる……?! レッドのポケモンの扱い方は、既に全国のトレーナーと比べても一線を画している。だけど……私の予知は……)

ナツメの脳裏に写る予知の光景、レッドとその配下のポケモン達が倒れ、サカキが無感動にそれを眺めている。レッドがどれだけ素晴らしい戦いを見せようとも、ナツメがどんな行動を取ろうとも、変わらない未来。

(私に……なにができるの……?)

「フシギソウ、つるのむちー！」

戦いつづけるレッドとサカキ。そして見守るナツメ。そんな三人は、5階に上がってきたもう一人の男に気が付かなかった。

「くそー、あの二人め。どこに行つたー！」

現れたのは一般的なロケット団員制服を着る男。レッドとナツメに対し、ゴルバット2体を伴って立ちはだかった男だった。

ナツメがロケット団に与した事をサカキは一般団員に伏せていたため、ゴルバットを麻痺から回復させた男は血眼になって二人を探していた。

男は5階に上がると、すぐに社長室から響く轟音に気づいた。廊下には先ほどガラーラによって壊された社長室の壁の残骸が散らばっており、壁の穴から中の様子が伺える。

「あれは……サカキ様とあの小僧！ 戦っているのか……さてよ」

（あの小僧。サカキ様に夢中だ）

「先ほどの礼だ。行け、ゴルバット！」

ロケット団員の男は壁の穴からモンスターボールを投げ入れる。まもなく社長室にゴルバットが出現する。

「ゴルバット、切り裂く！」

「え」

ゴルバットは風を切りながらレッドに急接近し、その凶刃によってレッドの体を切り裂きながら吹き飛ばした。

レッドは壁にぶち当たったあと、地面に倒れ伏す。

「……え」

ナツメがかすれた声を出しながら目を見開く。サカキのニドリーノとレッドのフシ

ギソウの戦いも止まった。

ロケット団員の男ははしやぎながら社長室に飛び込む。

「やりましたよサカキ様！ 侵入者を一人排除しました。あとはお前だけだ！ ジムリーダーナツメ！」

サカキから笑みは消えていた。サカキは心底つまらなそうにため息を吐いたあと、  
「……よくやった。ナツメはもう戦う意志はない」

ロケット団員に声をかけた。興が削がれたと、全身で語りながら。

「むー！ そうなのですか。ならば……」

「ちよ、ちよつと！ なにをする気？ 早く手当を！」

「動くなナツメ」

いつの間に出したのか、サカキのポケモンであろうニドキングの爪がナツメの首筋でとまる。

ロケット団員の男は動かないレッドに近づく。途中でフシギソウがレッドに駆け寄ろうとしたが、すぐにゴルバットに行く手を阻まれた。

「意識はあるようだな。サカキ様、こいつのポケモントレーナーとしての実力は脅威です」

「いいだろう。心を折ってやれ」

サカキは社長机に体重を軽くあずけ、ロケット団員を顎でしゃくつた。

ロケット団員はにやつきながら、

「起きろ坊主。ポケモンを借りるぞ」

「う……………」

ロケット団員はレッドの腰からモンスターボールを取り出し、残りの5体のポケモンを出現させる。空になったボールは全て踏み潰された。

皆サカキのポケモンとの戦いで傷ついている。

「な……………なにを……………!?!」

レッドが辛うじて意識を覚醒させたが、状況が掴めず混乱している自分の仲間たちを見ることしかできない。

「こうするのさ。お前ら、動けばご主人様が傷つくぞ!」

ロケット団員はレッドの首にゴルバットの羽の切っ先を押し付ける。

その光景を見て、気性の荒いギャラドスですら愕然として動きを止めた。他のポケモンは言うまでもない。

そしてロケット団員はもう一匹のゴルバットを出現させる。

「ゴルバット、奴らを切り裂け!」

「や……………やめろ!」

レッドの叫びは無意味だった。ゴルバットが飛び回ってレッドのポケモンを攻撃する。レッドを人質に取られたフシギソウ達は、攻撃を受け続けるしかない。

「……………こんな、こんなは無意味よ！ やめさせて！」

ナツメもたまらず叫ぶ。しかしサカキは、あい変わらず無感動に見ながら、非情な要求をする。

「レッド君。君がロケット団員に入るのなら、すぐさま攻撃を中止しよう」

「ぐ……………!!」

レッドのポケモン達のくぐもった声が響き、また一匹、また一匹と倒れていく。レッドは苦悶の表情。

「おっと動くなよ坊主。ゴルバットが力の加減を間違えちゃうといけねえ」

「さあ、どうするレッド君」

しかし、サカキとロケット団員の言葉はレッドに届いていなかった。レッドの心にあるのは、ただひとつ。

（皆が……………傷ついている。俺が……………俺が……………守って……………守らなければ……………!!）

「くっとうおおお!!」

レッドは駆け出す。ゴルバットの羽がレッドの首を浅く切ったが関係ない。

「無駄だ、ゴルバット！」

レッドに羽を突きつけていたゴルバットがレッドの背後に迫る。しかし、

「フシ!!」

「フリー!!」

フシギソウのはっぱかったーとバタフリーのサイケこうせんがレッドの背後のゴルバットをとらえ、吹き飛ばした。

「しまった!?! くそ、だがもう一匹を忘れるな!」

しかし、フシギソウとバタフリーは直後にもう一匹のゴルバットに攻撃をくらい倒れ伏してしまう。

これ以上攻撃を受けたら、死んでしまう。ゴルバットの攻撃がレッドのポケモン達に迫る。

「やめろお!!」

レッドは今まさに攻撃を受けようとしていたギヤラドスの首に覆いかぶさる。そして、レッドの背中に激痛が走り、また吹き飛ばされる。

「ぐあっ……!!」

「レッド!!」

「この小僧、馬鹿か?」

「……」



しかし、レッドの起き上がりは早かった。動けないバタフリーを襲おうとしていたゴルバットの攻撃を、またしても庇う。

今度は、踏みとどまる。

「ぐっ……!!」

「なっ……お前……なんで」

レッドの全身が焼けるように痛い。しかし、レッドの足は止まらない。またしてもゴルバットの攻撃を、動けないラッタに覆いかぶさって庇う。

「……ぐ……はは……」

（この坊主……いつちまったのか？）

「レッド……う？」

ナツメもレッドが分からない。そんなことはやめて逃げろといたいが、レッドの突拍子もない行動に驚きの度合いの方強くなってしまった。

サカキは、先程から動かない。

レッドは、笑っていた。

「痛い……痛いな……。こんな痛い思いをしながら、皆は今まで、俺の指示で戦ってくれてたんだな……。凄いよ……」

（レッド……！ あなた……！）

ナツメの心が一気に締め付けられる。レッドの意図にやっと気づいた。レッドが袖に懸命に隠して使っている、キズぐすりに気づいた。レッドは勝負を諦めて自暴自棄になっているのではない。

レッドは一瞬足りとも、目指す道から外れていない。

(レッド……あなたは本当に……どんな状況でも、あきらめないのね……。私は……)

なんて情けないことかと、ナツメの頬に涙が伝う。自分よりも年下の少年が、圧倒的な暴力の前でも膝を屈さない。

(それに比べて私は……ロクに戦いもせず、敗北が決定した未来を受け入れて……このざま。ロケット団の内部に入って彼らを軟化させるなんて、なんて甘いことを……！)

ナツメが見た予知が、目の前で完成しようとしている。

(だけど……、その先はせめて……、レッドとレッドのポケモン達を……救うことだけでも……)

ナツメの首には相変わらずサカキのニドキングの爪。モンスターボールを投げた瞬間、その爪はナツメを襲うだろう。

しかし、ナツメは覚悟を決めた。未来は変わらないかもしれない。抗うことはできないのかもしれない。

だが、真のポケモントレーナーを見殺しになんて出来はしない。

(……レッド、あなたを救う。ジムリーダーが膝を屈しても、あなたなら……。私の命に代えても、あなたを救う！)

ナツメは自身のエスパー能力、テレパシーを使いボールの中のフーデインとバリヤードに命令を先送りする。

あとは、ボールを投げるだけ。

(レッド……。どうか、生きて！)

ナツメは自身の首に食い込む爪を無視して、両手から2つのモンスターボールを投合した。現れたバリヤードとフーデインがレッドへと向かう。

ナツメは脛を強く絞り、最後の時を待つ。が、

「え……………」

いつまでも来ないニドキングの爪。ナツメが目を開けると、ニドキングは腕をおろしており、サカキは腕を組んだままレッドを眺めている。まるでそれ以外なんの興味もないように。

(……今はレッドの方が先！)

ナツメはレッドの元へ駆け出す。

「レッド!!」

ナツメのバリヤードがレッドたちの前に躍り出て、バリアーを展開する。フーデインはゴルバットをサイコキネシスで弾き返す。

「なっ、ゴルバットかみつく！」

「フーデイン、サイコキネシス！ レッド、返事をして！ レッド！」

ラッタを守るようにして抱きしめていたレッドへ、ナツメが懸命に語りかける。

「ナツメ……さん」

「!! 良かった……!! ……フーデインと私の力を合わせてテレポートを使うわ。すぐにビルの外へ行くわよ」

ナツメのテレポートは最終手段だった。これだけのポケモン達と共にテレポートを使えば、ナツメも消耗してろくに動けなくなるだろう。

（だけど、今は逃げるしかない！ サカキが動かないうちに！）

それはごもつともだがレッドの考えは違った。

「待つて……ください。俺と、サカキのバトルは、決着が、ついてない……」

「……っ!! 馬鹿な事を言わないで！ 今そんな場合じゃ……」

「……決着が、ついてないんです！ 俺とポケモン達のバトルが……!」

「!？」

レッドの闘志に満ちた瞳に、ナツメは吸い込まれた。

「お願いがあります、ナツメさん。俺の、ポケモンたちに……この薬を……」  
「……………」

ナツメは迷った。だが、ここで彼の戦いを否定したら、いけないような気がする。

「……………わかったわ。任せて」

バリヤードとフリーデンが時間を稼いでいる間、ナツメはレッドのポケモン達に回復を施していく。ナツメが緊急用にとっておいた最高級品、かいふくのくすりも惜しみなく使った。

（この子たちも、レッドと同じ……。どうして、こんな瞳ができるの？）

レッドとそのポケモン達の、魂が燃えている。

「くそ、サカキ様！　どうか援護を！　俺だけのポケモンでは……うわ!!」

バリヤードがバリアーを解除し、攻撃態勢に写る。

「いい加減に、しなさい！　フリーデン、バリヤード！　サイコネシス！」

「ぐわあああああ!!」

一点集中させた念力がゴルバットを吹き飛ばし、ロケット団員の男もそのゴルバットに巻き込まれて社長室の扉を壊しながら彼方に飛んでいった。

ナツメはすぐさまサカキに向き直る。奴がその力をこちらに向ければ、ナツメも全力で反抗しなければならない。

(レッドと私で勝てるかどうか……。いえ、今のレッドにやっぱり無理は……)

ナツメのそんな思惑は、なんとか立ち上がったレッドの一言で却下される。

「仕切りなおしだサカキ。お前もポケモンを回復させろ」

「?!?」

「……本気かね。レッド君」

「ああ……本気だ」

レッドだけじゃない。先ほどまで倒れ伏していたフシギソウ、ピジョン、ギャラドス、カラカラ、ラッタ、バタフリーが、傷こそ治療されたものの疲労困憊の体で立ち上がる。

そして、例外なく戦意で満ちている。

「レッド……」

ナツメは呆然と眺める。

(なぜこんな瞳ができるの？ 人も、ポケモンも！)

サカキが組んでいた腕をとき、自身のポケモンたちを全て出して懐からかいふくのくすりを取り出す。

「レッド君、どうしてそこまで君はポケモンバトルにこだわる。君自身骨が折れているかもしれない体で、どうして中断されたバトルにこだわる？」

レッドとレッドのポケモン達の眼光は、全てを圧倒していた。

「俺がポケモントレーナーだからだ。信頼できる仲間たちと共に、正々堂々と戦った先にこそ、本当の勝利を得る事ができるからだ。俺の魂に刻まれた想いだけは、例えどんな状況であろうと、例え相手が悪の根源であろうと、変わりはない」

ふらつくレッドの体を、ナツメが慌てて支える。レッドはありがとうとナツメへ微笑む。

「レッド……、せめて、あなたをこのまま支えさせて。倒れないように……」

ナツメの涙が被った願いを、レッドは優しく受け入れた。

サカキがポケモンの回復を完了させる。

そして初めて、笑顔をなくしてレッドに対峙する。

「……レッド君。私は君を見誤っていた。君は私の片腕候補では決してない。今持てる私の全てを持って君を敗者に落としめなくてはならない、私の敵だ」

レッドは笑った。その敵意、バトルでもってサカキの全力を後押しするならばこれ以上のことはない。

最後に、レッドは振り返って自らのポケモン達を見渡した。

「皆、行けるか？」

「グオオオオオオオオ!!」

一際声量があるギャラドスの雄叫びが響いたが、レッドの全てのポケモンが沸騰する激情で叫んでいる。

皆思いは同じ、正々堂々と戦い、勝つ。

「レッドのポケモンが戦闘不能と判断したら、私のバリヤードがバリアーを張って、フリーデンで回収するわ。両者異論はないわね」

「いいだろう」

「ありがとうナツメさん。バトル再開だ。行け！ バタフリー！」

「行け、ニドリーノ」

「バタフリー。つ……サイケっこうせん!!」

声と共にレッドの全身に激痛が走る。しかし倒れる訳にはいかない。

「ニドリーノ、きあいだめ」

「バタフリー、もう一度だ！」

（すごいなバタフリー。キヤタピーの時はあんなにちっちゃかったのに……本当に強くなつたな）

「ニドリーノ！ つのでつく！」

サカキの采配は全く曇らない。ニドリーノがサイケっこうせんを耐え、バタフリーが息をついた瞬間渾身の一撃を与える。



バタフリーの急所にあたり、バタフリーは一気に吹き飛んで地面を転がる。ナツメがすぐさま判断する。

「バタフリー、戦闘不能」

レッドには見えた。バタフリーが最後、確かに笑った。

（お前の想い、無駄にはしない!!）

「行け！ ピジョン！ 空をとぶ！」

ピジョンの突撃をニドリーノが迎撃する。ニドリーノの角がピジョンに迫るが、ピジョンはすんでの所で体をずらし、ニドリーノを弾きとばして戦闘不能に追い込む。

「戻れニドリーノ。む」

サカキの手が止まる。レッドのピジョンが光り輝いている。

現れたのはポツポの最終進化系、ピジョット。優雅な羽ばたきとともに、高らかに叫ぶ。

（なんだポツポ。そんなに綺麗だったのか……）

「行け！ サイホーン」

サカキは動じない。岩タイプとひこうタイプの激突、その相性を遺憾なく発揮してサカキは肉弾戦をものにした。

サイホーンとピジョンとのお互い渾身の力込めた正面衝突は、サイホーンの硬い体に

ヒビが入ったものの、ピジヨットは力を使い果たして倒れる。

「ピジヨット、戦闘不能」

「行け、カラカラ。ホネこんぼう！」

カラカラはサイホーンの突進を読んでかわし、ピジヨットがヒビを入れた場所を正確に打ち砕く。サイホーンは唸り声を上げて倒れた。

サカキがサイホーンを戻す。そして、カラカラの体が光り輝く。

（悲しみを乗り越えたお前は、冷静に状況が見る事ができる勇者だ。お前の力、存分に見せてくれ！ ガラガラ!!）

勇敢に自身を守った母と同じ姿、ガラガラは溢れ出る闘気を雄叫びに変える。

「行け！ ガルーラ！」

「ガラガラ、ホネブーメラン！」

ガラガラがガルーラへホネブーメランを投合する。

「二度同じ手は通用しないぞ。……なに？」

サカキの予想に反し、ガラガラは投げたあとすぐにガルーラへ走る。ガルーラはホネブーメランをかわし、ガラガラに肉迫する。

「よける！ ガルーラ！」

カーブして後ろから戻ってきたホネブーメランをガルーラが身を振ってかわす。し

かし、ガルローラが避けた所でガラガラが飛び上がり、ホネブーメランを片手で受け取る。

「ホネこんぼう！」

そのままガラガラはガルローラへの脳天へと振り下ろす。しかし、サカキのガルローラは真剣白刃取りでホネこんぼうを受け止める。

「れんぞくパンチ！」

ガルローラが手を離し、中空のガラガラにパンチのラッシュを浴びせた。

「ガラガラ、戦闘不能」

「行け、ギヤラドス！」

（ガラガラのホネこんぼうと今のラッシュで、ガルローラの拳はもう使えんな。だがガルローラにはまだ牙がある。そして！）

「ギヤラドス！ 噛み付く！」

「ガルローラ！ 噛み付く！」

（ギヤラドス！ お前は進化する前から勇敢な戦士だった！ お前の勇猛な姿は、俺をいつだって勇気づけてくれた！）

三度のかみつきあい。顎の力はギヤラドスに分があり、今ガルローラは拳を封じられている。

「そのまま押し切れるぞ！ ギャラドス！」

いや、ガルーラに拳はあつた。ガルーラの腹袋の中に。

「ガルーラ……れんぞくパンチ！」

腹袋の中の子ガルーラが雄叫びを上げる。そして母に変わりギャラドスへ、拳、拳、拳、拳のラツシュ。

「ガルガルガルガルガルガルガル!!」

マシガンのような子ガルーラのラツシュがギャラドスの首裏を殴り続ける。ギャラドスの顎が、開いた。

「トドメだ。ガルーラ、そのままかみ砕け！」

「ギャラドス！ バブルこうせん！」

ギャラドスが倒れ伏す直前、バブルこうせんでガルーラの脚をすくった。

ガルーラの戦意はまだ途切れていないが、膝が震えている。

「ギャラドス、戦闘不能！」

「行け、フシギソウ！」

フシギソウとガルーラは一切の迷いなく駆け出し、お互いの距離を詰めていく。

しかしガルーラは途中で脚がおぼつかなくなり、バランスを崩す。

「フシギソウ！ つるのムチ！」

「ガルーラ！ かみつく！」

口を開けて前傾姿勢になったガルーラの足を、フシギソウはつるで正確に掴んだ。そして自身はサイドステップしてガルーラの牙を避ける。

ガルーラは前のめりになったまま転ぶ。

「フシギソウ、しびれごな！」

「ガルーラ！」

（しびれて動けんか……）

「フシギソウ！ ソーラービーム!!」

ガルーラが動けないところを、フシギソウは蓄をガルーラの顔の前へと持って行き、0距離でソーラービームを炸裂させた。

「戻れ、ガルーラ。……久々だよ。私の本当の手持ちを使うのは、行けニドキング！」

悠然と立つニドキング。

対して、ポケモンとして最後のピースを得たフシギソウが光り輝きながら、背の花を開かせる。

（これが……ポケモンとトレーナーの持つ力……）

ナツメは手が震えていた。恐怖ではない、魂を震わせる何かによって。

（行こう、相棒。どこまでも！）

「フシギバナ、勝つぞー！」

「バナアアアアアア!!」

お互い最後のポケモン。奇しくもレッドとサカキの考えは一致していた。

小細工一切なし、今自分の相棒が放てる最高の技で相手を葬り去る。

フシギバナの花の中心に光が集中する。ニドキングの角が緩やかに回転し始め空間を振動させる。

二匹とも、主の考えとシンクロしていた。

「フシギバナ!!」

「ニドキング!!」

お互いに手をかざす。勝利を信じて。

「ソーラー！ ビームウウウ!!」

「つのドリル！」

フシギバナの大輪から放たれた煌々と輝く太陽の光。ニドキングは一步も引かず、その光を超速回転する角で受け止める。

「行けええええ!!」

「くっ!!」

ニドキングが角でソーラービームを受け止めながら、ゆっくりと一歩ずつ地面にヒビ

を作りながらフシギバナに近づいていく。その角でフシギバナを貫くために。

対して、フシギバナのソーラービームは輝きを増すばかりだった。ニドキングの角へと放たれるビームが時をおう毎に太さを増していく。

しかしニドキングもひるまない。角をさらに高速回転させて、放たれるソーラービームを拡散させる。拡散したビームが放射状に広がって部屋の壁、天井、窓、床を破壊していく。

「レッド!!」

ナツメがたまらず叫ぶ。このままではビルが持たない。

だが、遅かった。

「!?!」

すさまじい轟音と共に、レッド達が立っていた床が大きく波打ち、ひび割れる間もなく完全に崩れ去る。天井も落ちてきた。

ニドキングへと向かっていたソーラービームの軌道が逸れてビルに風穴を開ける。

「サカキ!!」

レッドは中空に放り出されながら、瓦礫に消えていくサカキとニドキングに叫ぶ。

「勝負はおあずけだな。待っているぞ!」

サカキはそうレッドに叫んだ後、崩れ落ちる瓦礫で見えなくなった。

レッドはその一言を聞いて、緊張の糸が切れた。

(皆……今度は絶対に、勝とう……)

レッドは浮遊感を気にする間もなく、意識を闇に沈ませていく。

しかし、最後に頼りがいのある綺麗な声を聞いた。

「レッド!! フーデイン力を貸して……! テレポート!!」

ヤマブキシティ。ロケット団によって封鎖されていたこの街は、一人のリザードン使いの通報によって、各地のジュンサーとジムリーダーが包囲していた。

タケシとカスミもヤマブキシティの北から進入し、逃げ出してきたロケット団達を捕らえるのに協力している。

しかし、突然シルフカンパニーから光の筋が天に伸び、轟音ともに崩れ去っていくのを二人は目撃する。

「なにが起こっているんだ……!?!」

「早く! タケシ! あそこに向かうわよ!」

「待てカスミ危険だ! おい!」

シルフカンパニーへと走りだすカスミ。タケシも追うしかない。

「あれは……」



西から駆けつけたジムリーダーエリカも、シルフカンパニーから伸びる光を目撃していた。草ポケモン使いの彼女は、あれがなんの光がすぐにわかった。

(レッドさん……!!)

彼女は走る。胸に宿るは確信と焦り。なにか、いやな予感がする。

(……)は……一体……)

ナツメは目を覚ます。体の節々が痛い、動けない程ではない。また、やけに回りが暗いことに気づいた。

(どこかの……洞穴? レッドたちは?)

無我夢中で行った最後のテレレポート。ここがどこかもわからないが、レッドたちのレポートがうまく行ったかも知信が持てなかった。

だが、ナツメは気がついた。やけに体が重いと思ったら、レッドがナツメの上のしかかかって気絶している。レッドとナツメのポケモンたちも傍らにいるようだ。

「レッド……息、あるわね。よかった……」

ナツメがレッドの口に手を当てて確認し、安心する。また、少し離れた場所に光があるのにも気づいた。外は遠くないようだ。

(でも動ける状態じゃないわね。なんとかして外に助けを……)

「ラッター!」

「！ あなた……」

ナツメが鳴き声の方を振り向くと、レッドのラッタが光がある方角から駆けて来た。サカキとのバトルでは出番が来なかったために、余った力で回りを偵察してきてくれたようだ。

そして、ラッタの背後に迫る黒い影。

「ゴルバツ!!」

「!?!」

突如としてゴルバツトがナツメ達の前で羽ばたく。ナツメは戦慄した。まさか、あのロケット団員が……!!

「あれ……このゴルバツト……」

「レッド！ 気がついたのね！」

レッドはナツメに支えられながら体を起き上がらせる。レッドはゴルバツトの頭を軽く撫でる。

「オツキミ山の時の……。助けに来てくれたんだ」

レッドは微笑む。そして、光の方から声がした。

「おーい！ ジュンサーさん来てくれ！ 俺のゴルバツトが見つけた。おーい！」

徐々に声の主の顔が鮮明になる。

「オツキミ山の時ぶりだな少年！ まさかとは思ってロケット団用の秘密通路をあたって見たが、大当たりだ！」

「いい、ゴルバットですね。あの時のズバット……」

「ああ。俺もロケット団から足を洗って、今回ジュンサーに協力してたんだ。ロケット団員だけが知ってる秘密通路はいくつもあるからな！」

そして多くのジュンサー達がレッド達の元に駆けつける。レッドもナツメも、やっと本当の意味で安心した。体から力がどっと抜ける。

「ラツタ、よくやってくれたな……」

レッドがラツタを撫でると、ラツタも心からホッとした顔でレッドに身を任せる。

「ナツメさん、ありがとう。あなたがいてくれて、本当によかった」

レッドも気を失う前の脱力感に身を任せ、ナツメにもたれかかって顔を寄せた。

ナツメはそんなレッドに、微笑みながら涙を流す。

「バカ。私にお礼なんて言っちゃ駄目よ……でも、お疲れ様。格好良かったわ」

ナツメは自身の予知を初めて覆した存在をそっと抱き寄せ、腕の中のレッドの頬に口付ける。

少年はポケモンたちと共にやっと、休息を得た。

レッドが目を覚めたのは、白い病室。

体がひどくだるい。しかしポケモン達の事が頭に浮かび、ゆっくりと体を起こそうとする。

「おはようレッド。無理しない方がいいわ」

「！ ナツメさん……」

レッドが病室のドアへ顔を向けると、ちょうどナツメが入ってきたところだった。

「あなたのポケモンは皆無事よ。安心して」

「……………よかった。そうだ！ 人質に取られていたポケモンは!?!」

「私も気になってただけ、前にグリーンがフレンドリイショップの在庫を回収しに来てたでしょ？ あそこに混ざってたみたいなの。持ち主への返却は昨日までに終わったわ」

「……………そうなんですか。グリーンが……………あれ?」

椅子に座りながらレッドのベッドへ突っ伏している誰かがいる。レッドが起き上がった際に毛布が被ってしまったのだろう。

(誰だ…………?)

レッドはゆっくりと毛布をめくる。すると現れたのは、タمامシの淑女。

「エ……………エリ……………!?!」

驚きの声を喉で飲み込む。エリカは眠りが深いのか、規則正しい静かな寝息を立てな

がら安らかな寝顔をレッドに晒していた。

「あなたが入院してから一時もここを離れなかったのよ。あとでお礼を言っておきなさい」

「……ええ」

レッドの手がエリカの頭を優しく撫でる。エリカが少し微笑んだ気がした。ナツメが茶化すように笑う。

「レッドも今は体をゆっくり休めて。あなたに面会したい人が大勢いるわ」

「わかりました。ナツメさん、俺のポケモン達は……」

「すぐ持つてくるわ。あなたの新しいモンスターボールに入れてね。……どうしたの？」

「いや……」

レッドはベッドに体を預けて天井を見る。

（グリーンにも助けられちゃったな。それに、あの時のリザードン……。それに、サカキ）

脳裏に浮かぶは果てしなき強者。

もつと強くなりたい。レッドは決意を新たにしながら、来てくれたエリカにお礼を言おうと彼女の覚醒を待つ。

その時は程なく訪れた。

「ん…………あれ…………私…………」

「おはよ、エリカさん」

「レッツ…………!?!」

レッドの声掛けと同時にエリカがすぐさま顔を上げる。

エリカは涙を耐えている顔で、ゆっくりレッドの顔へと両手を伸ばして頬を包む。

そして顔を近づけていき、頭を前に倒してレッドと額を合わせて目を瞑り、微笑んだ。

「本当に…………もう…………。心配したんですから…………」

「ごめんなさい…………。ありがとうエリカさん。看病してくれて…………」

レッドもエリカの頬へ手を伸ばし、エリカの瞳からこぼれた涙を指で拭う。

エリカも耐え切れなくなったのか、レッドが怪我をしている部分を刺激しないように、ゆっくりと抱きしめる。

「あなたが目を覚まさなかつたら…………! こんな再会、もう二度とごめんですよ…………」

エリカがレッドの肩へ顔をのせ、レッドに頬ずりするように首を傾ける。

「うん。…………約束します」

レッドもエリカの背へ片腕を回す。

ちなみにナツメが部屋の隅にいた。

(……………むう)

「ごほんっ」

「はっ!?!」

ナツメの咳払いで二人が顔を赤くしながら素早く離れる。

「そろそろ皆を呼んできてもいいかしら?」

「は、はい。よろしくナツメさん」

「ええ、私も後で来るから。またね。そうだレッド」

「はい?」

「レッドが気を失う前にしたあれ。私のファーストキスだから。んっ」

ナツメはウインクしながらレッドへ投げキッスして退室した。

レッドが呆然と見送る。エリカの顔が見えない。

「……………事情を聞かせていただいても? レッドさん?」

「い、いや待って!?! 一体何のことだか……………!?!」

「女性の唇を奪ってにおいて、知らぬふりをするのですか?」

「エ、エリカさん! 本当になんのことだかわからないんだ! 信じて!」

「っーん」

閑話休題。レッドの面会者は多種多様だった。

「レッド君、少し無茶をしすぎだぞ」

「そうよ！ もう、心配させないでよ……バカ」

「ありがとう、タケシさん、カスミ」

「ミーもいるよ！ ボーイは本当にデンジャラスね！」

「はは、すみませんマチスさん」

ジムリーダー達。彼らが集まったのはヤマブキシティを包围してロケット団を捕らえるためだったが、奇しくも全員レッドが戦ってきた者達だった。

タケシが安心したように微笑み、カスミはレッドを心底心配している顔でレッドの手を握る。マチスだけはレッドの勇気をたたえているようだった。

そして次に訪れたのは、ヤマブキの空手王達。

「すまなかったあああ!!」

見事な五連土下座だった。レッドも乾いた笑いをするしかない。お礼にと格闘道場免許皆伝の証であるポケモン、サワムラーかエビワラーを受け取ってくれとせがまれたが、レッドはそのポケモンを使ってヤマブキシティを守ってほしいとやんわりと断った。空手王達はレッドの一言で男泣きし、医者と看護婦によって強制退場させられた。



そして次に訪れたのは、シルフカンパニーの社長と社員達だった。

「ご、ごめんなさい！ 俺のせいで、ビルがあんなことに……!!」

「いやいや。君の活躍のおかげで、ヤマブキにいるロケット団が壊滅したとグリーン君から聞いたよ。ビルはまた立て直せばいい」

「グリーン!? どうしてグリーンのことを社長は……」

「在庫をとりかえしてくれるように頼んだのは私なんだよ。ビルが占拠されたとき、ナツメさんとジムトレーナー達、そして空手王達が社員の逃げる時間を稼いでくれてね。私もその隙にフレンドリイショップに避難して、店員に身をやつしてロケット団の目をくらませていたんだ」

「成る程……」

「これは心ばかりのお礼だ。是非受け取ってくれ」

「……マスターボール！ こんな貴重なものを……!!」

「ポケモンアイテムはトレーナーに使われてこそだ。君のこれからの良き旅路を祈って  
るよ」

レッドは深々と頭を下げると、社長は朗らかに笑いながら去って行った。

「さて、皆さん出て行かれましたね。とりあえず今日は私達が最後です」

「そうね」

今部屋にいるのはエリカとナツメ。しかし甘ったるい雰囲気は一切ない。

真面目な顔をしたエリカが話を切り出す。

「レッドさん。怪我をしている所恐縮ですが、正直に言いますね。私は……あなたを病院で見た時、身も心も凍る想いでした。あの特別れてから、こんなにも早く、こんな形で再会することになるなんて……」

レッドもエリカの気持ちがかかる。故に、彼女を心配させてしまつて申し訳ない気持ちがあり、また自分の実力のなさが情けなかった。

「心配かけて、本当にごめんなさい……」

レッドも頭を下げた謝罪する。そんなレッドに、ナツメが助け舟を出す。

「エリカ、レッドがこんなことになったのは、私が……」

「そのことについては、特に怒りはありません。ただ一つ別に、私がナツメさんに怒っていることがあります」

「?」それは……?」

ナツメには予想がつかない。

「ナツメさん。ポケモン協会に辞表を出しましたね」

「!」

レッドが目を見開いてナツメを見つめる。

「……当然よ。私は街のジムリーダーでありながら、誰よりも早くロケット団に膝を屈した。それだけでなく、レッドを、こんな目に合わせてしまった……！」

「そんな、ナツメさん!! 俺は!」

「レッドさん?」

エリカの笑顔でありながら語気のこもった声にレッドが押し黙る。

しかし、エリカはふっと表情を柔らかくして言葉を続けた。

「その辞表は私がポケモン協会に言って握りつぶしてもらいました。ナツメさんには追って数日の謹慎処分がくだるでしょう」

「エリカ!? 私はもうジムリーダーにふさわしくなんてっ」

「少し黙ってください。レッドさん、ナツメさんはレッドさんに対して罪の意識を感じています。レッドさんはどんな償いをしてほしいですか?」

「償いなんて……あ」

(そういうことか……)

レッドはエリカの考えを理解した。

「それじゃあナツメさん、俺と今度ジム戦してください。全力でポケモンを操る元気な姿を見せるのが、俺にとっては最大の償いになります」

「……馬鹿。いえ、本当の馬鹿は、私ね……。わかったわ、レッド。ありがとう……」

今までで一番の綺麗なナツメの微笑みをレッドは見た気がした。レッドもつられて微笑む。

「……レッドさん、私からは最後に一言」

「は、はい！」

急にまたエリカの語気が強くなった。レッドは思わず背筋を伸ばす。

しかし、エリカは目を閉じてレッドの手を両手で包むように握り、自身の顔まで持ってきて鼻と唇を軽くレッドの手の甲につける。

「……どんなときでも、無事に帰ってきて。元気でいてください。あなたの体は、決して一人のものではないのです」

「……はい……！」

「……はい、終わり。レッドさん。それじゃあ私はタمامシジムに戻ります。いつまでも空けてはいられないですから」

「はい、また」

「ええ、また。……ナツメさん」

エリカは去り際、ナツメの耳元でつぶやく。

「譲る気は毛頭ありませんので」

「!？」

ナツメが驚いて振り返るが、エリカは気にした風もなく病室を去って行った。

「どうしたのナツメさん」

「……いえ、なんでもないわ。レッド、私の謹慎が終わる頃には、体治ついているといいわね」

「もちろん！ ナツメさんとのバトル、楽しみですから！」

「ええ！ 私も、とつても楽しみ……」

レッドとナツメが二人で笑いあう。ナツメは一つ、心に決めた事がある。

（楽しい未来は、予測できないからこそ、ね）

数週間後、レッドが退院と共に向かった先は……。

「おーす！ 未来のチャンピオン！ ここのジムリーダーは……つていう必要はなさそうだな！ 奥で待つてるぞー！」

ヤマブキジムの受付兼案内人が笑顔でレッドを見送る。

レッドがワープゾーンに翻弄されながらもたどり着いた先、そこには……。

「ようこそ。私はジムリーダーのナツメ。あなたが来ることは既にわかっていたわ……なんてね？」

ナツメが首を傾げながらレッドに微笑む。レッドは帽子をかぶり直し、好戦的な笑みをナツメに向ける。

「それじゃあ、俺が今から何をするかもわかりますか？」

「ええ、もちろんわかるわ。でもそれは、私がエスパール少女だからじゃない。私が、ポケモントレーナーだから」

「……行きます！、マサラタウンのレッド！」

「エスパールタイプを司るジムリーダー、ナツメ！」

『バトル開始イ！』

「行け、ラッタ！」

「行きなさい、ユンゲラー！」

心地良い高揚感で体が軽く感じ、自然と声はずむ。レッドとナツメから溢れ出る熱くて楽しい感情が、二人のポケモンにも伝染する。

「ユンゲラー、サイケこうせん！」

「ラッタ、でんこうせっか！」

ユンゲラーがレポートで移動しながらサイケ光線を放つと、ラッタも負けじと高速移動してかわしていく。

（レッド……。サカキと戦うあなたは、逞しくも危うく見えた。そして、対峙して初めてわかる事が一つある。あなたの純粋な魂は、戦っている相手ですら熱くさせる）

「負けるなラッタ！ ひっさつまえば！」

「ユンゲラー、サイコキネシス！」

ラッタのひっつきまえばがユンゲラーにクリーンヒットするが、ユンゲラーも苦い顔しながら最後の力を振り絞り絞りサイコキネシスをラッタに当てた。

『ラッタ、ユンゲラー、戦闘不能！』

「戻れラッタ。行け！ ガラガラ！」

「行って、バリヤード！ さすがねレッド」

「ナツメさんこそ！ でも俺も負けません！」

（私、笑ってる。ポケモンバトルを笑いながらできるなんて、思っても見なかった……）

ナツメにとって、未来予知は絶対だった。しかしもう違う。予測できない勝負がこんなに楽しいなんて知らなかった。

そして、それを教えてくれたのは目の前の少年。

「ガラガラ、ホネこんぼう！」

「バリヤード、バリアー！」

（バリヤードの考えていることが伝わってくる。エスパージじゃない、今まで共に過ごしてきたからこそわかる。心の繋がりが……）

「バリヤード、サイコキネシス！」

「今だ、ホネブーメラン！」

バリヤードが攻勢に移つたのを見計らい、ガラガラはバリアーを迂回するようにカーブをかけてホネブーメランを投合する。

しかし、投げた時にはバリヤードのサイコキネシスがガラガラに届いていた。  
「ガラ!?!」

しかし、ホネブーメランもすぐにバリヤードの後頭部に直撃する。

「バリ!?!」

『ガラガラ、バリヤード、戦闘不能!』

(羨ましいいな……。レッドはこんなバトルを、ずっと前から知っていたのね)

「さあ、これが最後よレッド。用意はいい？」

「もちろん！ 行けギヤラドス！」

「行きなさい！ フーデイン！ サイコキネシス！」

「ギヤラドス、バブルこうせん！」

フーデインが速攻でギヤラドスを削っていくが、ギヤラドスは持ち前の体力で耐える。ギヤラドスの攻撃は当たれば、防御の低いフーデインを一撃で倒せる威力がある。

ナツメはそれがわかっているから、万全の策を取る。



「テレポート。そう、その調子よ」

「くっ！ ギャラドス、バブルこうせん！」

ヒットアンドアウェイのフリーデインを、ギャラドスのバブルこうせんが追う形。

(このまま行けば、ギャラドスを削りきれ……あつ！)

ナツメがレッドの策に気づいた時にはもう遅かった。バブルこうせんの泡がバトルフィールドにとどまり、フリーデインの動けるスペースがなくなってきた。

テレポートとはいえ、泡がまとわりつけば行動が遅くなるのは必定。

「ギャラドス、かみつく！」

「!? テレポート！」

フリーデインの動きが遅くなり、すんでのところまでギャラドスのかみつきをかわす。しかし、慌てたフリーデインはテレポートする場所を誤った。

「フツ!? フー……!!」

フリーデインがテレポートしてしまったのはフィールドの泡溜まり。体にまとわりついて次の行動が遅れる。

「たたきつける！」

レッドのギャラドスも、今度は外さなかつた。

『フリーデイン、戦闘不能！ 挑戦者レッドの勝利！』

バトルが終わり、お互いのポケモンを手元に戻す。

(負けちゃった……)

しかし、ナツメの心には涼やかな風が吹いている。一度目をつむって感慨にふけた後、レッドへと近づいてく。

「バトルありがとうございました」

「ええ。私も楽しかったわ。それじゃあ、はい。ゴールデンバッジ。つけてあげるわ」  
「わっ」

ナツメがレッドの上着を軽く持ち上げ、ゴールデンバッジをつける。

つけ終わると、また二人向い合って微笑みあう。

「ねえレッド。もし助けが欲しかったら、なんでも言つて。レッドのためなら、どこへだってすぐに駆けつけるわ」

「ありがとう、ナツメさん。それじゃあもしものときは、頼りにさせてもらいます」

残念ながらレッドは女性の魅力についてはわかって、自分自身が色恋に積極的になるにはあと少し年齢が足りないようだった。

(あら。でもこれなら、私にも……。ファッションとか気をつけた方がいいわよね……)

「そういえば、あなた本当に覚えてないの？」

「? なにをですか?」

「……シルフカンパニーの時、ロケット団の秘密通路であなたが気を失う前……」  
「……………」

レッドはキョトンとしている。本当に覚えてないようだった。

(レッドつて天然ジゴロ……? まあ、いいわ)

「そう、じゃあ今度は忘れないでね。私の、感謝の証なんだからっ」

「え、わっ!？」

ナツメがレッドを抱き寄せ、レッドの頬には……。

「へくちゅっ。あら……風邪かしら?」

タمامシの淑女も、ただ想い人を待つだけではまずいかもしれない。

## セキチクシティ

タママシシティ。レッドは次のジムがあるセキチクシティを指すため、ヤマブキシティを離れ、タママシシティの西からセキチクシティへ繋がるサイクリングロードを指していた。

レッドは怪我から回復した姿をエリカに見せるためタママシジムに寄り、エリカに見送られながら再び旅立とうとしていた。

「怪我のないようになさってくださいね。ハンカチとティッシュは持っていきますか？回復の薬と食料の携帯は？ ポケモン達の回復は？ 怪我の具合は本当に……」

「だ、大丈夫だよエリカさんっ。本当にもう怪我は治ってるし、準備も万全だよ！」

ベタバタとレッドの体を触りまくるエリカ。本人は心配であるがゆえに行っているために、レッドも無碍に振り払えず、声を上ずらせながら答えるしかない。

「……わかりました。でも、本当に気をつけてくださいね」

エリカもやっとレッドから離れる。以前タママシでレッドと戦い旅に送り出した途端、再会したのが彼の病室だったショックを、エリカは表面上大丈夫そうにしながらも引きずっているようだった。

「うん。エリカさん。これを……」

そんなエリカを察して、レッドは用意しているものがあつた。それは日記帳。

「これは……？」

「俺がマサラタウンを出た時からつけている、旅のレポート」

「え……そんな大事なものを、私に……？」

「エリカさんに持っていて欲しいんだ。これからも、カイリユー便でエリカさんに届けるよ。それにエリカさんはタمامシ大学でポケモンの研究をしてるんでしょ？ ポケモン達と一緒にいて気づいた事も書いてあるから、役に立てるかなって思つて」

レッドがポケモン達と辿つてきた旅の記録。エリカはその重みをひしひしと感じながら、大事に受け取る。

「……わかりました。ですが、一時的に預かるだけです。必ず、取りに来てください」

「……もちろん。それじゃあ、行つてきます」

「……行つてらっしゃい。サイクリングロードは最近暴走族が出ると聞いています。どうか、お気をつけて……」

「うん！」

さよならは言わない。レッドは後ろ髪が引かれる思いを振り切り、自転車にまたがつてエリカへ手を振りながらサイクリングロードへ向かつた。

サイクリングロード。そこはタمامシシテイから西南へ降った半島の先から、海上に架かつてセキチクシテイへの道を繋ぐ二輪車専用橋。

橋そのものがセキチクシテイへ下る坂状になっており、タمامシシテイからセキチクシテイへ向かう自転車搭乗者はペダルをこがずに一気に抜ける事ができる。

「おー!!」

レッドも多くの利用者の例にもれず、自転車に座っているだけで風を切る事ができる楽しさに興奮していた。海上を通っているだけあり、自転車から見える景色はまるで空を飛んでいるかのような光景だった。

（そういうえば、こんな場所に暴走族つてどういうことだろう？ この坂では皆坂に身を任せてスピードを出すだろうから、暴走も何もないと思うけど……。でも、あんな怪我をしたあとだ。気を引き締めて行こう。もう、仲間達に心配かけるわけにもいかないしね）

そんなレッドの気の引き締めは、無駄に終わった。レッドが降っていた先、自転車の前輪の高さに合わせて張られたワイヤーが、猛スピードで来たレッドの自転車にひっかかる。

「へ」

レッドが見る景色が空に舞い上がり、逆転した。自転車がワイヤーによつて空に跳ね

上がり、乗っていたレッドもまた、自転車のサドルから大きく上方に投げ出される。

幸か不幸か、レッドが投げ出された場所は走者が緩やかに減速するためのカーブ地帯。レッドは自転車と共に落下防止柵を高々に超えて海上に投げ出され、どぼんという水音と共に氣を失った。

(ん……あれ……う……こ……は……)

潮の香りと共に、さざ波の音が聞こえる。また、レッドがいる場所がゆらりゆらりと揺れていた。海上に浮かぶ小舟だった。

「気がついたよ、ちちうえ」

「!? え……」

レッドの顔を覗いていたのは覆面の忍び装束の少女。高い声とレッドよりも低い背丈、その少女が小舟の先端に立つ人物へと報告する。

「うむ！ お主。怪我はないようだな」

落ち着いていて少ししわがれた男性の声だった。しかし、少女と同じく彼も覆面、忍び装束を着ている。レッドは状況を把握した。どうやらサイクリングロードから海に投げ出され、彼らによって救われたのだろう。

「助けていただき、ありがとうございます。あ、俺の荷物……」

「(ハハ)だよ」

少女がレッドの寝ていた横を指さす。荷物は水に濡れているが、中を荒らされた形跡はない。自転車も無事だった。

「あの、あなた達は……」

「すまぬな。お主をすぐに陸へ届けたいところだが、拙者達の用事がすんでからとなる。今は体を休めておくといい」

「え、ええ。あの、どうして覆面を？」

「あたいたちにも、事情あるのだ！」

少女が舌足らずなしゃべり方で胸を張る。覆面の男は特に反応しなかった。

（答える気はないってことか……。悪い人たちじゃあなさそうだけど。仕方ない、今は言うとおりに体を休めよう）

ピジョットを使って空をとぶ事も考えたが、現在地がつかめない場所ではさすがに飛ぶのはかえって危険だと思い直し、レッドは目を瞑った。

覆面の者達も特に会話せず、海の上の小舟は静かに進んでいく。晴天だったが、しばらくすると海上を霧が覆い始める。

（……船が止まった？）

レッドは目を開ける。小舟は海上の大きな橋の下、その支柱に着けていた。覆面の少女がロープで船と支柱を固定する。



「一人船の上にいるのは危険だ。お主も上に上がれ。ポケモンは持っているか？」  
「う、うん。ピジョットがいるから」

「よし、出てこいモルフォン！」

覆面の男がモルフォンを出す。覆面の男と少女がモルフォンに掴まって橋に上がり、レッドもピジョットと一緒に上がった。

(ここサイクリングロード、だよね)

ここまでくればレッドは彼らに付き従う必要もなさそうだったが、レッドは彼らが気になった。

覆面の二人は霧の中を進んでいく。その先に人の笑い声が聞こえた。

複数の野太い男の声だった。声の主達は皆派手なパンクルック。派手なバイクに跨がり談笑しているようだった。

(彼らは一体なにをするつもりなんだ……?)

「行け、モルフォン！」

「いけ！ズバット！」

「げっ！忍者だ!!」

「やべえ逃げるぞ!!」

「え!?!」

覆面の男がモルフォン、少女がズバットを出現させると、パンクルツクの男たちがバイクを発進させて逃げようとする。

「逃しはせんよ！ 観念してもらおう！」

しかしモルフォンとズバットがすぐさま行く手を阻む。

「ちい！ やるぞ！ 行け！ ゴーリ……うわあ！」

モンスターボールを投げようとした瞬間、モルフォンが男にサイケこうせんを発射して吹き飛ばす。

もう一人のほうも少女のズバットによつて、モンスターボールを握っていた手を打たれていた。

「勝負をする気はない。さあ、荷物を全て出してもらおうか！ そちらの男もだ」

覆面の男が恫喝するとパンクルツクの男たちは苦虫を噛み潰した表情で従う。レツドは驚愕した。

「なっ!? なにをしているんですか!? くっ！」

(こんな事をする人たちだったとは！ 早くポケモンを出さないと……！)

「お主、動かん方がいい」

「!?」

レツドは覆面の男に言われ初めて気づいた。レツドの背後にポケモンの気配がある。

「ドガア……」

(ドガース!? いつのまに!?)

「ポケモンを出して拙者達の邪魔をするのはやめてもらおう。さあ、荷物を全て出した後は両手を上げて跪くのだ」

「くそっ!」

レッドが見ているしかなかなか、パンクルックの男たちは持ち物を覆面の二人に回収され、今度は手足を縛られた上目隠しをされた。

「よし、後はいつも通りに」

「うん、行けズバット!」

少女がズバットに命令すると、ズバットがサイクリングロードの地面すれすれを攻撃した。レッドが注意深く見ると、細い紐のような物が地面に落ちている。

(あれは……ワイヤー? 地面に張られていたのか?……!)

レッドは自分が海に投げ出された時の事を思い出した。確かあの時、自転車が地面に張られたワイヤーで……。

「終わったよ、ちちうえ」

「うむ。少年も気づいたようだな。ドガース、戻れ」

レッドの後ろにいたドガースが覆面の男のモンスターボールに戻る。

「あのワイヤーは、彼らが張っていたんですが？」

レッドはもうポケモンを出す気はなかったが、覆面の者達を見る眼は険しい。

「そうだ。奴らはこのサイクリングロードを根城にする暴走族。ふつ、暴走するだけならまだしも奴らは、コースにワイヤーを張って利用者が飛び上がるのを面白がっている上、けが人が出ても通報せずに荷物を強奪する始末。少年だって、拙者達がいなければ命が危なかっただろう」

「……そのことについては、感謝します。彼らが悪い人だというのも。しかしそれは、ジュンサーさん達の役割では？」

「ジュンサーなんて！」

覆面の少女が叫ぶ。覆面の男はすぐに少女をいさめる。

「よせ。少年の言う事もわかる。だが、現状ジュンサー達の動きを待っていても被害が広がるばかり。現に彼らはこの霧を利用してワイヤーを張って獲物を待っていた。我らが海上から潜入して虚をつかねば、捕まえるのは難しかっただろう」

「……確かに。彼らはこれから？」

「船に乗せてセキチクシティに運ぶ。その後はこいつらの悪事の証拠をまとめて一緒にジュンサー達の元に引き渡す。匿名でな」

覆面の者達が慣れた様子で男たちをポケモンで船に運んでいく。

「さて、少年。ここから自転車で下に降りていけばセキチクシティに行けるが、どうする？」

「……俺も、乗せてください」

「？　なんで乗るんだ？」

少女が不思議そうに言ったが、男は特に気にした様子はなかった。

「いいだろう」

パンクルツクの男二人が増え、また船が海上に出る。レッドは船に揺られながら、思案にふけていた。

「逃げようとしても無駄だ。荷物は全てこちらが持っている上、ここは海上。下手な事はしないことだ！」

覆面の男の声に、パンクルツクの男たちは怯えた声を出す。ポケモンの技を向けられた事もこたえているのかもしれない。

（この覆面の二人、相当な使い手だ。ジムリーダー達と比べても遜色ないかもしれない。だが……）

レッドが思い出すのは、先ほどのモルフォンとズバットに追い詰められて怯えるパンクルツクの男たち。

確かに治安を乱す者達を自主的な活動で捕らえるのは、称賛される事だろう。しかし

レッドの脳裏に浮かぶのは、シルフカンパニーで自らを襲ったゴルバットの凶刃。

(ポケモンの技を人に向ける……。いや、覆面の人たちはいたずらに人を傷つけるために戦っているわけじゃない。正式なバトルでない以上仕方のない事だ。エリカさんだってゲームコーナーではねむりごなを使っている。わかってはいる。わかってはいるのだが……)

レッドの心に残る謎のしこり。しかし、レッドがその謎を解く前に、船がまたしてもサイクリングロードの支柱に取り付く。

「行くぞ。少年もついてくるなら、飛べるポケモンをだすことだ」

「……」

サイクリングロードに出ると、覆面の男がベトベトンを出し、パンクルツクの男たちをその背中に乗せて運んでいく。

覆面の少女はズバットと共に、レッドと覆面の男よりも先駆けしていき、しばらくすると戻ってきた。

「いたよ、ちちうえ。あそこの物陰に一人」

「うむ。行け、モルフォン！ かぜおこし！」

(!! 相手が気づいてないところを!?)

物陰でニヤついた笑みを浮かべているスキンヘッドの暴走族の男にモルフォンが迫

る。すると男は気付いたのか、一気に恐怖の顔に歪んだ。

「ひいつ!？」

「……ピジヨットおー!」

「なに!？」

スキンヘッドの男にモルフオンのかげおこしが当たる直前、レッドがピジヨットをかけ、ピジヨットのかげおこしで相殺した。

「なっなんだ。お前ら!？」

スキンヘッドの男は訳が分からず混乱している。レッドは覆面の男たちと暴走族の間にピジヨットと共に立つ。

覆面の男と少女のレッドを見る瞳が、一気に敵意に変わる。

「なんのつもりだ、小童」

レッドは表面上落ちていたが、その胸中は迷っていた。

（今俺がやったことは、正しいことではないかもしれない。覆面の人たちは治安を守るため、正義のためにポケモンと一緒に戦っている。だけど……）

「……ポケモンが人を傷つけるところを、黙ってみている訳にはいかない」

レッドとピジヨットの体が勝手に動いていた。絶対の正義などレッドにはわからない。ただ、レッドが言っていることだけが全てだった。

「ほう……」

「お前なにを言っているんだ！ そいつは暴走族だぞ！」

「まあ待て」

覆面の男が少女を制し、少女は不満げに押し黙る。

レッドと覆面の男が無言で対峙する。すると、レッドの後ろにいた暴走族がモンスターボールを構えた。レッドも敏感にそれに気づいて振り返る。

「なんだか知らねえが、俺の前から消えな。俺はサイクリングロード暴走団の一人！  
下手に歯向かえば痛い目を見るぜ！」

スキンヘットの男はレッドに助けられた事を微塵も気に止めず、モンスターボールを放りオコリザルを出現させる。

レッドはふつと笑う。

「ポケモン勝負か？ なら受けて立つ！」

「ああん？ なんだこのガキ」

暴走族はレッドをよくわからない生き物を見るような目で見る。

「まあいい！ オコリザル、奴を蹴散らせ！ メガトンパンチ！」

「ピジヨット！ かぜおこし！」

レッドはタイプ相性をいかし、ピジヨットを上空に飛ばたかせてメガトンパンチを避



け、オコリザルの背中にかぜおこしをクリーンヒットさせる。

「くそ！ メガトンキック！」

しかし負けじとオコリザルも飛び上がり、メガトンキックでピジョットに突撃する。

「ピジョット、つばさでうっ！」

ピジョットも肉弾戦に応じる。つばさでうつとメガトンキックの激突は、以外にもオ

コリザルに軍配が上がった。

「よっしやあ！ もう一度だ！ オコリザル！ メガトンキック！」

「負けるなピジョット！ つばさでうっ！」

（この少年……）

覆面の男は静観していた。

再びのピジョットとオコリザルの激突。今度は相打ちで両者吹き飛び、オコリザルが

着地に失敗する。対してピジョットは空中で身を翻し体勢を立て直した。

「くそ！ オコリザル！」

「ピジョット、かぜおこし！」

オコリザルはかわしきれずに吹き飛び、力なく声を上げて倒れた。

「な!?! くそ！ 負けた……！」

暴走族の男はオコリザルを戻し、苦い顔をしながらレットを睨む。

「俺はマサラタウンのレッド。ポケモントレーナーです。ポケモン勝負なら、いつでも受け付けます。……いい戦いでした」

レッドはピジョットをボールに戻して、自ら暴走族の男に近づいていく。そして、握手をするように手を差し出した。

「なっ……なんのつもりだ……!!」

「あなたのオコリザル、凄く連携がとれていました。タイプ相性をもともせず戦う姿は手ごわかった。大事にされてるんですね」

スキンヘッドの男はキョトンとした後、吹き出して笑った。そしてレッドの握手に応じる。

「ははっ！ わかる奴じゃねえか……マサラタウンのレッドか。次は負けねえぜ」  
そしてレッドの握手に応じた。レッドは続けて話す。

「一つ知っていたら教えていただきたいことがあるんでいいですか？」

「ああん？ なんだ？」

「今サイクリングロードで、コースにワイヤーをつけて利用客に怪我をさせる事件が起きています。なにかご存知でしたら、教えていただきたいのです」

「……」

スキンヘッドの男はレッドの握手を離すと、罰が悪そうに自分の頭を搔いた。

「ああ、それは俺がいるサイクリングロード暴走団の一部の連中がやってる事だ。俺たちはジュンサーの眼を掻い潜るのに慣れてるからな。好き放題する奴らもいるってことだ」

「なるほど……ご協力ありがとうございます。もし知っていたら、そういった事が頻発する場所を教えてもらえませんか？」

「……俺がやってるとは、疑わねえのか？」

「ポケモントレーナーに、悪い人はいませんから」

レッドの裏表のない笑顔に、暴走族の男は少しひるんだ。

「……この先のカーブと、セキチクシティ最後の直線の間地点にある休憩所に行ってみろ。ただ、坊主。行くなら一人では行くな。必ずジュンサーか大人の奴と行け。世の中皆、聞き分けがいいやつばかりじゃねえからな」

「ありがとう。それじゃあ」

「……おう」

スキンヘッドの男がバイクに跨って去っていく。

「甘すぎるな」

消えていた覆面の男が霧から現れる。レッドも覆面の男に向き直る。

「奴は暴走団の一員。奴がワイヤーを張ったことがあれば、利用客の荷物を強奪したこ

とがあるかもしれない」

「……そうかもしれない。……でも、俺は……」

レッドは自らのモンスターボールを取り出し、見つめる。

「ポケモンと確かな絆を築いている人を信じたい。例えばさっきの人が罪を犯していたとしても、オコリザルと共にガムシヤラに頑張っていた事を思い出せば、自分の誤ちを自ら正そうと、行動を改めてくれると信じたい。被害を最小限に抑えることはもちろんです。だけど、ポケモンと一緒にいるがゆえに途中で道を誤ってしまった人の心を改める事も、同じくらい大事な事だと、俺は思います」

シルフカンパニーでビルが倒壊した後、レッドがテレポートした場所で真っ先に助けに来てくれたロケット団員。さっきのスキンヘッドの男もきつと、バトルを通してなにか感じる事があったと、レッドは信じている。

「……甘いだけでなく、欲張りな小童だ。だが、だからこそポケモンとの絆の深きトレーナーとなれた、か」

覆面の男が覆面を外し、素顔をレッドに晒した。

「ちちうえ!!? なんで!?!」

「あなたは……?」

男は少女の声を無視し、レッドに名乗った。

「拙者はセキチクシティでジムリーダーをしているキョウ。こちらは我が娘のアンズ。お主のことは、各地のジムリーダーから話を聞いていた。大分無茶な事をしてたようだな」

「ジムリーダー?!? 通りで……」

「小童。お主の言う事、拙者は実現不可能のことだと思う。世界には光があれば影があり、悪がいるから正義がいる。各地のロケット団と戦った君ならば、ポケモンを使い理不尽な事をするでしょうもない連中がいるのはわかるはずだ」

キョウの言葉に、レットは目を閉じる。そしてゆっくりと開き、自分に言い聞かせるように言った。

「ええ。だからこそ、ポケモントレーナーとして、自分にできることを俺はやるだけです。ポケモン達は皆純粋です。ポケモンと触れ合って生活している人であれば必ず、ポケモンと一緒にいられる喜びが記憶の底に眠っている。それを思い出すことができれば、必ず……」

「そんなの関係ない！ あいつらは悪だ！ すぐにとつちめてやらなきや」

「やめろアンズ、帰るぞ」

「ちちうえ!!」

「奴らが潜んでいる場所がわかった。さすがのジュンサーも、あらかじめ場所がわかつ

ていれば取り逃すことはあるまい。拙者達は与えられた本分に戻る」

「……」

アンズは納得していないようだったが、しぶしぶキョウに従った。

「お主もここからはサイクリングロードを降れ。脇の側道を通れば、奴らもいないだろう。さっきのスキンヘッドの男の言葉を信じるならな。まさか、一人で奴らのところに行くきはあるまいな？」

「……ありませんよ。大人の方の忠告は聞くものですから。あなたの本分がジムリーダーでありトレーナーを迎える事であるように、ジュンサーさん達も道を間違った人たちを捕まえて、更生させるのが本分ですから。今はそれを信じて、俺はセキチクシティのジムに向かいます」

(……純粹に過ぎるな。その純粹さが、濁らない世界でありたいものだ……)

しかしキョウはそう思いながらも、あえて視線をきつくしてレッドを見る。

「……先ほどの大言、貫くならばトレーナーとしての力をジムで見せてみる。口だけではない」

そう言つてキョウ達は霧に消えた。

レッドは自転車に跨がり、緊急時に対応できるようピジョットを出して並走するようになる。

「ピジョット、戦ったお前はどうかだった？ さっきのスキンヘッドの人は、本当に悪い人だったのかな」

「ピジョー！」

「はは、そうだよな。俺も、そう思うよ。行くか！」

レッドはピジョットに微笑み、一気に坂を降る。霧が晴れ、視界にセキチクシティが現れた。

セキチクシティ、そこは自然多き豊かな街。

この街の目玉は自然の豊かさを生かしたポケモンゲットツアー施設サファリゾーン。サファリゾーンでしか手に入らない珍しいポケモンを求めて、多くのトレーナーが訪れる。

レッドはそれを一瞥し後で寄ってみようと思いつつ、キョウが待つセキチクシティジムを目指していた。

しかし道中、目の前につき最近出会った女性が現れる。

「……あら、レッド！ 嘘……すごい偶然……！」

「ナツメさん！ どうしてここに？」

ナツメがレッドに駆け寄って来てレッドの両手を握る。

「セキチクジムに使われてるギミックの監修に来たのよ。ジムを今度新しくするからつ

て頼まれて……あ。これ、オフレコでお願いね」

ナツメが顔をレッドに近づけウインクする。

「ジムを新しく？　じゃあ、今日のジムの営業は……」

「それは大丈夫。ジムの営業に支障がでないようにスケジュールされてるから。今日も通常通り行われるはずよ」

「そうですか……」

レッドは難しい顔をしている。

「どうしたの？　なにかあったの？」

「いえ……。そのナツメさん。セキチクシティのジムリーダーって……？」

「そうね……。セキチクシティジムリーダーはキョウ。専門は毒タイプで、ジムリーダーの中でも古参の方ね。私もバトルを見たことあるけど、毒ポケモン使いの中ではカントー地方一でしょうね」

「どんな方なんですか？」

「どんな、ねえ……。忍者の末裔っていうのは聞いたことあるわ。毒に対抗するための薬の知識も豊富。サファリゾーンや周辺をボランティアでパトロールしてて、市民の人からも信頼されているそうよ」

「……」



『小童。お主の言う事、拙者は実現不可能のことだと思ふ。世界には光があれば影があり、悪がいるから正義がいる。各地のロケット団と戦った君ならば、ポケモンを使い理不尽な事をするどうしようもない連中がいるのはわかるはずだ』

(キョウさんのあの言葉は、やはり経験に裏打ちされたものだったのだろう。だけど……、俺が戦うのは悪を倒すため……いや、素晴らしいバトルがしたいからだ。マチスさんと戦った時のような、見ている人すらも熱くさせる、そんなバトルを……)

そしてレッドの脳裏にエリカの顔が浮かぶ。

(エリカさんも、故郷を守るために戦った。それは正しいことだ。だが、エリカさんが再び心に光を取り戻した時、キョウさんがやった事をするだろうか。ポケモンと共に、悪を打つ……)

言葉だけならヒロイック。しかし、レッドは自身の行動を思い出す。オツキミ山の時のロケット団員。サイクリングロードでのスキンヘッドの男。そしてシルフカンパニーでのサカキ……。

「レッド? どうしたのそんなに眉間にしわ寄せて……。なにか、悩み事?」

「ああ、いえ。えつと……」

「言っただでしょ。あなたの力になるって。相談ならいつでものるわよ」

「ナツメさん……」

レッドはナツメの顔を見て、今まで戦ってきた人たちの顔を思い出す。タケシ、カスミ、マチス、エリカ、ナツメ。そして……。

『勝負はおあずけだな！ 待っているぞ！』

(皆……どこか晴れやかな顔をしていた)

しかし、ただひとつの心残り。

『こんな……こんな認めねえ！ 畜生！』

(グリーン……)

彼とはシルフカンパニーで出会った時、何倍もたくましくなっているように見えた。だが、レッドはグリーンの今の本質を、まだ知らない。

「大丈夫です。悩みは晴れました。ありがとうナツメさん」

「え!? あ、そっそう……。でもよかったわ。これからジムに挑むんでしょ？ 私も同行してもいいかしら？」

「ええ。もちろんです」

セキチクジムにはすぐに到着した。中に入ると、キョウがジム中央のバトルスペースで目をつむり正座している。その後ろにはキョウの娘のアンズが控えていた。

「来たか……む、ナツメ殿も」

「えっと、ジムのギミックの監修に来ただけ……。先にやった方がいいかしら？」

ごめんね。すぐに終わるから」

しかしキョウがレッドとナツメに手をかぎす。

「否、その小童に小細工は不要。ナツメ殿、この戦いが終わるまで待つていただきたいが宜しいか」

「いいわ。頑張つてねレッド」

「はい」

ナツメが観客席に移動する。レッドの顔は、覚悟を決めた戦士の顔。

(ほう……)

キョウがその顔を見て、笑った。

「下がれ、アンズ」

「うん」

キョウがバトルスペースに立つ。目を閉じて軽く顎を引き、直立するその姿はまさに時を待つ忍びそのもの。

レッドもまた、モンスターボールをその手にしながら目を閉じた。

嵐の前の静寂。突如訪れた張り詰めた空気に、ナツメとアンズも息を呑む。

「答えは変わらぬか、小童」

「一度。ポケモンの手を取り、心を通わせたならば、確かな光が心に宿る。俺はそう学びま

した。ポケモントレーナーならば、ポケモントレーナーとしてぶつからないと分からない事がある。伝えられない事がある」

レッドは目を開き、モンスターボールをキョウウに向ける。

「俺がポケモントレーナーの道を進み続けるのは、バトルを通して得られる確かな絆があるからだ。共に戦う仲間だけじゃない。戦ってきたライバル達にも、俺は心のつながりを感じている」

その言葉に、ナツメは驚く。

(レッド……!?! まさか、あなた、サカキにも……)

「フアフアフア！ まさかロケツト団と戦いあんな目にあっておきながら、その道を進み続ける意味を確信したというのか！」

「ええ。キョウウさん。あなたがサイクリングロードでやっていたことは、被害を迅速に食い止めるためには最善の手段でしょう。だけどやはり俺は、一人ひとりとポケモンバトルを通して、光ある道に気づく手助けがしたい」

レッドは微笑んだ。自分が進む道が今、また一つ扉を開けた。

「俺達は、ポケモントレーナーなのですから」

「ならば小童。そのポケモン達とともに、拙者の心を震わせられるか？」

レッドはモンスターボールを構えることで答えた。

「フアフアフアフア!! 始めるぞ小童! 行け! モルフオン!」

「行け! ピジヨット!」

『バトル開始イ!』

「モルフオン、どくどく!」

「ピジヨット、空をとぶ!」

モルフオンがジグザグに飛ばたきながら毒をまき散らす、ピジヨットは身にかかる毒に構うことなく突貫する。

そのままピジヨットの加速した体当たりが直撃し、モルフオンが地に落ちてバウンドする。

「影分身!」

「つばさでうっ!」

モルフオンはすぐに体勢を立て直すと、その体がぶれて残像のように姿が分身する。ピジヨットはその内の一つを翼で切ったがなんの感触もなく、切ったモルフオンの姿は空に消えた。

「つばさでうっ!」

「吸血!」

両者の戦法は一気に分かれた。影分身、そして毒と吸血で持久戦に持ち込むモルフオ

ン。タイプ相性を生かし一気に勝負を決めたいピジヨット。

観客席のナツメも冷静に戦況を見つめる。

(どくどくは普通の毒よりも消耗が早い……。だけど下手にピジヨットを変えれば、それこそ毒を用いた持久戦を得意とするキヨウの術中。ピジヨットの一撃なら後一回当たりさえすればモルフオンを仕留められる。当たればだけど……)

「モルフオン、影分身！」

「くっ！ つばさでうっ！」

ピジヨットの毒が回り始めるのと対照的に、モルフオンは冷静に吸血して体力を回復していく。

「ファファア！ どうした小童！ その程度では人の魂を震わすなど、夢のまた夢！」

「証明してみせるさ。俺とピジヨットならば、どんな逆境だって跳ね返すことができる

！ ピジヨット！ かげおこし！」

「無駄だ！」

ピジヨットのかげおこしはモルフオンの分身を一つ消すだけ。しかし、レッドは繰り返し返す。

「かげおこし」

「ふん！ やけになったか……いや、これは!?!」

ピジヨットはマツハ2で飛ぶ事ができる羽の持ち主、その翼が全力で風を起こせば、閉めきつたポケモンジム内に強烈な気流が巻き起こる。

(あれは、シルフカンパニーで見せた……！)

ナツメも気づいた。レッドとピジヨットは風の流れを利用できる。

「ぬ……モルフオン！」

モルフオンはピジヨットがおこした乱気流にバランスを保つのがやっと。そのせいで、モルフオンとモルフオンの分身達の動きが鈍り始める。

(ピジヨット！ タイミングはお前に任せる。お前ならば、この乱気流の中で全てのモルフオンが1列になる瞬間を貫ける！)

ピジヨットの眼が見開いたのを、レッドは見逃さなかった！

「ピジヨット、突進だあつ！」

「ピジヨオ!!」

ピジヨットが羽ばたき、急旋回してモルフオン達に突撃する。自らが作り出し、ピジヨットだけが入ることができる一瞬の風の道筋、そこには風に流されて身動きが取れないモルフオン達が直列していた。

一つ、二つ、三つとモルフオンの分身がピジヨットの突撃で消え、最後に残ったモルフオンがピジヨットのくちばしに弾き飛ばされる。

風の流れが止むと同時に、ピジヨットは足で降り立ち、モルフォンは背中から落ちで動かなくなった。

『モルフォン、戦闘不能!』

「よくやったなピジヨット。戻れ」

レッドは消耗したピジヨットを戻す。ピジヨットが再び戦うには毒を直さなければならぬ故、実質的には相打ちだった。

「まずはお見事! 行け! マタドガス!」

「行け! バタフリー!」

「マタドガス、えんまく!」

「バタフリー! サイケこうせん!」

放出されたえんまくはバトルスペースの半分を覆い、マタドガスはバタフリーから完全に見えなくなった。バタフリーのサイケこうせんは煙幕の中に消える。

(当たったのか!? 無闇に打ち続けるのも……)

「マタドガス! ヘドロこうげき!」

「フリー!」

「バタフリー!」

しかしえんまくの中からはバタフリー目掛けて正確にマタドガスのヘドロこうげき



が飛んでくる。

「くっ！ バタフリーあそこだ！ サイケこうせん！」

ヘドロこうげきが飛んできた場所へサイケこうせんを打ち込む。しかしマタドガスが悲鳴をあげないため、命中したのかどうかかわからない。

（さすがだ！ 勝つための戦術をポケモンに徹底させている。だがこれを打ち破ることができる戦術を、俺とバタフリーが編み出す。今ここで！）

「……よし、バタフリー！ しびれごな！」

「むう!？」

バタフリーが羽ばたき、煙幕に覆われたフィールド全体にしびれごなを巻いていく。

「だが、攻撃は当たらん！ ヘドロこうげき！」

バタフリーにヘドロこうげきが直撃する。しかしレッドはそれを待っていた。

「そこだ、バタフリー！」

バタフリーは煙幕内に突入した。そして、煙幕の中ガスが噴出している球体の影を見つける。

しびれごなで動きが鈍ったマタドガス、この距離ならば外さない。

「しとめたぞ！ サイケこうせん！」

「マタドガス、じばく！」

「なっ!?!」

煙幕が爆風によって吹き飛ばされ、後には力尽きたマタドガスとバタフリーが残る。

あのままならばバタフリーのサイケこうせんがマタドガスを仕留めていた。そう判断したキョウウの対応は早かった。

「非情だと思うか? 小童」

「勝つために次の仲間へと繋げる。あなたのマタドガスの反応は早かった。勝利への意思統一と自らの犠牲を厭わない気概がなければできないことだ。お見事です」

「……小童。いい戦いをしてきたようだな」

互いにポケモンを戻す。キョウウは笑っている自分に気づいた。

(年甲斐もない。こんな小童の言い分に熱くなり、あまつさえこのポケモンバトルを楽しいと感じている)

「小童。お主の目指す終着点はなんだ?」

「ありません。仲間達と遙かなる高みに行くのみ!」

(ポケモンリーグ優勝でもなく、ポケモンマスターでもなく、即答でそれか)

「ちちうえー! 頑張れー!!」

キョウウは観客席で叫ぶアンズを見た。

(アンズのポケモントレーナーとしての腕、申し分ない。拙者の後を充分に告げるだろ

う。その後拙者は、今までポケモントレーナーとして過ごしてきた全てを次代に伝えようと思っていたが……)

キョウウの心に、忘れかけていた火が再び灯る。

(高みか……)

「行くぞ小童！　これが最後のポケモン！　行け！　ベトベトン！」

「行け！　フシギバナ！」

フシギバナは毒タイプを持ち、ベトベトンは草に耐性がある。残る戦いの選択肢は真つ向勝負の肉弾戦。

「フシギバナ、突進！」

「ベトベトン、かたくなる！」

フシギバナの巨体を生かした突進。ベトベトンもその体を硬質化させて迎え撃つ。

「すてみタックル！」

「ものまね！」

フシギバナとベトベトンの額が真つ向からぶち当たり空気が振動する。もう、レッドとキョウウの命令は必要なかった。

「フシギバナ！　一歩も引くなー!!」

「ベトベトン！　そこだ！　行けえ！　ぶつとばせえ!!」

キョウが拳を振り乱し叱咤激励すると、ベトベトンが応えるように硬質化したヘドロで拳を作りフシギバナを殴る。

「ち、ちちうえ……?」

「あらあら……」

父親の変貌に戸惑うアンズと、顎に手を当てて微笑むナツメ。

「あんなちちうえ、初めて見る……」

「いいんじゃない? こういう暑苦しいのも、ポケモンバトルでしょ」

「バナあ!!」

「ベトオー!」

異種ガチンコファイトはお互いのずつきが炸裂し、終了のゴングが鳴った。

ふらつきながら立ち上がったのは……。

『ベトベトン戦闘不能! 勝者、挑戦者レッド!』

「見事小童。いや、マサラタウンのレッド!」

「こちらこそ。いい戦いができて、本当に嬉しかったです」

キョウとレッドが近づき、笑顔で握手する。しかしすぐにキョウは手を離し、レッドに背を向けて歩き出した。

「そら! ピンクバッジを受け取れ!」

「おっと」

キヨウはレッドを見ずにピンクバッジを放り投げる。バッジはレッドの手元へ寸分の狂いなく収まった。

「ち、ちちうえ。どこへ……」

「ナツメ、戻ってポケモン協会へ伝えろ。本日を持って、キヨウはジムリーダー代理として、娘アンズを指名する。キヨウは今任期を持って退任し、後任にはアンズを推薦するとな！」

「ちよ、ちよつと。いきなりどこへ行くつもり!？」

ナツメも慌ててキヨウに叫ぶ。しかしキヨウは気にせず自分の言いたいことをぶちまける。

「アンズよ。迷うことあれば今日（こんにち）のバトルを思い出せ。お前の実力は父が認める！」

「は、はい！」

「レッドよ。年甲斐もなく拙者を熱くさせてくれたな。拙者にとってジムリーダーは終着ではないと、錯覚してしまったではないか！」

キヨウは怒りながら笑っているようだった。

「フアファ！　まずは手始めにサイクリングロードのトレーナーに片っ端から挑んでく

るとするか。さらばだレッド！ 高みでな！」

「……はい！」

アンズとナツメはキョウの突然の変貌ぶりにキョトンとしていたが、レッドはその背中を遅しく思っていた。

（今、サイクリングロードの”トレーナー”って……。 ……高みか）

また一つ、約束が増えた。しかし、嬉しすぎかない。

「えつと、じゃあアンズ？ その、ジムのギミックの監修いいかしら。バリエードで見えない壁の点検するから、図面見せてもらっていいかしら？」

「え、あ、はい！ こちらです！ ええと、どこに置いてたつけちちうえ……」

どうやらアンズの初仕事は、やけに事務的なことから始まったようだ。

レッドはその様子を微笑んで見守りながら、ピンクバツジを胸元に取り付けた。

その後レッドはナツメに腕を引かれて共にサファリゾーンに入ったり、何故かポケモンの戦い方についてアンズに相談されたが、大した話ではない。

ナツメとアンズと別れ、レッドが次に向かうはふたご島、そしてその先のグレン島。

「えつと、ここからは海を超えるか。ギャラドスなら……ん？」

海岸でギャラドスを出そうとした矢先、海の向こうから波に乗ってサーフィンする少女が見えた。

「待っていたわよーレッド！ 波乗りの極意！ このカスミが教えてあげるわー!! いやっほー!!」

波から空に舞い上がりポーズを決める、スターミーをサーフボードにして乗っているカスミ。黒い水着が体のラインをくつきりと写し、太陽に照りつけられて鈍く光っている。

ほどなくレッドがいる海岸まで猛スピードで海上を滑ってくる。

「えへへー。また会ったわねレッド！」

「カスミ、なんでここに？」

「だから言ったでしょ！ ポケモンで海を超える波乗りの極意、この私が教えてあげるわ。不満かしら」

「それは、ありがたいよ。でも、ジムは？」

「今は休暇中よ、さ、レッドも水着に着替えて着替えて♪」

「え、水着持っていないけど……」

「なんですって!?! じゃあさっそく買いに行きましょう！ セキチクシティなら売ってるでしょー！」

今度はカスミがレッドの腕を引っ張って行く。レッドは苦笑いしながらも、旅で出会う様々な人たちとの交流を、胸に刻んでいた。

所変わってタمامシシティ。エリカの自宅。カイリユー便からレッドからの手紙が届く。

それをエリカは自室で綺麗に封を空け、愛おしそうに微笑みながらその書面に目を走らせる。

(まあ、キョウさんがジムを空けたのはそんなことがあったのですね。レッドも怪我がなくてなにより……ん?)

ナツメとカスミに関する記述でエリカの目がとまる。

(……ナツメさん、一緒にサファリゾーン行く意味ないですよ。それに、ジムを休んでまでカスミは……しかも水着って……)

「ふふ、ふふふ。ふふふふふふふ」

クサイハナが主の微笑みに、生まれて初めて恐怖した。



## グレンタウン

グレンタウン。そこはカントー地方南西の火山島、グレン島の唯一の街。

そびえ立つ火山を除けば、民家、グレンジム、ポケモン研究所、そして今では野生のポケモンが住み着いているポケモン研究所の廃墟、ポケモンやしきがあるのみの静かな街。

レッドはギャラドスで上陸したあとさっそくグレンジムへと向かったが、ジムの受付の男性からカツラの不在を聞かされた。

「ん、ジムの挑戦者かい？ すまないねえ。今休憩中で、カツラさんはポケモンやしきの方に行ってるよ。そうだ、休憩が終わるのももうすぐだし、カツラさん呼びに言ってもらえないかい？」

「ええ。構いませんけど……。ポケモンやしきと言うのは？」

「昔、ポケモン研究所だった場所さ。事故で爆発があったとかで今は廃墟になっていて、野生のポケモンが住み着いている。ほのおタイプのポケモンが出現するから、カツラさんもよくトレーニンングに行っているんだ」

（ポケモン研究所の廃墟か……）

その場所がかつては荘厳だった。豪邸と言ってもいい広さ、当時最先端の研究施設、そして新種のポケモンがいた場所。

今は壁は崩れ地面に穴はあき、朽ち果てた研究器具と資料が散乱し、当時を知る人も老いて人々の記憶からも風化しようとしている。

そんな場所に、定期的に来る人物がいる。光るつるりとした頭と丸縁のサングラス、そして鼻と口の間から伸びる白い立派な髭。

グレンジムリーダーカツラは、オレンジ色のたてがみをなびかせる大型の狒犬に似たポケモン、ウインディを伴って廃墟の奥に進んでいた。

（人の業、許される時は来るのだろうか、フジよ）

カツラは廃墟の一室に入ると、ひび割れた机の上に転がっていた写真立てを手に取る。

（おや、まだこんな写真があったのか）

ひび割れた写真立ての中の写真。若き日のカツラと、そして無二の友人フジ。肩を組んで朗らかに笑う二人、写真の中のシワの少ない顔とまだ豊かな頭部が、過ぎた年月の深きを残酷に物語っている。

カツラはグレン島にポケモン研究所ができる前から、この島に住んでいた。それは当時とても珍しく彼を変人扱いするものもいたが、カツラの生来の明るさとポケモント

レーナーとしての造詣の深さが、この島にやってきた研究員たちとカツラの関係を深くした。

その中でも特に気が合ったのが、親友フジ。フジはグレン島にやってきた研究員の中でも特に優れた科学者で、得意分野は遺伝子工学。ポケモンの出生、進化の秘密を題目とした研究においては随一の科学者だった。

フジの活気あふれる研究意欲に、カツラも協力した。純粹な欲求だった。ポケモンのことをもつと知りたい。ポケモンはなぜ生まれたのか、どこから来たのか、そしてどこへ行くのか。彼らにとって生活のパートナーを理解するための、あくまでポジティブな感情に満ちた探求だった。

そしてカツラとフジの二人は、南アメリカのギアナへポケモン研究の遠征に赴いた際に、世紀の発見に成功する。

普通のポケモンとは明らかに違う、はつきりとした形の手足と尻尾、そして流線型のフォルム。薄い桃色の光沢ある肌。羽を持たずに滑るように空を自在に飛ぶポケモン。紆余曲折の末そのポケモンの捕獲に成功した二人は、研究所でその生体を調べ、このポケモンが非情に特異な遺伝子の特徴を持つポケモンだということを解明した。

まるで全てのポケモンのコピー、まるで祖先。発見されていたあらゆるポケモンの遺伝子配列データを持つこのポケモンを、フジは自然界では到底ありえない個体として突

然変異体（ミュータント）、ミュウと名づけた。

カツラを含めたあらゆるグレン島の研究者がこのポケモンに熱中した。あらゆる技を覚え、しかも高水準でこなすことができる。火を吐き氷を作り植物を生み出すポケモンなど、夢を見ているようだった。

時が経つとある日、ミュウは子供を生んでいた。元々妊娠していたのかどころか、オスカメスカもわからなかった研究員達にとっては、意図せず大量の黄金を掘り当てた炭鉱夫よりも幸福だったに違いない。

ミュウの子。名付けられた名はミュウツー。

しかし、過ぎた幸運は諸刃であることを、彼らは身を持って思い知ることになる。

ある日ミュウの子の処遇を聞いたカツラは、フジに激昂した。

「あの子の遺伝子を操作する!? 正気かフジ!!」

「正気さカツラ。あのミュウの子だぞ。我々が今まで培ってきた遺伝子研究を活かす時が来たのだ! 俺たち皆の力を合わせれば、誰も見たことがない最高のポケモンを作り出すことができる!」

「馬鹿を言うな! ミュウツーは命あるポケモンだぞ!? その遺伝子を身勝手にわれらが操作するなど……!」

「カツラ。俺達は誓ったはずだ。ポケモンの全ての謎を解き明かす。この機会を逃して

どうする!? ポケモンの出産、次代への継承! 遺伝子の変遷! その全ての謎の答えの扉がミュウツーだ! カツラとてわかっているはずだ。ミュウは二度、三度として捕まえられるようなポケモンではない。我ら研究者がこの機を逃してどうする!? それとも、今更生命への冒涇だとも抜かすきか? お前だつてポケモンに使う薬の臨床試験がいかに行われているか、知らないはずがあるまい! それと違つても言う気か……!」

「……それは……!」

「とまるなカツラ。俺達はどこまでも進むんだ。ポケモンの謎を解き明かすために……!」

カツラは己に沸き起こつた道徳観念を胸の奥にしまい込み、無視した。

(……フジの、言うとおりかもしれない。我らの研究は、全てのポケモン研究者たちにとっての悲願だ。もしミュウの秘密が解き明かせれば、ポケモン研究は10年、いや100年進むと言つても過言ではない)

ミュウツーは日に日に成長していった。

「すごい……! ミユウツーのサイコキネシスはフリーデインの10倍の数値を記録しています!」

「ミュウ程多くの技は覚えられないけど、自己再生能力も耐久性も他のポケモンと段違

いだ。ミュウツーに勝てるポケモン等存在しない！」

フジを含めた研究者たちが口々に己らの功績を褒め称え合う。ミュウツーのあるゆるポテンシャルをテストし、実験が終わればすぐに冬眠状態に入るミュウツー。

カツラは、専用の貯水槽の中で眠るミュウツーの姿を見る。親のミュウとはかけ離れていた。

(……これでいいのだ。ポケモンの持つ可能性。その解明は確実に成果が出始めている。ポケモンの謎を解き明かす事ができれば、お前も自由になるだろう。それまで、付き合ってくれ)

しかし、ミュウツーの成長はある日を境に下り坂に入った。あらゆる能力の数値が下降していき、ミュウツーの姿も日に日にやせ細っていく。

しかし逆に、貯水槽にいるミュウツーへの実験は熾烈を極めた。

「なんだこの数値は、もっと投薬を増やせ！」

「やめろフジ！ これ以上投薬すればミュウツーが死んでしまうぞ！ あんなに苦しんでいるのにわからないのか!!」

「何を言っているカツラ！ 計器の数値はまだ十分に余裕がある！ かまわん！ 投薬を増やせ!!」

そうフジが言った時、貯水槽がバラバラに砕け散った。ミュウツーが雄叫びを上げな

がらあらゆるエスパー能力を発現させ、壁をずたずたに引き裂いていく。

「!? 鎮静剤を!! 早く!」

鎮静剤を打たれたミュウツーは、すぐに眠りについた。

それからミュウツーの力は飛躍的に上がった。しかし、制御が効かない。あらゆる実験器具と拘束具が破壊され、研究員にも負傷者が出る始末。

フジとカツラは研究者ではなく、いつの間にか暴れる囚人を押さえつける看守になっていた。

「……………どうすれば、どうすればいい! あんなポケモン制御できるわけがない! あれが世に出てしまえば、大変なことになる! 我らは……………怪物を創りだしてしまった……………」

「フジ……………」

そしてその日は、程なく訪れた。

「ミュウツーのサイコネシス! 止まりません!」

「鎮静剤の投与を増やせ!! ありったけの鎮静剤を……………!!」

「もうやってます!! ああ!」

何重にも付けられたミュウツーの拘束具にひびが広がっていく。極めつけは、研究所の壁に風穴を開けて侵入してきたミュウウだった。

ミュウがサイコネシスで、ミュウツターの拘束具を破壊していく。

「ミュウがなんでここに!! 別棟で隔離していたはずだ!!」

カツラは、ようやく悟った。

「……子供を、救いに来たのだろうか。俺達はここまでだフジ。全員研究所から避難しろ！ サイコネシスに巻き込まれるぞ！ ウインディ！」

カツラがウインディを出して、近くにいた研究者達を乗せていく。

「やめろカツラ！ 俺達は、俺達は……!!」

「見ろ、フジ。私達は、間違っていたのだ……」

嵐吹き荒れる中、ミュウとミュウツターが互いへ手を伸ばしていた。ミュウツターの瞳には、雫が溢れている。

「駆ける！ ウインディ！」

カツラ達が研究所から脱出したのと同時に、研究所から天へ光の筋がのび、瓦礫と化した研究所と共に天へのぼっていく。

光の中では、ミュウとミュウツターが笑顔で手を合わせている。

その光景を、フジとカツラは様々な感情とともに見上げていた。

フジは地面へと跪き、くぐもった声で涙を地面に落とす。

「カツラ……俺は……俺は…………!!」



「フジ……」

ミュウとミュウツウの研究は頓挫した。一部の研究員はグレン島でなおもポケモン研究を続けたが、カツラはポケモントレーナーとしての道を歩み、フジは何処かへと姿を消した。

「あの、すいません」

「!?」

カツラが写真を眺めていた時に、ドアを無くした入り口からひよつこりと顔を出す一人の少年。レッドだった。

「ジムリーダーのカツラさん……ですよね。あのジムの方に頼まれて迎いに来たんですけど……」

「おお、すまん！」

カツラは明るくひょうきんな声を出しながら、写真を机に置き直す。

「おや、君は……レッド君かな?」

「え!?!」

「他のジムリーダーの面々から噂は聞いておるよ! 随分と熱いポケモントレーナーがいるとな! いかにもわしが炎のジムリーダーカツラ! わざわざ迎えに来てもらってありがとう!」

「いえ。こちらこそ……あれ、その写真は？」

「ん……ああ……古い写真だよ」

レッドが部屋に入り、机の上の写真に近づいていく。遠目にだが、レッドはその写真の人物に見覚えがある気がした。

カツラは一瞬、その写真を胸にしまおうかと思ったがやめた。自分が犯した罪を、隠すような気がして。

「……これは、カツラさん？ す、すみません！」

「はっはっ！ 昔はふさふさだったんだがのう！」

カツラは気にした様子もなくからりと笑う。しかし、レッドはカツラと肩を組んで笑顔でいる隣の人物の方が気になった。

「あれ、これってまさか……フジ老人？ 似てるけど……」

「な!？」

幾年も出してなかったカツラの驚きの声。カツラはあんぐりと口を空けたあと、レッドへ思わず詰め寄る。

「レ、レッド君!？ フジを知っておるのかね!？」

「え！ ええ。シオンタウンでお世話になった方です。今はシオンタウンでポケモンの保護活動を行って……」

「……!!」

(あの、フジが……、……ポケモンの保護活動……)

「そうか……おっと、すまんな！ わしとしたことが取り乱してしまった」

「フジ老人とは、仲がよかつたんですね」

レッドが写真を見ながら言う。

「ああ。共にポケモンの研究に明け暮れていた仲じゃ。そうか、フジも元気にやつてるように何よりじゃ」

「この研究所ってことは……カツラさんも、ミュウの研究を？」

「!? レッド君！ どこでそれを!?!」

「え!? この地下に入っていたら、研究資料の一部が残ってて……」

「むむ……そうか、地下か……あそこは人が寄り付かんから、すっかり忘れておつたな！

うむ。それを見てしまったなら色々と気になるじやろう。ジム戦の前に少し昔話をしようか」

よっこいしよと、カツラは瓦礫の上へと座る。その瞳はサングラスに隠れてうかがい知れない。

「かつてフジと私は、共にポケモンの研究をここでしていた。まだオーキド博士が一大発表をする前、ポケモン図鑑のずの字もない時代だ。わしとフジはポケモンが大好きで

な。そりゃあもう没頭した！」

カツラの声は明るい。レッドも貴重な話を聞いている事を自覚して、テンションが高まる。

「研究を続けるある日、わしとフジとはある新種のポケモン、レッド君が見つけた資料にも書かれているミュウを発見した。とてもめずらしい特徴と、神秘的な魅力を持ったポケモンだった……」

カツラは一旦そこで言葉を止め、レッドへ問う。

「時にレッド君。君はポケモンと接するときが一番気をつけていることはなにかな？」

「気をつけていること……友達になりたいっていう、想いですね。こちらから心を開いて、相手を理解したい。そうだ」

レッドは気づいたようにモンスターボールを放り、ガラガラを出現させる。

「この子も、元々はフジ老人が保護していた子なんです。親をなくしたショックで塞ぎこんでいて、俺はこの子の力になりました。一緒に旅を続けてきた今では心を開いてくれて、大切な相棒になりました」

レッドがガラガラへ軽く拳を突き出すと、ガラガラも鳴き声を上げて拳を突き合わせて応じる。

(親をなくしたショック……)

カツラの脳裏に浮かぶ2つの映像。拘束具につつまれたポケモン、そして、親子の再会を見て地面に突っ伏した友人。

「そうか……フジが親をなくしたポケモンを……」

「ええ。フジ老人には、ポケモンと接する人として、大事な事を学びました」

レッドはガラガラを撫でながら笑顔で言う。

それ見たカツラの心に、今まで感じたことのない感情が沸き上がっている。

『今更生命への冒険だとしても抜かす気か？』

(……フジ………)

「カツラさん？」

「お!? はっはっ! いやすまん! まだまだぼける年齢ではないと思っていたがいや

はや……。話の続きだったな、ミュウのこと」

「はい!」

レッドが目をきらめかせながら頷く。

「ミュウは凄かった! なんとあらゆる技を覚えたのだ! 火をはき水を出し岩も草も

出現させる! おまけにメタモンのように変身だってできてしまう!」

「おお……!!」

「あらゆるポケモンの常識を覆したポケモンだった。しかし、強い力と押せばでる新た

な知識に……わし達研究員は大事な事を忘れてしまっていた」

「大事なこと……?」

「さて、レッド君、これはクイズとしておこう。わし達がミュウを研究する上で、忘れてしまっていたことはなにか……、解答はジム戦の後に聞こうかの!」

カツラがウインデイに跨がり、「先に行つておるぞー!」と叫びながらジムへと駆けていく。レッドも慌ててピジョットを出して脚に捕まり、カツラとウインデイを追いかけていった。

グレンジム。そこは炎タイプのエキスパートが集うクイズの館。

「しねしねこうせん……? えつと”いいえ”で」

レッドが恐る恐るドアの電子ロックに表示されたクイズに答える。

すると、ピンポンと小気味良い音がなった後、ジムの最奥にあるバトルスペースが姿を表した。

奥に待つは、炎のジムリーダー。

(さてと!)

カツラは大きく息を吸い込む。そして、

「うおおーす! 待つていたぞレッド君! 火傷治しの準備はいいかあ!! 熱い戦いにするぞー!」

カツラの気合のはった宣誓に、レッドも気を引き締め、そして笑顔で応えた。

「はい！ 全力で行きます！」

「炎を司るジムリーダー、カツラ！」

「マサラタウンのレッド！」

『バトル開始い！』

「行け！ ギャラドス！」

「行け！ ギャロップ！」

「バブルこうせん！」

「ほのおのうず！」

ギャラドスのバブルこうせんをギャロップがなんとかほのおのうずで防ごうとするが、やはりタイプ相性の差は大きかった。

「むむ！ これはまずい！ ギャロップ！」

「ヒヒーン!!」

炎が水をかぶれば蒸気が生まれる。ギャロップは自身の体から溢れる炎をバブルこうせんに放射して、蒸気が目眩ましを作った。

「しまった！」

レッドは失策を悟る。あたりが蒸気に覆われ一時でも姿を見失えば、ポケモンの中で

も随一の脚を持つギャロップを捉えるのは非情に困難。

「ギャロップ、ふみつけ！」

「ギャラ!?」

ギャロップは蒸気の中バブルこうせんを迂回して駆けて飛び上がり、ギャラドスの頭を正確に踏み抜く。

「ギャラドス、かみつく！」

ギャラドスがすぐさまギャロップに牙を剥くが、その時にはギャロップは蒸気の中へ消えている。

「今はがまんだ！ ギャラドス」

「もう一度だギャロップ！ ふみつけ！」

ギャラドスは長いからだを縮めて急所を覆い、ギャロップのふみつけに耐える。

（ふむ、蒸気が晴れるのを待っているのか。だが、そうはいかない。その前に勝負を決めさせてもらおう！）

「ギャロップ！ つのドリル！」

動かないギャラドスに対し、ギャロップは大技に入る。

（それを待っていたんだ！）

「ギャラドス！ がまんを解放しろ！」



「なに!？」

雄叫びを上げ尻尾をギャロップ目掛けて旋回させるギャラドス。がまんによつて蓄積されたパワーは、角を構えて突進体勢に入っていたギャロップを横殴りにして吹き飛ばした。

『ギャロップ! 戦闘不能!』

「これは一本取られた! 戻れギャロップ。行け! キュウコン! あやしいひかり!」

キュウコンが出始めと共に放ったあやしいひかりはギャラドスに命中し、ギャラドスは敵のいない場所を尻尾で意味なく叩き始める。

「混乱してしまった…!?!」

「ここは力押しだキュウコン! はかいこうせん!」

キュウコンの口から高圧縮されたエネルギー波に、さしものギャラドスも耐えられなかった。

『ギャラドス! 戦闘不能!』

「なんて威力だ…! でも決して俺達は怖気づいたりしない! 行け! ラッター!」

「ほう…! キュウコンは並大抵の攻撃では潰れないぞ! ラッターでどう戦う!?」

(キュウコンは技の反動で動きが鈍っている。仕留めるなら今!)

「ラッタにはラッタの戦い方がある。行け、いかりのまえばー！」  
「むお!」

ラッタがキュウコンの体のつぼを正確に攻撃する。痛みを感じずにはいれないつぼを強烈な前歯で挟み込み、どんなポケモンの体力も半減させてしまうラッタの特有技。

「くっ! かえんほうしゃ!」

「ラッタ! ひつさつまえばー!」

ラッタは火炎の中を猛進し、キュウコンの体を正確に攻撃して通過する。そして、  
「でんこうせっか!」

即座に反転して背中に一撃を加えた。

『キュウコン! 戦闘不能!』

「見事な連携だ! 一朝一夕のものではないな?」

「ラッタも大事な相棒ですから。よくやったなラッタ、戻れ。そして! 行け! ガラガラ!」

(相棒か……)

付き合い方が違えば、あの二匹ともそんな関係になれたのだろうか。

「……行くぞレッド君! わしの最後のポケモン! ウインディ!」

カツラの相棒ウインディ。その速力はギャロップに勝るとも劣らない。

「行くぞ！ 突進！」

「ホネこんぼう……はっはやい!？」

レッドもガラガラも、ウインディの速力に驚いた。即座に眼前に迫ったウインディの突進を、ガラガラはなんとかホネこんぼうでガードする。

「くっ 距離をとれ、ガラガラ！」

「甘い！ 大文字！」

距離を取ると今度はウインディの口から極大の炎が噴出する。当たれば体力が満タンドろうとひとたまりもない。

（とった！）

カツラは確信した。レッドは状況に反応しきれていない。しかし、

「あなをほる！……と、ナイスだガラガラ！」

「な、なんと！」

レッドの技の叫びより数コンマ早く、ガラガラはあなをほるを実行して大文字を避けた。

（決してレッド君が後付で叫んだのではない。レッド君とガラガラの考えがシンクロしていた！ まだほんの少年に、こんな事ができるのか……！）

「だがレッド君！ ウインディは鼻が利くぞ！」

ウインディはガラガラが出てきた瞬間に大文字の餌食とする気だ。

「それはどうか……！」

（ほう……！ いい顔をするではないか！）

ウインディがガラガラを仕留める確率はもう極めて高い。しかし、カツラは決して闘志の衰えないレッドの顔を見て、期待した。

そして、フィールドの一部の場所の土が盛り上がり、そこから影が飛び上がる！

「大文字!!」

大文字は飛び出した影を正確に捉えた！ が……。

「あれはホネこんぼう!? しまつ……！」

ウインディの顎が突如として上空に跳ね上がり、ウインディがひっくり返ると同時に素手のガラガラがフィールドに着地した。

『ウインディ、戦闘不能！ 勝者、挑戦者レッド!』

「やったぞ！ よくやったな！ ガラガラ！ おわっ!？」

ガラガラがレッドに向けて駆け出して飛びつき、レッドはそのまま押し倒される。しかしすぐに聞こえてくるレッドの笑い声。

「お見事だレッド君。ガラガラのあの動きも、偶然ではなさそうだな」

レッドがガラガラをあやししながら答えた。

「ほのおタイプの技を駆使してくる相手なら、やつぱり地面技は必要になるって考えてたんです。だけどあなをほるだと、潜った後に待ち伏せされやすいから、なんとか注意をひく方法ないかって、ガラガラと一緒に編み出したんです！ うまく行つて良かった……！ はははっ！」

ガラガラとレッドが共に掴んだ勝利で喜び合う。

人とポケモンが抱き合い、最高の信頼関係を築いている姿。

カツラはかつての自分たちを幻視する。

カツラ、フジ、ミュウ、ミュウツー。もし、自分たちが付き合い方を間違えなかったら……。

（抱き合い、笑い合うことも、できたのかな……。ポケモンと人との絆を、忘れさえしなければ……）

「おっと、ガラガラ!?!」

すると、ガラガラはレッドから離れ、カツラの元へてくてくと歩いて行く。

「むっどうしたのかね？」

ガラガラは手を差し出す。カツラは驚いた。ポケモンが、互いの健闘をたたえ合つて、手を差し伸ばすとは。

「あつ！ すいません！ ガラガラには相手に敬意を示すようにつて教えてたんですけ

ど、教えてた俺が先をこされちゃだめですね。勝負ありがとうございました」

「……ふふ、うむ！ 忘れなければ大丈夫さ。こちらこそ素晴らしい戦いをありがとう。レッド君、そして、ガラガラ」

カツラがガラガラの小さな手を取り握手する。

（このガラガラは元々、フジが……。人は、変われるんじゃないや。いやはや、わしも負けてられんな！）

「さあ、レッド君、これぞクリムゾンバッジじゃ。受け取ってくれ」

「はい！ ありがとうございます！ あつそうだカツラさん、その、すいません、クイズの答えなんですけど、実はどうしてもわからなくて……カツラさんやフジ老人が忘れていたことって……?」

「安心しなさい。レッド君は答えをちゃんと知ってるよ。ここにね」

カツラはレッドの心臓の位置を拳で軽く叩く。そして、レッドに喝采した。

「さあレッド君、残るジムは一つ、バッジ8つを集めたその先に待つ事はなにかな?」

「……セキエイ高原、ポケモンリーグです!」

「大正解！ もう目と鼻の先だ！ 行ってらっしゃい！ 炎のトレーナー!」

「はい!」

レッドはまた元気に旅立っていく。

「……さて、古い友人に会ってくるとするかな！」  
カツラもまた、晴れやかな想いを手にして。

## カントー地方

マサラタウン。そこは草原と吹き抜ける風、小川のせせらぎ、小型ポケモン達の可愛らしい声が響くのどかな場所。

(これが、俺の町)

レッドは久々に見る光景が妙に美しく見えた。見慣れたはずの景色。生まれいで育った大地。

グリーンと共に駆けまわった場所。

レッドは町に入り、近くに見える自宅とポケモン研究所を見、その間の道と広場を見た。

今よりも頭一つ小さかったレッドとグリーン、二人が走っていく姿を幻視する。

グリーンが少し先を走り、レッドは息を切らせながら必死に追いつがる。

憧れた。敗北した。何度も泣いた。何度もあきらめかけ、そしてふてくされた。

しかし、その背中を見失ったことはない。

レッドは自宅へと歩き、そのドアノブを取る。

母がいるだろう。色々と話したいことがある。旅で出会った人たち。時には美しき、



時にはたくましいポケモン達。

『そんなところにいると、風を引いてしまいますよ』

降りゆく雨は遮られ、照りつく日差しが肌を焼いた。

悲しみ、惑い、積み重なった想いの上に、教えられた喜びがある。

勇んで駆けて助けられ、帰ってこられた幸福を、自分の言葉でどこまで伝えられるだろうか。

旅の途上、途中経過を一心同体の仲間達と共に、母へ。

「……………ただいまー」

驚きと喜びの入り混じった声で、レッドは出迎えられた。

ニビシテイ。そこには固い意思を持ち合わせたジムリーダーがいる。

ニビジム内の岩に囲まれたバトルスペースの中で、今日もタケシの熱烈な教導が続く。

「そうだ!! ポケモンの行動の継ぎ目を見逃すな! 命令をこなしきつたらすぐに次の判断をくだせ! 矢継ぎ早に命令しても混乱させるだけだぞ!」

「は……………はい!」

タケシがイワークを操りながら、ジム所属の若きたんパンこぞうとイシツブテに声を飛ばす。

イシツブテがイワークのたいあたりの猛攻を耐える。イワークは息切れしたのか、動きが止まった。

「今だ！ イシツブテ！ がまんを開放しろ！」

イシツブテの渾身の拳がイワークのボディにヒビを入れる。

「良い攻撃だ！ だが俺もまだまだ負けなぞ！」

「はい!!」

「イワーク！ いわおとし！」

レッドとの戦い以来、ジム所属を希望するトレーナーが殺到し、タケシは忙しい毎日を送っている。しかしその日々の中に、かつてタケシが持っていた戦うことへの疑問はない。

（俺はポケモン達が好きだ。ポケモンバトルはポケモンと息を合わせ困難に立ち向かい、素晴らしい勝利を分かち合える舞台。レッド君、君は俺に気づかせてくれた）

タケシはカントー地方で誰よりも、岩タイプのポケモンと息を合わせられる。

（その素晴らしさを、俺は多くの人に伝えたい。強さを望むポケモントレーナーの手助けをしたい。その先にこそ、俺と俺の相棒達が望む強さがあると、今なら信じていることができる！）

「さあ、勝つぞ！ イワーク！」

「グオオオオオ!!」

どんな相手でも全力を尽くし、真の強さへの道を教導するタケシ。ニビジムは今日も、固い闘志の音が響き渡っている。

ハナダジム。ポケモン達が自在に泳げるバトルフィールドのプールに、カスミの怒号が飛ぶ。

「サクラ姉え!! 腰が引ける! お姉ちゃんのヒトデマンは臆病なんだから、お姉ちゃんの腰が引けてたら余計に逃げまわっちゃうでしょ!」

「そ、そう言われてもおお……」

カスミのタツツーが水鉄砲で猛攻をしかけ、カスミの姉のサクラが繰り出したヒトデマンがフィールドを逃げまわっている。

「私が帰ってきたからサボれるなんて思ったら大間違いよ! 私が家を飛び出す前はあんなにまじめだったくせに……!」

「だ、だって……」

ジムリーダー姉妹の次女アヤメと三女ボタンも戦々恐々で見守っている。

「だってもなにもない! サクラ姉が終わったらアヤメ姉とボタン姉だがんね! ほらサクラ姉、ヒトデマンをよく見て!」

「よ、よく見てって……もう私のヒトデマンに戦う意志は……」

「ち・が・う！ ヒトデマンは臆病だけど戦う意志を失ってなんかないわ！ 直接的な接触を避ける分、普通のヒトデマンよりも素早い動きができる。お姉ちゃんがそれを活かしてあげるの！」

「……………あ！ なるほどね……………今よヒトデマン！ スピードスター！」

ヒトデマンがその速力を生かし、避けながらスピードスターを放出しタツツの猛攻を止める。

「やった……………！」

「ふふ、やればできるじゃない！ ほら、ジムリーダーは私達四姉妹なんだから！」

カスミの顔が笑顔に変わる。カスミが飛び出す時にトレーナーとしての道を説き、レッドとの戦いも見守った三女のボタンがカスミを見て誇らしげに言う。

「ふふ、カスミもジムリーダーとしての貫禄がでてきたわね」

「ボタン、昨日カスミに6タテされてたわよね」

「い、言わないでよ……………アヤメ姉も一緒じゃない……………」

「……………うん。でもせめて、カスミの姉って胸張って言えるぐらいの実力は身につけたいわね」

「……………ええ！」

ハナダの4姉妹、それぞれの實力は違えど、4人の播らいていた目標が重なってきて

いる。

（レッド、あなたはきつと凄いと褒められることになる。でも私だって、すぐにあんたに見劣りしないトレーナーになってみせるから！）

「ひるまないでタツツー！ あなたのいじつぱりな所、見せてあげなさい！」  
「タツツウー！」

カスミの笑顔の激励にタツツーが応える。

ハナダジムの末妹が、女の子の魅力とトレーナーとしての素晴らしさを兼ね備えた少女として有名になるのは、そう時間がかからないだろう。

クチバシテイのマチス。クチバシテイジムリーダーにして、ポケモンだいすきクラブ会員。そして、定期的に行われる『ポケモンとの暮らし』無料セミナーのメイン講師。「マチスおじさん！ ピカチュウってどんな遊びをしてあげればいいのかな？」

ジムで行われるセミナーには老若男女問わない多くの人たちが、パートナーのポケモン達を出して情報交換をしている。

そんな中でピカチュウを従えた男の子が、ライチュウを従えたマチスに質問した。

「ピカチュウは電気を使った遊びがダイ好きネ！ 電気タイプのポケモン用の遊び道具があるから、ピカチュウが気に入るのを選んであげるネ！」

「わーありがとー！」

マチスがポーチから様々なグッズを取り出して、男の子に使い方を伝授していく。ピカチュウが気に入っているものが見つかったのか、男の子はマチスに礼を言つてピカチュウと駆けていった。

すると入れ替わりで、今度はサンドを連れられた老女がマチスに話しかけてきた。

「マチスさん、実は私の家に先日強盗が入つてね……」

「オーノー!? そんな!? ミー知らなかつたね! 怪我はなかつたノ!」

「ええ、私が襲われそうになつたところを、うちのサンドが飛び出して見事強盗を撃退してくれてね。マチスさんがセミナーでサンドを鍛えてくれたおかげだよ。本当にありがとう……!」

老女がマチスに深々と頭を下げる。

「オー!! 頭を上げて! ミーが少しでも役に立てたのなら、とってもハッピーネ!

サンドとお婆さんの間に強い絆があつたからこそネ!」

マチスがその外見に似合わず、やんややんやと笑顔でサンドを称える。

そんなマチスにまた、ポケモンだいすきクラブの会長が声をかけた。

「マチスさん……。いつもありがとう。皆大切なパートナーを守るだけでなく、さらに強い絆を繋ぐことができた。あなたの協力のおかげじゃ」

「オー! ミーもポケモンだいすきクラブに入れてもらつて嬉しかつたネ! ポケモン

の事いっぱい話せる仲間ができてハッピーネ！ でもそれは……」

マチスが、窓に切り取られた海の景色を見る。

「ミーと会長サン達を繋げてくれた、ボーイの事も忘れちゃいけないヨ」

「……ああ。もちろんじゃ」

マチスの脳裏に浮かぶ、マチスとレッドの戦い。大歓声の中、フシギソウの勝利とともに両の拳を天に突き上げたレッドの姿。

「ユ一ならきつと、ベストポケモントレーナーになれるね……」

マチスの眩きの相手が誰に向けられたものなのか、会長にもすぐわかった。

（レッド君、君がポケモントレーナーとして、海の向こうまで聞こえるような活躍ができるよう、わしも応援しているぞ）

会長の想い。マチスの期待。レッドの背を押す目に見えない力が届くのは、もうすぐだった。

「挑戦状？」

ナツメはやマブキジムの最奥にて、ジム所属のトレーナーの知らせに疑問の声を上げた。

「ええ、隣の格闘道場からです。トレーナー達で各自ポケモンを持ち寄り、ポケモンバトルの真剣勝負をしようと……」

「……はあ。またヤマブキジムの称号をかけてとでも言う気かしら？」

ナツメはため息を吐く。今日のヤマブキジムと隣の格闘道場はかつてヤマブキジムの座を争った（実際には格闘道場にジム認定の話は来てないが、妙に対抗意識を燃やした）間柄で、事あるごとにポケモンバトルを行っては、ナツメ達がエスパータイプのポケモンで追い返すのが常だった。

それもシルフカンパニーの件で一時的に協力関係を結び、事件が収まつてからは静かなものだったのだが……。

「はあ、わかったわ。適当に人を集めて。場所はまた向こうでしょ？ 今から行くから準備してと伝えて」

「はいー」

（もう、どうせ手紙を送ってくるならレッドがくれればいいのに。はあ……会いたいな……）

ナツメが再びため息を吐きながら、手持ちのポケモン達の状態をチェックする。

ほどなくトレーナーが集まり、皆隣の格闘道場へ移動した。ヤマブキジムで行わないのは、戦いで傷つくバトルスペースの補修費も馬鹿にならないからである。ジム戦でない限り、挑戦を突きつけた側が戦いの場所を用意していなければ、まず相手にしない。

ナツメ達が入ると、格闘道場の空手王5人が正座して待ち構えていた。



「ナツメ殿。挑戦を受けてくれたこと感謝する！」

「さつさと始めましょ。誰から行くの？」

「待ってくれ。我らが空手王五人衆、気合の音頭を入れるのを待って欲しい」

空手王達が一齐に立ち上がり、それぞれ空手の型を取りながら叫ぶ。

「せいっ！ 我ら空手王！ せいっ！ 恥辱に塗れた敗北と嘘を拭うため！ せいっ！

何者にも負けない強さを身につけるため！ せいっ！ 街を守り救ってくれた少年に心からの感謝と敬意を持って。せいっ！！」

「……！」

ナツメも驚く。空手王達が言う少年が誰のことがすぐにわかった。

「せいやあ!! 我ら全員、全身全霊を持って、この勝負に勝つ!! 以上！ 静聴、感謝す

る！」

「……ふふ。随分な気合ね、だけど」

ナツメとヤマブキジムのジムトレーナー達の瞳にも、戦意が灯った。あの日敗北し、そして一人の少年に心を奮い立たされ、再起を誓ったのはこちらも同じ。

「ヤマブキジムのエスパーパーケモン。気と心を兼ね備えた念力の妙技、見せてあげる」

ナツメが微笑み、モンスターボールを構える。

「行くぞ！ 格闘道場師範、空手大王のノブヒコ！」

「エスパーを司るヤマブキジムリーダー、ナツメ」

『バトル開始!!』

「行け！ エビワラー！」

「行きなさいフーデイン！」

ナツメは黒い長髪をなびかせながら、フーデインに手をかざす。

負ける気がしない。別に相手を侮っているわけではない。自分の魂に誓った想いがあるから。

(悪いけど、負ける訳にはいかないの。私がレッドともう一度戦う、その時まで！)

サイクリングロード。その一角で、バイクに跨がったパンクルックの男達が、皆愕然として頭を垂れていた。

「嘘だろ……俺達サイクリングロード暴走団が全滅……!?!、たった一人のトレーナーに……！」

相對していたのは、元セキチクジムリーダー、忍者の末裔キョウ。時代錯誤の忍者ルック。

「フアフアフア！ お主らポケモンバトルの筋は悪くない。成る程、戦ってみなければ分からない事も確かにある」

「くそっ……。嫌味はよせ！ 俺達にもう戦う力はない。ジュンサーに突き出すなり好

きにしやがれ！」

「フアフア。もちろんお主らが犯した罪についてはジュンサー達に任せるとする。だがその先の道については、一つ助言をしておこう」

「助言だと……？」

スキンヘッドの男がキョウに問う。

「ポケモンとの絆、貴様らが最初にポケモンと出会った時のことを思い出せ。またポケモンを持った時既に悪の道に染まっていたというのなら、今一度ポケモンと向き合い生き方を問うがいい。各地のジムリーダー達はどんなトレーナーが相手でも戸を開けているー！」

「ポケモンとの、絆……」

「フアフアフア！ それでも納得できないというのなら、このキョウがいつでも相手をしよう！ 拙者は忍びはするが逃げも隠れもしない！ ポケモントレーナーのキョウだ！」

そう言つてキョウは橋から飛び降り、ゴルバットに肩を掴まれて飛んでいった。

残されたサイクリングロード暴走団のメンバーが口々に隣の仲間に相談する。

「おい、どうするよ」「俺はいやだぜ、ジュンサーに今更捕まるなんて！」「だけど、このままじゃあまたキョウに……」

「俺は行くぜ」

スキンヘッドの男が一人バイクのエンジンを入れる。別の仲間が焦った声で話しかける

「おい！ おまえ本気か!？」

スキンヘッドの男は振り返らずに言った。

「ああ。俺は二度も負けちまった。俺と俺のオコリザルはこんなタマじやねえ。強くなるために、今まで腐っていた俺を、まずはマイナスからゼロに戻すためにな」

『俺はマサラタウンのレッド。ポケモントレーナーです。ポケモン勝負なら、いつでも受け付けます。……いい戦いでした』

『このキョウがいつでも相手をしよう！ 拙者は忍びはするが逃げも隠れもしない！』

ポケモントレーナーのキョウだ！』

「ポケモントレーナー……そう胸を張って、名乗れるようになるためによ」

スキンヘッドの男はその言葉を最後に、サイクリングロードを南へ疾走していった。サイクリングロード暴走団のメンバーも、様々な表情をしながらまた一人、また一人とバイクのエンジンを入れてその場を後にする。

しばらくして、サイクリングロードにガラの悪い男はちよくちよくいるものの、ワイヤーを使った事故はめつきりなくなつた。

さらに時がたったのち、償いを終えた男たちがこぞってセキチクジムに挑戦し、アンズが突如として訪れた強面の集団に四苦八苦するのだが、大した話ではない。ポケモントレーナーとして、よくある日常だった。

シオンタウン。その町中の公園で、ニドリーノとコダックを放つて町の子どもたちの遊び相手をさせている老人がいる。

「あまり遠くへいっちゃいかんよ」

「はーいー」

よく晴れた日だった。老人は公園でかけ回る子供とポケモン達を眺めながら、木陰に覆われたベンチへと腰掛ける。

ニドリーノとコダック。かつて飼い主に傷つけられ、そして捨てられたポケモン。今では笑顔を取り戻し、外に出て元気に遊べるまでに回復した。

かつて人によって母を殺されたカラカラも、今はきつと元気な日々を送っているだろう。

しかし、フジ老人には決して記憶から消えない暗黒がある。

(ミュウ……ミュウツーよ………)

ただ、知りたかった。最初は純粋な欲求だったはずが、ポケモンを傷つけていることにすら気づかなかった。

フジ老人はグレン島を去ってから、オーキド博士とタママシ大学に働きかけ、ポケモンに使う薬の臨床試験についてポケモンの安全性を重視した決まりを全国に徹底させ、その後は傷ついたポケモン達を保護するポケモンハウスを設立した。

それから四半世紀。

多くのポケモンの心を回復させ、そして新たな旅立ちを見送ってきた今でも、胸に残る罪は決して消えてはくれない。

(もう、会うこともないじゃろう。だが、もう一度会ってあやまりたい。わしの自己満足だとしても、わしが死ぬ前にもう一度……)

「隣、よろしいですかな」

「ええ、どうぞ」

フジ老人の隣に初老の男性が座る。フジ老人と違い腰はまだ曲がっていないようだった。髭がなくきりりとした眼、側頭部に残った髪 of 白髪が、まだまだ現役と暗に言っているようだった。

「よい笑顔をしたポケモンたちですな。あれはあなたなの？」

「ええ。あの子たちの笑顔に、わしも助けられていますよ」

「なるほど……。全く、いい年の取り方をしているじゃないか。連絡ぐらいよこさんか」

「え……？」

フジ老人の隣に座っていた男性が、丸縁のサングラスを掛け、白い立派な付け髭をし、側頭部に髪が生えていたカツラをとる。つるりとした頭が光っていた。

「カ……カツラ……!?!」

「まったく何年ぶりか忘れたぞ！ フジ！」

「カ……カツラ……。なんで……」

「グレンジムでガラガラを伴ったトレーナーに出会ってな。話を聞けば、そのガラガラは親を殺された所とある老人に保護されていたと言うではないか！ ポケモンを大切に思う老人がどんな人か、会いに来たくなってるな！」

「……カツラ……わしは……ただ……」

フジ老人は眼を手で覆い、声を震わせた。カツラは友人に語りかける。

「罪滅ぼしなんて言うまいぞ。お前は昔からポケモンが好きすぎるポケモン馬鹿ということは知っている！ それに、あの日の罪はあの場にいた全員が背負い込んだ物だ。一人ですべて背負うでない！」

「カツラ……」

「話したいことがたくさんあるぞ。時計の針は元に戻らんが、それでも前に進んだフジの話は是非聞きたい。もちろん、こちらのことも話したい。どうかな」

カツラは手を差し出した。その手は、どんな時でも共にポケモンの未知を求めた、親

友の手。

「ああ……そうか……。そうだな……。そうするとうしよつか……。い！」

フジ老人は涙を拭うのを忘れ、カツラと握手する。一人の少年がガラガラを救い、また一人の少年がガラガラを伴って旅立ち、そしてここに過去の絆を導いてくれた、今一度繋げてくれた。その全てに感謝しながら。

マサラタウンの草原はひたすらにのどかだった。天気は快晴、大型のポケモンがおらず、騒がしい動物の鳴き声もない。

レッドはかつてこの場所が好きだった。静かで安全で、グリーンに負けた悔しさを冷めさせるにはもってこいの場所。

今もこの場所が好きだ。理由は変わった。あの日、エリカと出会えた場所だから。

レッドはフシギバナを出して、その頬に手を当てて語りかける。

「覚えてるかフシギバナ。ここで、初めてお前にポケモンフードあげたな。あの時は俺がしゃがんでたのに、今じゃ俺がお前を見上げてる」

微笑みと共にフシギバナの頬を撫でると、フシギバナは気持ちよさそうに声を漏らした。

レッドは再び腰のモンスターボールを放っていく。現れたのはピジョット、ラッタ、バタフリー、ガラガラ。



「ギャラドスはごめんな。ここに小川があつたらよかつただけど……。皆、遊んでおいで」

レッドがそう言うと、ピジョットとラツタは嬉しそうな鳴き声を上げて久しぶりの故郷に飛び出していく。

バタフリーはフシギバナの花の蜜が気になるのか、レッドとフシギバナの近くをゆっくり旋回していく。

ガラガラは適当にホネこんぼうをいじったりブーメランにして遊んだあと、飽きてしまったのかフシギバナの体を背もたれにして座り込み、寝息をたててしまった。

レッドはそれを見て静かに笑ったあと、ガラガラの隣に座り、同じようにフシギバナを背もたれにする。

フシギバナの大きな葉っぱと花が日陰になって以外と涼しい。

今までカントー地方を全力で駆けて来た。ここまでのんびりするのは何時ぶりだろうか。

(少し、寝てしまおうか)

そう思った時にはレッドはもう瞼を閉じている。耳を澄ますと草が風で擦れる音、ガラガラとフシギバナの静かな呼吸。遠くでポツポツの羽ばたきと鳴き声が聞こえる。

夢を見た。淡い桃色と黄色が混ざった花畑の中、遠くに誰かの後ろ姿。ボブカットの

黒髪に和服姿の女性。名前を呼びたい。

花の香りがした。レッドはまどろみそのまま目を開ける。目の前に和傘を差した桃色の袴姿、その女性の微笑む口元までが見える。着物に散りばめられた白い牡丹の意匠がはつきりとわかる距離。

瞼を完全に開くと、一瞬の驚きと、ゆっくりと広がる喜び。

「こんなところで眠っている、風邪を引いてしまいますよ?」

どうしてこんなところに? とは聞かない。

「会いたかった、夢みたいだ」

レッドがエリカを見上げて微笑む。

「一緒に隣に座らない? エリカさん」

するとエリカは苦笑して、

「せっかくですけど、服が汚れてしまいます」

やんわりと断った。レッドも「しまった」と言いながら苦笑する。しかし、薄目を空けたフシギバナが助け舟を出す。

フシギバナの背中の茂みから無数の葉っぱが放出され、レッドの横に降り積もつていく。ほどなくちょうど二人分座れる広さの葉っぱのベンチが出来上がる。

レッドが立ち上がってそのベンチをぼんぼんと叩いて具合を確かめ、今度は無言で笑

みを浮かべながらエリカを手招きする。

「ふふ。では……」

エリカもつられて微笑んで了承した。傘をたたみ、レッドの手を取って二人並び座る。手を繋いだままレッドはエリカに顔を向けた。

互いの瞳の色がはつきりとわかる。レッドは言葉を紡ぎ出す。

「ちようどエリカさんに会いたかったんだ。来てくれて本当に嬉しい」

「ええ。私も……。なぜ来たかは、聞いてくれないんですか？」

「ええと、オーキド博士になにか？ でも、俺に会いに来てくれたなら、すごく嬉しいな」

二人の距離が、少しずつ縮まる。

「あなたに会いに、ここまで来ちゃいました。手紙の状況から、そろそろかなって」

レッドの頬がわかりやすく紅潮する。エリカはそんなレッドの反応を楽しんでるようだった。

しばらく雑談した。ポケモンのこと、手紙に書けなかった旅の細やかな事。タマムシシティとジム、エリカの近況。

しばらくして言葉が止まった。レッドが、なにか言いたそうだった。エリカも敏感にそれを感じて、レッドが言葉を紡ぎだすのを待つ。

「……今まで色んな事があって、俺自身強くなれたかどうかは、正直分からない。でもあ

の時から、ちゃんと自分が進みたい道を進めてる。皆が助けてくれたから」

「……」

エリカは黙って聞いてくれている。レッド自身、言葉の整理がついていない。けど、エリカに伝えたい思いがあるのは確かだった。

（うまく、言えるだろうか）

「バッジを7つ手にして、あとひとつでポケモンリーグに行ける。なんでここまで来れたんだろうって考えると、どうもリーグ優勝が夢だからだとか、そういうことじゃ、ない気がする」

（俺が頑張れた理由……）

「目の前の一つ一つのことには、全力になれたから。フシギバナ達と一緒に一生懸命になれたから、今の自分がいる。仲間と一緒に一つの事に全力になる、その大切さと素晴らしさを、エリカさんが気づかせてくれたから……」

「……そこまで言ってもらえて、光栄の極みです。でも、レッドさん自身の頑張りが一番大きいですよ。だからここにいるポケモン達も皆、あなたが大好きなんです」

言葉を繋げて誤魔化す事で、エリカはレッドへ自身の好意を発した。エリカは土壇場ではつきりと言えなかった自分を少しだけ嫌悪する。

「それでも、ありがとう。エリカさんにあの日出会えて、本当によかった」

心よりの感謝からくるレッドの微笑みを、エリカは至近距離で受けた。  
(あつ……)

エリカの心が高鳴る。今まで生きてきた中で、ここまで心が繋がった思える人、一緒にいたいと思う人、手をつなぎ、言葉を交わし、微笑み合ってドキドキする異性なんて、レッド以外、いない。

「俺はあの日を忘れない。これからどんな生き方をしようとも、あの日の暖かい想いを胸に生きていきます。そしてその未来には、ずっと一緒にいたい人がいる」

エリカの頬にレッドの手が添えられる。エリカは一瞬戸惑ったが、その意味を悟ると体中に嬉しさがほとぼしり、薄く口を開けてレッドへ言葉を発しようとする。

「好きです。エリカさん」

エリカの返答を待たず、レッドの顔がエリカへ近づく。エリカは驚きと喜びの中、目を閉じてレッドに身を任せた。

レッドがエリカを抱き寄せ、エリカもまた、レッドの服を掴んで自身へ心持ちよせる。互いの唇の感触をゆっくりと確かなものにしながら、二人そよ風の中、幸福だけに酔いしれた。

## トキワシテイ

レッドとエリカ、二人手をつなぎながらレッドの家へと戻るとレッドの母親が二人を茶化す。

エリカは少しいたたまれない気分になりながらも、レッドが手を離さず嬉しげな表情を向けてくるがためにまんざらでもなくなり、結局レッドの自宅でご飯を共にした。

「あら、手紙よレッド」

と、食事を終えたところにレッドの母が一枚の手紙を手渡した。見ると宛先人不明、これといった装飾もない。

手紙にはこう書いてあった。

『あの時の決着をつけよう。トキワジムで待つ』

「……」

「レッドさん？」

レッドが手紙を見ながら固まっていると、エリカが不思議そうにレッドの顔を覗き込む。

レッドは顔を上げた。

「ねえエリカさん。トキワジムのジムリーダーってどんな人なの？」

「トキワジム、実は私も実態をよく知らないのです。ジムリーダーの会合でも欠席で、なおかつジムリーダー代理の人間が多い所。最近までムサシとコジロウというお二方が代理をされていたそうで、本当のジムリーダーを知っている人がはたしてどれだけいるか……」

「そう……。ちなみに、ジムのタイプは？」

「地面、ですね」

その言葉を聞いてレッドの中で一つの確信が生まれる。

(……なんで、納得してるんだろ)

レッド自身不思議な感覚だった。崩しきれなかった巨悪、その体现者がエリカ達と同じジムリーダーという肩書を背負って自分を待ち構えている。

「なにか、心配事でも？」

笑顔がなくし引き締まった顔をしたレッドを見かねて、エリカが至近距離でレッドの瞳を覗き込む。心底心配しているようだった。

「……大丈夫、ありがとう」

レッドはエリカを心配させまいと微笑みで返し、エリカの左の頬を手のひらで包む。

「無理をなさらないでくださいね……本当に……」

自身の頬に添えられたレッドの手の上に自分の手を重ねながら、柔らかな笑みを浮かべるエリカ。お互いに甘い雰囲気の流れ、見かねたレッドの母が一つ咳払いして二人をびくりとさせた。

数刻後にはレッドは母親に出立を告げ、エリカもマサラタウンの端まで見送りにきた。

「お気をつけて……と、なんだか見送ってばかりですね」

「幸運に思うよ。好きな人に笑顔で見送ってもらえるんだから」

レッドはこと好意を告げることに関して羞恥を知らないらしい。エリカもレッドが冗談やこちらの反応を面白がるために言っていないことがわかるから、余計に嬉しさやら恥ずかしさやらで顔を俯かせてしまう。

エリカの顔は赤い。口が嬉しさで妙に歪んでしまうのをなんとか耐える。

表情と気持ちを整えると、エリカはレッドに真摯な面持ちで声かけた。

「先に行つて待つていきますね。そう日を置かずあなたが来るつて、信じていますから」

「はい……。行つてきます」

レッドは帽子を脱いで一礼した。そして振り返らずにトキワシティへの歩みを進めていく。

二人想いが通じあつた仲だからこそ、今はこれでよかつた。エリカはレッドを信じて



いる。

レッドは自分が進む道を見失っていない。

カントージムバッジ最後の難関がこの先で待っている。

(グリーンと戦った場所)

かつてレッドとポッポが初めてグリーンに勝利したトキワシテイの外れ。レッドがカントー地方を一回りして来ても、快晴のこの景観は少しも変わってはいない。

マサラもそうだった。レッドは自分がエリカと出会った日から劇的に変わる事ができたと己を誇りに思っていたが、ふと変わっていない故郷の景色を見ると、また違った疑念が心の奥底から沸き上がってくる。

(そういえば、俺の中で変わっていないものってあるのかな)

仲間と助け合い、一つの事に一生懸命になることは素晴らしいことだ。しかし、レッドがそのことを知ったのはポケモンを手にしてからだ。なぜ自分はポケモンを手にする前から、グリーンに勝ちたいと頑張ったのだろうか。

強さとはなにか。今レッドが問われたら、一緒に旅をしてきたポケモン達と様々な熱い戦いを繰り広げたトレーナー達が頭に浮かぶ。じゃあ、フシギダネとエリカに出会う前のレッドだったら？

『よう！泣き虫レッド！』

レッドはふと振り返った。遠くにトキワシテイ、そしてトキワジムが見える。

「俺はこの旅ですつと、皆に助けられてきた。俺一人じゃ絶対に、ここまで辿りつけなかつただろう」

レッドはトキワジムへ向かう。トキワジムに電気は点いておらず、人の気配もなさそう。しかし構わずに向かう。

（グリーンもそうなのだろうか。そしてこの先に待つあの人は……）

レッドがトキワジムの扉を開ける。ジムでは恒例の挑戦者を迎える受付の元気な声は聞こえてこない。

ジム内は天窓が多く、日が差し込んで意外に明るい。

その陽射を見上げるように、一人の男がバトルスペースに佇んでいた。

レッドと男、お互いに無言。レッドはバトルスペースに歩き出すが、男、サカキはレッドを気にした様子もなく天窓を見上げている。

「ロケット団の由来はな」

サカキはレッドを見ずに、突如語りだす。顔は感情の起伏が見えず、声色も平坦だった。

”Raid On the City. Knock out Evil Tusks.”。町を襲いつくせ、撃ちのめせ、悪の牙たちよ。故に”ROCKET”。随分と

好き放題やらせてもらったよ」

「あんたはこれからも、ロケット団の活動を続けるのか？」

レッドの語気はそれほど強くなかった。今のサカキの纏う闘気が、今まで戦ってきたジムリーダー達に似ている。

「……金も地位も名誉もいらぬ。自らのポケモントレーナーとしての力、カリスマ、知力、全てをもつて構築した、正義も法も縛ることができない悪の自由。君には理解できないだろうがね」

サカキは視線を落とし、レッドの対面に位置するバトルスペースへと歩いて行きながら言葉と続ける。

「矮小な正義などさえずる羽虫でしかない。ジムリーダーやジュンサーが束になろうが、自身のポケモンたちの力をもってすれば些細な問題にもなりはしない」

サカキはいついかなる時でもそう確信していたし、事実そうだった。タマムシ、ヤマブキで捕らえられたロケット団員も一兵卒の一部でしかない。

サカキがバトルスペースに着くと、今度は笑みを浮かべながら大きく口を開けて叫んだ。

「痛快だ！ 正義と夢を謳った扇動者が消えていく！ 力があればどんな悪意でもまかり通る！ 私の様な悪の親玉がジムリーダーに就いているように、君が思っているほど

世界は正道を歩んではない」

レッドは聞いてはいるだけ。しかし決してひるんではない。

サカキの脳裏に、シルフカンパニーでポケモンを庇ったレッド、そして強大なる闘気を纏ってサカキに対峙したレッドとそのポケモン達が浮かぶ。

「ポケモントレーナーレッドの正道は、私の邪道に真つ向から対峙している。……邪を突き進むものとして、君を真正面から叩き潰す。必ずな」

「その考えが既に正道に半歩足を踏み入れていることに、あなたは気づいているんじゃないか？」

レッドのその言葉にサカキは目を見開く。しかし、ふつと笑みを零すといつもの余裕たつぷりの貫禄を取り戻す。

「ならばそのまま引き込めるか？ ポケモントレーナー！」

レッドが初めて笑ってサカキに対峙した。悪の巨人、レッドにとって大切な人を傷つけた相手。しかし、この胸の高鳴りだけはどうしようもない。

ポケモントレーナーとしての高鳴りだけは。

「あなたの今の肩書を考えれば、その必要はない。トキワジムリーダー！」

互いにモンスターボールを構える。

「大地を司どるジムリーダー、サカキ」

「マサラタウンのレッド！」

バトル開始。

「行け!! ギャラドス!!」

「行け、ダグトリオ！」

レッドの闘志にのつたギャラドスの咆哮。対してサカキの貫禄を引くダグトリオ。

「ギャラドス! バブルこうせん！」

「ダグトリオ、あなをほる」

当たれば一撃。しかしダグトリオはすぐさま地中に潜ってバブルこうせんをかわす。

(穴から出てきた所を狙えば……!)

ダグトリオが地中から顔を出す瞬間を狙うため、ギャラドスは口内に泡をためながら尻尾を丸める。レッドから来る指示、バブルこうせんとたたきつけるどちらでもすぐに反応できるような攻撃の体勢を整えている。

「ポケモンがトレーナーが繰り出す指示を予測しているとは。それは見事。だが、足りない！」

サカキが手を掲げる。

「じしん！」

「うわ!？」

ダグトリオが起こした地震にジムが揺れる。レッドは少し体勢をくずしたが、元々少し空中に浮いているギャラドスには効果が無い。

(サカキは何をする気だ……あ!?)

レッドは気づいた。ダグトリオが起こした地震によってバトルスペースの地面が割れ、所々大きく隆起している。体の小さいダグトリオは地面に現れても容易に姿を隠すことができるだろう。

「今だダグトリオ、すなかけ!」

「!？」

地面が隆起してフィールドの岩と化した場所、その物陰からギャラドスの目に砂が飛ぶ。

「くっ! バブルこうせん!」

目に砂が入ったギャラドスのバブルこうせんは明後日の方向に飛んで行く。

「無駄だ。ダグトリオ、切り裂く!」

ダグトリオがギャラドスに突貫する。レッドは気づく。

(あのダグトリオがギャラドスに攻撃するためには肉迫するしかない! ならば!)

「ギャラあ!?!」

ダグトリオの不可視の爪がギャラドスを切り裂く。しかし、ギャラドスはレッドの指

示にすぐさま反応した。

「ギャラドス、ハイドロポンプ！」

「かわせダグトリオ！」

狙いの甘い攻撃はまたも外れる、かに思われた。ギャラドスはハイドロポンプを、ダグトリオが潜った穴に直接注ぎ込む。

「む?！」

サカキの顔が歪む。いくらダグトリオが早くても、移動できるのは地中のみ。張り巡らされた穴に高出力のハイドロポンプが注がれば……。

「ダ……グ……」

水浸しのダグトリオが地表から力なく顔を出し、動かなくなった。

「よし! よくやったギャラドス！」

「もどれダグトリオ。行け、ペルシアン！」

次に現れたのは地面タイプではない、高い敏捷性と鋭き爪を持つノーマルタイプのペルシアン。

レッドがペルシアンの出始めを狙うようギャラドスに指示するが、狙いの甘いバブルこうせんをペルシアンは悠々とかわした。

「ペルシアン、かげぶんしん」

ペルシアンの姿が分身し、地面から突き出た岩から岩へ飛び移りながらギャラドスに迫る。

「ギャラドス、たたきつける！」

ギャラドスがペルシアン達を一斉に尻尾で薙ぎ払おうとするが、ペルシアン達はすぐさま飛び上がりギャラドスの体をその爪で散々に切り裂いた。

「ギャラあ……」

ギャラドスの巨体が沈む。ペルシアンの攻撃は素早く、また的確に相手の急所を突いた。

「戻れギャラドス。行け、ラッタ！」

繰り出されたラッタは一回り大きいペルシアンに怯まずに真正面から近づいていく。

「ふっ慢心したか。今のペルシアンは一体ではないぞ！」

「慢心なんてしていないさ。かげぶんしんはあくまで回避用の実体のない分身」

「……!!」

サカキは驚く。ラッタは複数のペルシアンの中から本体のペルシアンへ迷いなく走っている。

「ギャラドスを攻撃した時についたギャラドスの泡が、爪に残っているぞ！ ラッタ、ひっさつまえば！」



「ちいつ！ ペルシアン切り裂く！」

ラッタの前歯とペルシアンの爪が真つ向からぶつかる。吹き飛んだのはラッタ、しかしペルシアンの爪が割れ、ラッタの前歯は傷ひとつついていない。

(真つ向からの衝突はペルシアンが不利、ならば！)

「ペルシアン、いやなおと」

ペルシアンが岩を割れていない爪で引つかき、名状しがたい音をかき鳴らす。ラッタは構わず突貫した。

「ひっさつまえば！」

ペルシアンの喉元にクリーンヒットし、ペルシアンはうめき声を上げて倒れる。

しかし、サカキはペルシアンを戻して笑う。

「前座は終わりだ。さあ行け、ニドクイン！」

(なぜ俺は戦っている)

「ニドクイン！ にどげり！」

「ラッタ！ いかりのまえば！」

サカキには今、二人の自分がいる。戦いに集中する戦士のサカキ、そしてこの戦いの意味を見出せない悪のサカキ。

レッドを邪魔と感ずるならばわざわざこんな一対一の戦いなど意味は無い。レッド

を消す方法等、ロケット団の力を持つてすればいくらでもある。

(この血が滾るから、そんな感じか?)

レッドのラッタを仕留めたニドクインを見ながらサカキは自嘲した。

「行け、バタフリー!」

(いや、そんな単純なことではないな)

サカキはレッドを見る。レッドは決してサカキを恐れてなどいない。勝利を信じ、闘気のもつた瞳でポケモンへ指示を飛ばしている。

サカキは思い出す。こんな風にサカキに立ち向かってきたトレーナーはいただろうか。サカキが戦ってきた相手といえば、サカキを悪と断じ、ただポケモンと共に正義の鉄槌をくらわそうとしてきた者ばかりだった。

その全てを地に伏せてきた。じゃあレッドは? 今まで戦ってきた者達と同じじゃない。レッドはただ、サカキに勝ちたいのだ。なぜレッドはサカキに勝ちたい?

「ニドクイン、かみなり」

「なっ!」

レッドが驚愕で目を見開く。ニドクインはバタフリーを見るやすぐに雷雲を呼び、バタフリーを光の柱で飲み込んで撃墜した。

「……戻れバタフリー。さすがだサカキ。あんたはポケモンとの呼吸も、ポケモンの強

さも、あんた自身の戦術も、俺の身が震えるほどの物を持っている」

そう言いながら、レッドは次のモンスターボールを手に取る。その瞳は燃えている。

「だが、決して俺は諦めたりはしない。あなたが巨悪の首領だからじゃない。俺のポケモン達と俺自身のために、俺はあんたに勝ちたい」

「ポケモンリーグに行くためか？」

レッドは首をふる。

「強くありたい。戦い続けてくれる皆と同じように。そのためにどこまでも進み続ける。それだけだ！ 行け！ ガラガラ！」

(そうか)

レッドはサカキに憧れている。一人で、何者をも寄せ付けない強さを持ったサカキを。

サカキはレッドに憧れている。他者に助けられ、弱い自分を認め強くあろうとするレッドを。

(私に燃っていた感情はそれか——)

ニドクインがサカキの指示を待っている。サカキは命令ではなく、ニドクインに語りかける。

「ふっ、文句ひとつ言わないお前たちは。だが、俺の強さへの信頼と受け取ろう」

ニドクインがサカキへ少しだけ振り返り、にやりと笑った。

『どこまでもついていきます。ボス』

「はは、はははははは！ 行くぞレッド。我が配下とともに、全力で叩き潰す！」

「望むところだ！ ガラガラ、ホネこんぼう！」

「ニドクイン！ とっしん！」

ガラガラのホネこんぼうとニドクインのシオルダータックルが激突し、大きな鈍い音と共に空気が振動する。

両者一步も引かない。間髪入れずサカキの指示が飛んだ。

「にどげり！」

ニドクインがガラガラ目掛け足を跳ね上げ、ガラガラはもろに喰らい上空へと飛ばされた。いや、違った。

（ニドクインの蹴り足に乗って自ら飛んだだと!?）

「振り下ろせ！ ホネこんぼう!!」

太陽を背にしたガラガラが空中で身を翻して回転し、その勢いのままニドクインへホネこんぼうを振り降ろす。

「カウンター！」

ガラガラのホネこんぼうがニドクインの顔を吹き飛ばすのと同時に、ニドクインの拳

がガラガラの腹部へ深くめり込んだ。

一瞬の静寂。ガラガラの腹部からニドクインの拳が抜け、そのままガラガラが地に沈むと同時に、ニドクインがゆっくりと倒れ伏した。

「よく当てた、ニドクイン。戻れ」

「ありがとうガラガラ。戻れ」

相棒を賞賛し、すぐに戦いへと思考を切り替える。

「行け！ ピジヨット！」

「行け！ ニドキング！」

（ニドキング！　ここで来たか！）

レッドは武者震いした。かつてフシギバナのソーラービームに真っ向から立ち向かい、倒しきれなかった相手。

（だが、それがなんだ）

「勝つぞ！ ピジヨット！」

「ピジヨオ！」

（一瞬で決める）

サカキのニドキングは技のデパート。じめんタイプを無効化できるひこうタイプへの対策は、ニドクインと同じく万全。

「ピジヨット、みがわり！」

「かみなり！ なに!？」

自分のHPを削り分身を作り出すことで、相手の攻撃を防ぐことができる技、みがわり。

ニドキングが呼んだかみなりはピジヨットの分身によって防がれる。

「まさか見抜かれるとはな！」

「ここでピジヨットが何もできずに討たれたら、バタフリーに会わず顔がない！ さあ

ピジヨット、決めるぞ！ みがわり！」

「かみなり！ くっ！」

今度のかみなりは高速で移動するピジヨットを捕らえられなかった。元々高威力と引き換えに命中に不安がある技、加えてピジヨットの飛行はポケモンの中でも随一の素早さ。

ニドキングに肉迫するピジヨットは分身により一度攻撃を耐えることができる。完全に優位に立った。

（みがわりが消えたらかみなりで終わりだ。ここは一撃できめる！）

「ピジヨット、ゴッドバード！」

ピジヨットが空中で静止し、羽を広げたその体が光輝き始める。

「かみなり！」

動きの止まったピジョットへかみなりが命中する。しかし、焦げ落ちたのはピジョットののみがわりのみ。

「ニドキング!! つのドリル！」

もうかみなりでは間に合わないかと悟ったサカキ、ニドキングの角を高速回転させてピジョットを迎え撃つ。

「行けえええええ!!！」

輝きを纏ったピジョットが羽ばたき、宙空に光の帯を引きながらニドキングへ突貫する。

ピジョットの光輝く体がニドキングのつのドリルに激突するが、勢いは止まらずニドキングの踏ん張る足を物ともせず押し出し、高速のままジムの壁に突っ込んだ。

壁に大きなヒビが入る。その中心にはニドキングが力なくうなだれており、輝きを終えたピジョットが羽を広げて雄叫びを上げた。

「……追い詰められたのだな。私は」

ニドキングをモンスターボールに戻し、サカキは最後の手持ちのポケモンを手に取り。

ピジョットはレッドの元へ羽ばたいて戻る。まだ戦えるようだ。

「よくやったなピジヨット、怪我はないか？」

「ピジョー！」

レッドの残りの手持ちはピジヨットとフシギバナ。

(不思議だ。ここまで来て、なぜ俺は負ける気がしない?)

サカキは笑った。ここまでできてサカキの中の勝利の確信が全く揺らがない。

根拠も理由もない。だからこそサカキは強者たり得ている。レッドはサカキのその様子を見て戦慄した。

「行くぞレッド。これが私の切り札、大地の二つ名を得るに至った我が半身だ。行けい！ サイドン!!」

サカキが繰り出したポケモン、サイドン。マグマの中でも生活できる頑強なる肉体、そしてどんな岩をも砕くパワーと角を持つ、岩と地面の怪獣。

サイドンはゆっくりと目を見開き、ピジヨットとレッドをにらみつける。そして大口を開け、

「グオオオオオオオオ!!」

その咆哮でジムを震わせた。

(地面タイプのポケモン。だが、当然ひこうタイプ対策をしているはず!)

「ピジヨット！ みがわり」



レッドにとっての万全策、しかし一度見せている戦術は対策される。その事を見逃したレッドの甘さを、サカキがつかないはずがなかった。

「サイドン！ みだれづき!!」

「なに!？」

ピジョットが分身を作り出す間に、サイドンがピジョットに肉迫して自慢の角を連続で突き出す。

連続で繰り出される攻撃は身代わりを消し飛ばし、自らのHPを削ったばかりのピジョットを貫いた。

「まずい！ そらをとぶー」

なんとか耐えたピジョットが天高く舞い上がりサイドンから距離を取る。

「いわなだれ」

サイドンが隆起している地面を腕で削り取って岩として持ち上げ、すぐさまピジョットへ投合した。

「避ける、ピジョット!」

上空へと舞い上がる岩の塊。しかしサカキが命じたのは岩の雪崩。サイドンはぐさま手の平で圧力を加えて硬質化させた石を投げ、岩の塊の中心を破碎した。

岩は空中で分解し、無数の岩の刃と化してピジョットを襲う。

「ピ……ピョ……」

ピジョットが力なく落下し、地面にたたきつけられる前にレッドはピジョットをモンスターボールへ戻した。

(……怖い、怖いな。あんなポケモンとトレーナー今まで見たことがない。だけど) 目をつぶる。脳裏に浮かぶは戦いの日々。今までもこれからも、レッドは一人じやない。

レッドは目を開く。

「行け、フシギバナ!」

フシギバナもレッドも、自分たちの勝利を微塵も疑ってない。

「くさタイプか。岩と地面タイプの複合であるサイドンに勝ち目は薄い。……多くの者はそう考えるだろう」

「俺はあんたを見くびりはしない。皆がここまで繋げてくれた勝負、絶対に勝つ!」

「ふはは。随分とかってくれているな。ならば私も宣言しよう。一人のポケモントレーナーとして君に勝つ! 我が半身と共に!!」

フシギバナとサイドンの瞳の中に炎が燃える。

「フシギバナ! はっぱカッター!」

「サイドン! すなかけ!」

「なに!？」

意外、サイドンははっぱカッターをその身に受けながら、正確にフシギバナの目に砂を飛ばした。

(いや、サカキからすれば当然の戦略。フシギバナの攻撃をかわしながら、狙うは必殺のつのドリル!)

「くっ。フシギバナ、つるのムチ!」

「サイドン、あなをほる!」

フシギバナのつるのムチは空を切り、サイドンは地面へと消える。

サイドンの狙いは明白、フシギバナの直下、または死角から地面に出て、つのドリルで仕留めにくる。

(落ち着け……フシギバナ)

「フシギバナ、つるのムチ」

フシギバナはレッドの意図を汲み取り、地面へとつるを差した。

(フシギバナは半獣半植物。地面へ植物体を挿せば、地面の振動を伝ってサイドンの位置を探知できる!)

フシギバナの花へ太陽の光が収束する。

サカキはフィールドをじっと見たまま動かない。

フシギバナの眼が開く。同時に、フシギバナの背後で地面が盛り上がった。フシギバナが即座に振り返り光輝く花卉を向ける。サイドンが角を高速回転させながら姿を現す。

そしてレッドとサカキが腕を振りかざし、勝利へと手を伸ばす。

「ソーラー………!! ビームウウウ!!」

「つのドリル!!」

フシギバナから発射される収束された太陽の光。目を使わずに相手を探知した攻撃は、寸分の狂いなくサイドンへ飛ぶ。

サイドンはつのドリルでソーラービームを真つ向から受け止めた。サイドンの体はびくともしない。

つのドリルによって拡散したソーラービームがフィールドをずたずたに引き裂いていく。

「行くぞ! 勝利をこの手に!!」

「なっ!!」

サカキの叫びとともに、サイドンが駆けた。つのドリルでソーラービームを受け止めながら、決して遅くない速度でフシギバナへ走る。

「ひるむなああ!! フシギバナああ!!」

レッドの叫びとともにフシギバナが歯を食いしばり、ソーラービームの光が2倍、3倍の太さとなってサイドンへ襲いかかる。

「まだだあ!!」

しかしサイドンの歩みは止まらない。それどころかいつの間にか掴んでいたのか、手で平で圧縮させた石をフシギバナの前足目掛けて投合する。

「バナ!」

フシギバナの体勢が崩れ、一瞬だがソーラービームの威力が弱まった。

「グオオオオオ!!」

サイドンはその気を逃さず、つのドリルでソーラービームを受けながら一気にフシギバナへ肉迫した。

「つるの、ムチイ!!」

今度はフシギバナがソーラービームを放出しながら、つるでサイドンの足と手を縛る。

「グ……オオオオオオオオ!!」

しかし、それでもサイドンは止まらない。速度を落としながらも、一歩ずつフシギバナへと迫る。

ソーラービームの発射口と、サイドンのつのドリルとの距離は一寸もない。

「はっば、カッターアアアアア!!」

フシギバナがソーラービームを放ちながら、つるのムチでサイドンの手足を縛りながら、背中の茂みから無数ののはっばカッターをサイドンに打ち込んでいく。

「サイドオオオオオオン!!」

サカキの雄叫び。サイドンはフシギバナの三つの技を打ち込まれながらも、まだ倒れない。

「フシギバナアアアアア!!」

レッドの叫びで、フシギバナが目を見開き、足を限界まで踏ん張って地面にヒビを作った。

そして同時につるのムチがさらに何本も伸びてサイドンを縛り上げ、はっばカッターの放出が何倍にも増えてかつ勢いを増し、ソーラービームの光線の太さがサイドンの体よりも大きい特大の光になる。

高速回転していたサイドンの角が、砕けた。

(ああ、俺達は)

サイドンが、光に飲まれる。

(こんな戦いが、したかったんだよな)

ソーラービームの光で両者の視界が遮られる。

光がやんだ時、サカキは天を見上げ、レッドは相棒を見た。

レッドが飛び上がって片腕を天に突き上げ、フシギバナへ駆け寄っていく。  
ポケモントレーナーレッド、カントージム、制覇。

## セキエイ高原

セキエイ高原はポケモンスタジアム内にあるトレーナー用ホテルロビー、待合用のソファで待っている、約束の時間10分前に彼は現れた。

チャンピオンロードを踏破したばかりだというのに、くたびれた様子も見せず快活に歩いてくる。元気な姿とあどけない顔立ちは歳相応だが対面のソファにすわりこちらを見る目は落ち着いていて余裕がある。

「すいません、取材を受けるなんて初めてなもので。ちよつと緊張しています」

そう言うてはにかんで笑う姿には、どこか少女のような魅力すら感じてしまう。しかし彼の胸に光る8つのバッジは、彼が今まで対戦してきた記録と映像を見る限り決して不釣り合いではない。

今回ポケモンリーグに挑むトレーナーの中で最年少の少年、マサラタウンのレッド。挑戦から勝負後まで勝ち負けの関係ない密着取材に、彼は快く応じてくれた。

「これで一戦目で負けたらかつこ悪いですね」

からりと笑うと場の雰囲気が一気に柔らかくなる。

かつては愛想が悪く人前で話すのも苦手だと聞いていたが、今の君からはとてもじゃ



ないが想像できないことだ。そう言うよ、

「出会ってきたポケモンと、トレーナーの方々ののおかげですよ」

彼は笑顔のまま腰のモンスターボールをなでた。彼の小さい手は今までなにを掴み、なにをこれから手繰り寄せようとしているのか。

——初めてのポケモンリーグ、緊張してる？

「そりゃあもう。7万人を収容する大スタジアムで行われるなんて、初めて聞いた時は冗談かと思った。過去のリーグもテレビで見えてきたけど、いつもバトルに夢中で……。トレーナーの方やスタジアムがどんな雰囲気かなんて、想像もできない。だけど、いざバトルになれば大丈夫だと思います。ポケモンの皆がいるから。」

初めてニビジムに挑戦しにいったときも、緊張して夜遅くまでトレーニングしてたんです。いざジムに入ったら観客の方がたくさんいて、凄いとこにきてしまったと緊張しきりでした。でも、バトルが始まったら関係なかった。いつも以上の力を出せし、逆にポケモンに引つ張ってもらった。それ以降は、他のジムでの戦いでも大丈夫でした」

——ポケモンと一緒にいると緊張がほぐれる？

「間違いないですね」

——ポケモンリーグを意識し始めたのはいつだった？

「……いっただろう。思い返してみれば、これといつたきつかけはなかったかもしれない。最初はとにかく勝ちたい相手が出て、次はジムを順々に巡っていいこうと思っていたのは間違いないけど、リーグを意識したのは……クチバジムあたりかな」

彼の旅はマサラタウンからスタートしている。彼が訪れたときトキワジムは休業中だったため、クチバジムはバツジ3つ目のジムになった。

——クチバジムは特別な戦いだった？

「ジム戦はいつでも特別ですね。だけど、うん、確かにあれは特別だった。ジムの観客席に町で知り合った年下の子達がいたんですけど、彼らにバトルが楽しいってことを知ってもらいたくて。バトルが終わった後に、その子たちと約束したんです、俺はカントーで一番になって有名になるから、君たちもポケモントレーナーになって名を挙げて、そしてその時また会おうって」

——チャンピオンを目指すのはその子たちとの約束のため？

「ええ。でも他にも理由は……そうだな……。……勝てそうもない相手でも、ポケモンたちと力を合わせればなんとか勝つことができた。それが本当に嬉しかったし、素晴らしい相手とのバトルは楽しくて仕方がない。だから自然とここに来たんだと思います」

——戦いのスタイルについて聞きます。君の登録メンバー編成にはどんな意図が？

「強いて言うなら、一番信頼できる。お互いの呼吸と考えがわかっているし、いつも一緒

にトレーニングしてきたメンバーを選びました。一応タイプ相性も考えてきたけど、皆付き合いが長い仲間達ですね。リーグが終わった後も、多分変わらない。ひこうタイプが多めなのは偶然ですけど、問題だとは思っていませんね。岩や電気があいてならガラガラで受けられるし、氷タイプは水との複合が多いからフシギバナでも五分に戦えるし、ギャラドスもそう。手持ちにないタイプについても、そこはポケモンたちの技である程度はカバーするようにしてます」

——実は君の過去の公式戦ビデオを集めた時、タママシジムとトキワジムだけは手に入らなかった。書面の記録は残っているが、どんな戦いだっただのか教えて欲しい。

「特段、変なことにはなかったですよ。他のジム戦と同様、すさまじいギリギリの戦いでした。タママシジムについては、俺のフシギソウとエリカさんのクサイハナとの一騎打ち。草タイプの扱い方についてはエリカさんの方が一枚も二枚も上手で、クサイハナは粉技ややどりぎ、メガドレインで優位に立ち、フシギソウは力押しするしかなかった。でも最後はソーラービームでなんとか……フシギソウ自身が頑張ってくれたことが大きいと思います。トキワジムについては、すいません。俺自身心のなかで整理がついてなくて。これについてはリーグが終わったら、話したいと思います」

——旅の中で、多くのポケモンとトレーナーに出会った。一番君を変えてくれたのは誰かな。

「タママシジムでジムリーダーをしているエリカさんです。マサラタウンで初めてであつた時にトレーナーとしての心得、フシギダネとの付き合い方を教わりました。彼女の凄いところは、ポケモンの持つポテンシャルを引き出すだけでなく、時に引き、時に激しく攻めるスイッチの切り替え方が抜群にうまい。あの日出会えたことは、本当に幸運でした」

———ありがとう。では最後に、リーグへの意気込みを聞かせてくれるかい。

「ありのままの自分と仲間達で、立ち向かいたいと思います。楽しんで、そして勝つてきます」

笑顔で去る少年の纏う雰囲気、悲壮感や作られた感情というものは一切感じられない。

自然体で正直な彼が、共に旅をしてきたポケモン達とどのような関係にあるか、わざわざここで書く必要もないだろう。

8つの胸のバッジが導いた扉の先で、彼はどんな戦いを見せてくれるのだろうか。

一つ言えることがある。彼はきつと、大舞台でほほ笑みを浮かべ、高らかに宣言するだろう。

「マサラタウンのポケモントレーナー、レッド！」

セキエイ高原ポケモンリーグスタジアム。

その一室、出場ポケモン用に設けられた最後のトレーニングスペースで、レッドは6体のポケモンを出して円を作るように佇んでいた。

メンバーはレッドの左からピジョット、ギャラドス、ラッタ、バタフリー、ガラガラ、そしてフシギバナ。

ここを出た先にはバトルスペースへ続く通路があるのみ。既に観客たちの歓声と高らかに興奮を煽る場内アナウンスが響いている。

レッドは直立不動のまま腕を組み目をつぶっていた。その心境は意外と静かだった。(勝てばリーグチャンピオン。だけど、この緊張感のなさはなんだろう)

レッドは目を開けてポケモン達を見渡した。皆緊張しているようには感じられず、気性の荒いギャラドスですらリラックスした顔つき。

(勝ちたい。その願望はある。皆一緒に想いだろう。それなら、俺が最後に皆に伝えるべきなのは……)

「皆。俺達がここにこれたのは、皆の一つ一つの頑張りがあったからだ。うれしい時も苦しい時も皆で分かち合い、その結果輝く素晴らしい舞台に立つことができた。俺は、皆を誇りに思う」

レッドは笑顔で皆の顔を見渡す。

「いつも通り全てを出しきるだけだ。今日は目一杯楽しんで、勝とう。皆で一緒に」

レッドはピジョットの頭を撫で、ギャラドスの頬を撫で、ラッタとバタフリーの頭を撫でる。そしてガラガラと拳を突き合わせ、フシギバナと額を合わせた。

また皆を見渡せるように距離を取り、帽子をかぶり直す。

「行こう、皆！」

ポケモン達が一様にレッドに頷く。以心伝心の仲間達をモンスターボールに収め、レッドはトレーニングスペースを後にする。

通路から見えるバトルスペースの光、聞こえてくる歓声。

レッドは一步一步踏みしめながら、その輝く入り口に足を踏み入れた。

『御覧ください！ 本日最後のリーグ挑戦者にして最年少トレーナー！ その名もマサラタウンのレッド!!』

『わああああああああああ!!!』

轟く歓声。煽るアナウンス。一面の紙吹雪と観客席からのフラッシュが彩るリーグスタジアム。

天井と観客席の間の超大型スクリーンには、画面を二分割してレッドと対戦するトレーナーの姿が映し出されている。

『そして初戦の相手はもちろんこの人、四天王が誇る凍てつく氷の女王！ カンナ！』  
レッドに相對する四天王のカンナ。女性的な魅力を存分に溢れさせていながらスラ

リとしているスタイル、襟を立てたノースリーブの黒地の服と紫色のタイトスカート。オレンジ色の長髪をポニーテールにまとめ、知的さを感じる黒ぶちメガネをかけている姿はまさに大人の女性。

『それでは今一度、ポケモンリーグのルールをおさらいしておきましょう！ ポケモンリーグは四天王と現チャンピオンとの5連戦！ その全てに勝利することで、晴れて新たなリーグチャンピオンが決定いたします！ しかし今日のカンナは絶好調！ ここまで全ての挑戦者をノックアウト！ 本日最後の挑戦者もその憂き目にあってしまうのでしょうか!?!』

「ポケモンリーグへようこそ！ 私は四天王の一人カンナ。今日の挑戦者は私の氷のポケモン達によつて皆氷漬け……。あなたも同じ目にあつてもらおうわ！」

カンナは見た目に似合わず中々勝ち気な女性のようにだ。実績と実力も見合っているから、挑戦者にとっては大きなプレッシャーになるだろう。

しかしレッドは瞳をそらさず、真つ直ぐに宣言した。

「俺とポケモン達の熱い魂は、どんな状況であろうと決して諦めたりはしない。力を合わせ、この戦い全力で勝利をつかむ！」

カンナはレッドの言葉にキョトンとした後、

「……あははッ！ じゃ覚悟はいいかしら！ 四天王の一人、氷のカンナ！」

一笑してモンスターボールを構えた。レッドも応じる。

「マサラタウンのポケモントレーナー、レッド！」

『バトル開始イ!!』

「行きなさい！ ジュゴン！ オーロラビーム！」

「行け！ フシギバナ！ はっぱカッター！」

レッドに去来する想い。感謝、友情、期待、勝利への渴望。

その全てが心の中で交じり合い、一つの道筋となつて新しい光を射している。

『ジュゴン戦闘不能!』

「くっ！ 行きなさいパルシエン！」

「まだやれるな、フシギバナ」

レッドの優しげな言葉に、フシギバナはこくりと頷く。

カンナは驚いた。先ほどまで強烈な戦意を持っていたレッドが、今優しさで包むような瞳と声でポケモンと接している。

そして、カンナとパルシエンを見据えるとすぐに戦士の顔に戻る。

(……マサラは特別なトレーナーを生むのかしら)

「だけど、簡単には負けないわ！ パルシエン、とげキャノン！」

「ねむりごな！」



フシギバナは巨体を得る事で防御力と体力が大幅に上昇した。そのポテンシャルをレッドは存分に活かす。

ジュゴンとパルシエンの攻撃を耐えたフシギバナはねむりごなどで相手を封じながら、メガドレインでとやどりぎのたねで回復する不沈艦と化す。

「はっばカッターー！」

『パルシエン、戦闘不能！　すごい、すごいでレッド！　フシギバナだけでカンナのポケモンを2体も突破したあ！』

レッドはフシギバナの消耗を見てラッタと交代する。カンナが繰り出したのはヤドラン。

ラッタはいかりのまえばからのひっさつまえば、ヤドランは防御力をあげながら水技で対抗する。

「きあいだめー！」

レッドはヤドランの殻にこもる動作を見極めてラッタを強化する。そしてラッタの狙いすましたひっさつまえばは、ヤドランの防御力の上げようのない脇の下を捕らえた。

次いでカンナが繰り出したルージュラは、レッドのギャラドスとの壮絶な肉弾戦の末相打ち。

「ここまで追い詰められるなんて……！　だけど、このポケモンで勝つわ！　行きなさいラプラス！　ふぶきー！」

レッドは再びのフシギバナ。ふぶきの一撃を受け、レッドは凶鑑でフシギバナのHPを確認する。すると、ギリギリを示す赤いラインで止まった。

「はっばカッター!!」

「ラ……ラ……」

ラプラスの首にはっばカッターが突き刺さり、頭たれて動かなくなる。

「……嘘……」

カンナの呟きをよそに、スタジアムは一際大きい歓声とアナウンスが響き渡った。

『なんとおおお!!　四天王カンナ敗れる！　勝ったのは挑戦者レッドだあ!』

しかしカンナはふっと表情を柔らかくし、レッドへ近づいてく。

「なんてことなの。一戦目でシャットアウトができなかったのは久しぶり。勝利の要因を聞かせてくれるかしら」

「フシギバナを信じてましたから。俺達が築き上げた友愛の力を持つてすれば、きつと耐えぬくことができる」と

「友愛ね……。ただ四天王の力はこのままのものではないわ。こんな言葉いらなしかもしれないけど、気張っていきなさい」

「はい！」

カンナが差し出した手に応じしつかりと握手する。カンナはそのまま翻つてスマー  
トに退場していくと、入れ替わりで今度は筋肉隆々の上半身を晒した格闘家のような男  
が姿をあらわす。

男はバトルスペースに立つと、マイク音声不要の大声を発した。

「俺の名はシバ！ 人とポケモン、友愛を持ってここまでたどり着いたポケモントレ  
ナーレッドよ！ 俺と俺のポケモン達は生半可な力では突破できない不動の肉體、そし  
て強烈な力を持ち合わせてる！ 見事打ち破つてみせよ！」

「言われずとも。例えどんな障害、高き壁であろうとも、俺達の歩みは決して止まりはし  
ない！」

レッドがポケモン達を回復させると、アナウンスがバトルスタートをコールする。

「ウー！ ハーッ！ 四天王の一人、鬪のシバ！」

『バトル開始！』

「行け！ イワーク！」

「行け！ ガラガラ！」

ガラガラのホネこんぼうは抜群だった。イワークの固い体を打ち砕くと、次いで現れ  
たエビワラーも正面から射ち合つて相打ちに持ち込む。

「見事……だがまだ終わらん！ 行け、サワムラー！」

「行くぞ！ バタフリー！」

「フリーイイ！」

バタフリーの気合は一入だった。ここで活躍しなければ、レッドに選ばれ続けておきながら今まで足を引っ張ってしまった——少なくともバタフリーはそう思っていた——自分が許せない。

「バタフリー、サイコキネシス!!」

「ぬう!？」

シバの呻きは仕方がなかった。バタフリーの鬼気迫ったサイコキネシスはサワムラーを一撃で沈め、岩技で倒そうとして繰り出したもう一体のイワークも為すすべなくサイコキネシスの前に沈む。

「まだだ、カイリキー!!」

シバの最後のポケモン、カイリキー。しかしレッドとバタフリーは確信を持って技を放つ。

「今のお前なら、誰にも負けはしない。バタフリー、サイコキネシス!!」

バタフリーに飛びかかろうとしていたカイリキーをサイコキネシスで地に落とす。カイリキーはそのとき頭を強く打って目を回し、ついに立ち上がれなかった。

『バトル終了!! またしても勝者は挑戦者、レッドオ!!』  
シバはレッドへ叫ぶ。

「どうしたことだ! ……俺が負けるとは! どうやってお前はその力を身につけた  
!」

「特別なことはなにもしていません。俺はバタフリーの力を最後まで信頼していたから、それだけですよ」

「信頼……負けちまったら俺の順番は終わりだ! くそッ! 次にいつてくれ!」

シバは背中を向けて吐き捨てるように言う。しかし最後にカメラが捕らえたシバの表情は、笑っていた。久方ぶりに感じた悔しさが意外に嬉しかったようだ。

シバが去ると、今度は四天王用の選手入場口から黒い霧が立ち込めてくる。

黒い霧はそのままバトルフィールドまで広がり、レッドの視界を奪う。静かな笑い声が聞こえてくると同時に霧は渦を巻いて拡散し、その中心に杖をついた老婆が現れた。「ククク……。あたしは四天王のキクコ。あんたがオーキドのジジイが託した二人目のトレーナーかい。なんだか垢抜けないねえ」

「それはどうも。オーキド博士とお知り合いなんですか?」

「オーキド? はっ! 昔は強くていい男だったんだがね! 今じゃただの研究者に成り下がった。まあ、後進にはいいものを残したようだがね」

キクコがモンスターボールを手に取りニヤリと笑う。

「ポケモンは戦わせてこそその存在さね。あんただってそう思うからこそ、ここに来たん  
だろう？」 退屈しない戦いにしようじゃないか」

「戦わせてこそその存在……それは、違うと思います」

「ほう？」

レッドは手にとったモンスターボールを見る。脳裏に浮かぶはポケモンだいすきク  
ラブでの笑顔あふれる空間、シオンタウンでポケモンを保護しているフジ老人。

「確かにポケモンバトルはポケモンと心を通わせることのできる競技。だけど、例えバ  
トルをせずともポケモンと強い絆を結んでいる人を俺は知っています」

「けっ。あんたもオーキドみたいな事を言う。ならあたしが改めて教えてあげるよ。ポ  
ケモンバトルの真髄をね！ 四天王の一人、霊のキクコ！」

『バトル開始!!』

「行きな……ゲンガー！」

「行け！ ガラガラ！」

激戦に湧くスタジアム。その映像を控室外の談話スペースで見ている人物がいる。

四天王最後の一人にして筆頭、ドラゴン使いのワタル。

精悍な顔つきで実に楽しそうにレッドの奮戦を見守っている。

「いいトレーナーだな。キクコにも勝つかもかもしれない。君は見なくていいのかい？ 知り合いなんだろう？」

ワタルは談話スペースのソファで寝そべっている人物へと声をかける。

今日はカンナが挑戦者を駆逐していたために、その人物は先程から待ちくたびれて雑誌をアイマスクに眠りこけている。

「あんたが負けたら起きるよ」

それだけ言つてまた寝息を立てはじめた。ワタルは苦笑してため息をつき、テレビへと視線を戻す。

（強すぎるのも問題だな。今のチャンピオンに肩を並べる事ができるトレーナー、そんな人物がいるならばここに挑戦に来る前に名を馳せているだろう。かつての大地のサカキのように……）

ワタルが抱いていた諦観は、今スタジアムで躍動するレッドを見て、期待へと変わりつつある。

（だが、マサラタウンのレッド。オーキド博士が託したもう一人のポケモントレーナー。彼ならばあるいは……）

ライバルのいない競技ほどつまらないものはない。そんな感情を抱いてしまった現チャンピオンを脅かす存在が、今の挑戦者かもしれない。

『なんて攻撃だあ！　　またもガラガラホネこんぼうがアーボックに炸裂う！　これで3枚抜きい！』

(まあ、負けてやる気はないがね)

そろそろポケモン達のウオームアップを始めなければならない。ワタルもまたテレビから目を離し、トレーニングスペースへと向かう。その顔は既に戦意に満ち満ちている。

「ゲンガー意地を見せな！　ナイトヘッド！」

「ガラガラ！　ホネブーメラン！」

ゲンガーが作り出した暗黒粒子とガラガラのホネブーメランが激突する。ナイトヘッドによって空間が歪み地面に亀裂が走るが、ホネブーメランはそれを突破してゲンガーの額を吹き飛ばした。

『ゲンガー戦闘不能！　勝者、挑戦者レッドオ！』

「はっ！　敗者が言うことはなにもないよ。次の戦いに備えるんだね！」

ゲンガーを戻したキクコは悔しげにバトルスペースを去っていく。

「キクコさん！　ありがとうございました！」

「……ふん、いやなガキンチョだよ。オーキドに似てね、まったく」

立つ鳥跡を濁さずと言っていいのか、キクコは堂々と入場口へ歩いて退場していく。



すると今度は入場口から翼を広げた影が飛び出す。飛び出したのはトレーナーを肩に掴んだプテラ。そのまま観客席の前を飛び回ると、より一層の歓声がスタジアムに響く。

『さあ現れたのはついにこの人、四天王筆頭！ ドラゴン使い！』

アナウンサーが一呼吸おくと、プテラとワタルがマントを広げながらバトルスペースへ降り立つ。

「俺は四天王の大将、ワタルだ。歓迎しよう、マサラタウンのレッド！」

ワタルとレッドの名乗り、そしてワタルのギャラドスとレッドのフシギバナの激突。

スタジアム全体のボルテージが上がり続ける中で、待合スペースのソファアで眠りかけていた人物の顔に被っていた雑誌がずれて地面に落ちた。

グリーンの眼は開いている。しかし近くのテレビから流れてくる映像を見ているわけでもく、また実況に耳を傾けているわけでもなかった。

グリーンは努力を知らない。というのも、努力に内包されている苦しみを知らないというべきか。

オーキド博士の孫という血筋、なにより兼ねてから物事をそつなくこなす事ができる自分の才能に自信を持っていたし、同郷のレッドと比較すればその思いはますます強くなっていた。

しかしその確信はポケモンとの出会いで脆くも崩れさる。トキワタウンでのレッドとの二戦目、ニビジムでのタケシとの初対決。二度の敗北でプライドが崩れ去り、現実を受け止めるにはある程度の時間を要した。グリーンもまたレッドと同年代の子供にすぎない。

グリーンの中で本当の才能があるとすれば、敗北の責任を他者に押し付けられないというただ一点に尽きるだろう。レッドに敗北したオニスズメ、タケシに敗北したヒトカゲ、いずれの時もグリーンは自分自身の不甲斐なきに憤怒し、そして奮起した。そんなグリーンにポケモン達が信頼を寄せるのも時間がかからない。

ただ時にグリーンの上心が苛烈過ぎて他人にとっては恐怖の対象になることもあったが、グリーンはその機微を感じ取れないし、また興味もない。

あるのはただ、勝ち続けたいという思いだけ。その果てがリーグチャンピオンという地位だったし、グリーン自身戴冠の時は一定の満足感も得られた。

しかし、満足感は一時的だった。遙かなる頂きには自分と自分のポケモン達しかない。リーグチャンピオンという枠組みの中で、グリーンの中にはライバルの存在がすっぽり抜けている。

かつてはレッドがいたその場所が――。

「ギャラドス、はかいこうせん！」

「フシギバナ、ソーラービームウ！」

ワタルのギャラドスの口腔、そしてレッドのフシギバナの花弁から発射される特大の光線。両者に向かって伸びる光線は中間で激突し、光溜まりを作ってフィールドを揺さぶる。

「はっばカッター!!」

ソーラービームを放つ花弁を囲む大葉、その大葉から無数のはっばカッターがギャラドスの顔へと向かい、ギャラドスの目元に命中する。

たまらずギャラドスは悲鳴を上げ、はかいこうせんの放出が止む。その瞬間ギャラドスはソーラービームに吹き飛ばされ、受け身も取れずにフィールドに倒れ伏した。

『ギャラドス、戦闘不能!』

「行け、ハクリュー!」

「戻れ、フシギバナ。行けギャラドス!」

(ドラゴンタイプに小手先の技は通用しない。ならば、圧倒的な力で勝るのみ!)  
レッドの対ドラゴンタイプ作戦は至ってシンプルだった。

「ギャラドス、れいとうビーム!」

「ぬう!?! ギャラドスにれいとうビームだと!?!」

ハクリューの体が氷で覆われ、ついに凍りづけになって動けなくなる。本来ワタルは

氷タイプあいてにはギャラドスで対抗している。レッドの手持ちを見て力押しできると判断したのが甘かった。

続くワタルのハクリュー、プテラもギャラドスのれいとうビームで凍りづけにされてしまう。

(カンナ、シバ、キクコをほとんど一方的に屠った相手、俺も及ばないか……)

「だが、ただでは終わらん！ 行け、カイリュー！」

降り立ったカイリュー、ひこうタイプとドラゴンタイプを合わせ持ったため、れいとうビームを喰らえばひとたまりもない。

だが四天王筆頭としての挟持、ただで終わる訳にはいかない。カイリューは幼少よりワタルに付き従った相棒。

「ギャラドス、れいとうビーム！」

「カイリュー！」

カイリューが歯を食いしばり、ギャラドスのれいとうビームに真つ向から耐える。羽や腕が氷付き、顔もだんだんと青ざめていくが、決して膝は屈さない。

『おおつと!! カイリュー耐えたあ！ 4倍の威力と化したれいとうビームを耐えると、なんて頑強さだあ!』

「カイリュー！ はかいこうせん!!」

「グオオオオ!!」

カイリユウの口から発したはいこうせんがギャラドスを飲み込む。獅子奮迅の活躍を見せたギャラドスも、れいとうビームを耐える程の気概を見せたカイリユウのはかいかうせんを耐えるには至らなかつた。

「よくやつたギャラドス、行けラッタ! でんこうせつか!」

ミリ単位で残つたカイリユウのHPを、ラッタが素早く刈り取つた。

「……見事だ!」

『勝者、挑戦者レッドオオオ!! チャンピオン挑戦権獲得うううう!!!』

その歓声と共に、グリーンは待合スペースのソファから立ち上がった。

決着とともに、ワタルはレッドの元へ歩いてくる。その顔は晴れやかだつた。

「おめでとうレッド君。君は四天王を寄せ付けない程の力を持つたトレーナーだ。こんなトレーナーが、短期間で二人も現れるとは思ひもしなかつたよ」

「こちらこそ、対戦ありがとうございました。……二人、ですね」

レッドの呟きに、ワタルも頷く。

「四天王を突破した先が、最後の決勝戦だ。ポケモンリーグデイフェンディングチャンピオンとの戦い。私が退場したら程なく始まるだろう。今のうちにポケモンを回復しておくといい」

「……はい」

(ディフェンディングチャンピオン)

レッドの人生、走り続けてきたその道筋、いつも一歩先を行く人物がいる。

(やつと追いついたな)

こうなることは、あるいはあの日ポケモンを受け取った時に決まっていたのかもしれない。

(いや、違うな。決まっていたんじゃない。ジムトレーナーやポケモン、エリカさんとの出会い、フシギダネとの出会い、そして、泣き虫だった俺自身。そのいずれかが欠けていても、この舞台に俺は辿りつけなかった)

ワタルが退場しスタジアムの全ての照明が落ちる。歓声が一際沸きチャンピオンを出迎える。

演出は一切ない。ただ入場口から歩き、散歩しているところに知り合いにあったような軽快さで、グリーンは笑顔で片腕を上げた。

「ようレッド！ お前も来たのかよ！ ははっ、やっぱりお前が来ないと、張り合いがねえよな！」

# チャンピオン

「……ああ。また先を越されたな、グリーン」

レッドは落ち着いている。レッドもまた、かつてグリーンと遊ぶときに待ち合わせていた時と同じような自然体で応える。

「ほう……ちよつと変わったか。まあ、それもそうだよな！　こんなところまで来るんだから、変わってなきやおかしい。まったく、待ちくたびれたぜ……あの時、トキワシテイで受けた借りを返すこの日をよ……!!」

グリーンのにやついた笑みと裏腹に、その瞳は豪炎で燃え盛っている。猛る感情のままレッドへ言葉を放つ。

「俺はここに辿り着くまで、ポケモンバトルにおける最高のパートナー、そして最高の戦術、最高の連携を探した！　幾重もの勝利の経験が俺とポケモン達との絆を深め、気づけばリーグチャンピオンなんて肩書をもらっている。それが今の俺だ！　だがな、それでも俺の頭の中から離れないものがある！」

グリーンが腰からモンスターボールを取って親指で弾いて上にかちあげ、上空から落ちる軌道を見ずに片手で受け止めると、そのままレッドへ突き出す。

「いつも俺の後ろをとくこと着いて来た誰かさんが、俺に土を付けた。それもまたポケモンバトルだ。この日をどれだけ待っていたか、お前に想像できるかレッド！」

レッドは声を荒らげずに微笑んだ。

「俺も同じ想いさ。負けて得る悔しき感情に慣れを覚え、また勝利を得る喜びを知ったその果てでグリーンが待っていたことには、俺もさほど不思議さを感じない」

「はっ！ 随分と言うようになったじゃねえか！ だがなレッド、まるで俺がお前のためのゴールテープのような言い様だが、お前が今立っているのは実力がものを言う世界だ。個人の感慨が深かろうが浅かろうが勝敗に左右することはない」

「わかっているさ。俺は俺のポケモン達と力を合わせた先、その光りある景色を見るためにここにきた。そのために、俺達には勝利がいる」

スタジアムの照明がレッドとグリーンを照らした。レッドはモンスターボールを顔の前に持ってきて、俯いてボールに額をつけた。レッドはモンスターボールを顔

「数えきれないほど助けられてきた旅の果て、もう自分の不甲斐なさに涙を流しはしない。この戦いで、俺は俺の持つ全ての力を出し切ってみせる」

「ははっ！ だったら教えてやるよ！ 例え努力し戦術を練ろうとも、決して超えられない壁があるということ。お前にとつての越えられない壁、それがこの俺だ！ 泣き虫レッド！」



グリーンの声とともに試合開始のブザーがなり、大型ビジョンにはレッドとグリーンの横顔が相對するように並べられ、その間に6―6のスコアが表示された。すぐに場面は試合会場のグリーンに移り、グリーンは慣れた様子でカメラに映えるようにポーズを上げて名乗りを上げる。

「リーグチャンピオン、グリーン！」

レッドは顔を引き締めてグリーンを直視した。

そしてレッドは高らかに名乗りを上げる。

「俺はもう泣き虫レッドじゃない。……………俺はマサラタウンのレッド、ポケモントレナーレッドだ！」

『試合開始イ!!』

「行け、ピジヨットオ！」

「行きな、オニドリル！」

カントー地方を代表する2羽の巨鳥は、研鑽を積み遅く成長した姿を誇示するようにスタジアムを旋回し、主の前で羽ばたきながら滞空した。

「借りを返させてもらうぜ」

グリーンの顔は笑っていたが、その声には屈辱を精算せんがための憤怒にも似た激情がこぼれていたことを、レッドは敏感に察した。現れた2体は進化して姿が変わってい

るが、レッドが初めてグリーンに勝利した戦いと同じ組み合わせだった。

その組み合わせを二人が事前に打ち合わせたわけでは当然ないが、意図していないとは言いい切れないところがある。今でも鮮明に思い出せる光景を、レッドは相棒と成長した姿として、グリーンは前述の激情がために、こうなることを期待していた。

観客席から多くのフラッシュが光り、観客たちも最初の両者の指示を聞き逃さんと一瞬静まり返る。レッドとグリーンの声が重なり、同じ指示を相棒へ飛ばした。

「フーを飛ばす！」

既に飛んでいるじゃないかという突っ込みはこの場ではギャグにもならない。空中ポケモン同士の激突、とくに物理攻撃を得意とする2羽にとつて相手よりも高所の位置取りは必須だった。高所を取れば標的の認識が容易く、また鳥足で相手を切り裂くこともできる。

ピジョットとオニドリルは風を切るように飛ばたき、腹を合わせるような形で並んで急上昇した。オニドリルの方が頭一つ早い。

「つばさでうっ！」

高所取りをあきらめたレッドが先制に出た。ピジョットが体の向きを変えながら翼を曲げなぎ払うように振ったが、オニドリルは感せず上昇したために尻尾を掠めるだけ。

オニドリルとピジョットの位置する高度が一気に広がると、オニドリルは急に体を捻って向きを入れ替え、体を引力に任せて急降下し羽を揺るように動かしてピジョットへ猛進した。

「ドリルくちばしー！」

「かぜおしー！」

ピジョットが羽ばたきながらオニドリルへ風を送り距離を取ろうとする。オニドリルは構わずに突っ込みそのくちばしでピジョットを捉えた。ピジョットの体が吹き飛ぶがすぐに体勢を立て直し、下降していったオニドリルを追いかける。

「ほうー！ よく耐えたじゃねえか！」

ギリギリだった。レッドはドリルくちばしを避けられないと踏み、せめてクリーンヒットにならぬようかぜおこしで軌道をそらすよう指示した。ピジョットもレッドの意図を察し体をよじつてくれたために、ダメージを最小限におさえ反撃に出ている。

通り過ぎたオニドリルが高度をあげようと逆放物線を描くように進路を取ったため、ピジョットは高所を取りながら距離を詰めることができる。

「オウム返しー！」

ピジョットのくちばしが眼下のオニドリルへと迫る。レッドの頬には冷たい汗が流れていた。ピジョットの体力を考えれば、もう相手のドリルくちばしを食らうわけにい

かない。

(これで決める！)

「読めてるぜレッド！」

グリーンの叫びとシンクロしてオニドリルの首が上がり、同時に翼を広げたまま空中で見えない管に沿うように螺旋の軌道で横転した。オニドリルの方向と速度が変わらぬまま位置が横移動し、降下してきたピジヨットのくちばしが空を切る。

再び上下が入れ替わり、オニドリルが落下体勢に入ってクチバシの照準をピジヨットへ合わせる。

対してピジヨットはそのまま着地し、オニドリルへ向き直り威嚇するように羽を広げた。

「行くぜえ、ドリルくちばし!!」

「身代わり！」

オニドリルの急降下攻撃がピジヨットが作り出した身代わりを貫く。身代わりは一瞬で蒸発したが、その瞬間グリーンとオニドリルの表情が凍りついた。クチバシがそのままの勢いで地面へ突き刺さっていて身動きがとれない。

「ゴッド……バードっ！」

「ちいつつばさでうっ！」

ピジヨットの光り輝く突進に対して、オニドリルが身を振ってなんとか翼を合わせ

る。オニドリルの体が吹き飛び、倒れ伏して動かなくなる。しかし側頭部を強かに打たれたピジヨットもまた、前のめりに崩れた。

『ピジヨット、オニドリル、戦闘不能！』

スクリーンの表示が5―5に変わる。

「いいガッツだったぜ。オニドリル」

「よくやった。ピジヨット」

両者先鋒を称え、次の腰の相棒へと手を伸ばす。

「とりあえず、追いついたぜレッド。次で差を見せつけてやる」

まるでグリーンが挑戦者のような言葉、事実グリーンは今チャンピオンという自分の地位を忘れて、歪んだ笑みを深くして片目を閉じた。

レッドにはその顔に見覚えがある。いつも勝負事をしてきた二人、グリーンの圧倒的な力が披露される前兆だった。

両者KOのため2体目は同時に出現させなければならない。レッドもグリーンも相手の手持ちの情報がないため、ここからは未知の戦闘になる。

レッドが選んだのはギャラドス。理由はある。ギャラドスは水と飛行の複合タイプ、

弱点となる岩タイプと電気タイプの攻撃は、ガラガラの後だしによって回避できる。

対してグリーンが繰り出したのは緑色の外骨格に両手を刃と化した密林の暗殺虫、ストライク。

(……だ！)

レッドの脳に駆け巡る閃光。絶好の奇襲チャンスだった。

「ギャラドス！ 10万ボルト！」

「なに!？」

ギャラドスから発した電光がストライクに直撃する。

観客席で「あれはミーがプレゼントしたわざマシンネ!!」とマチスが隣のポケモンだ  
いすきクラブ会長の首に太い腕を回して叫んでいる。

「ストライク、とっしん！」

しかしグリーンが一瞬で冷静さを取り戻し、かろうじて生き残ったストライクへ命令する。ストライクは羽をはためかせてギャラドスへ突進するとギャラドスの顔面を蹴り飛ばし、その反動でグリーンの元へ舞い戻ってグリーンのもンスターボールから発せられたリターンレーザーを浴びる。この技はバトル後にポケモン協会によってとんぼがえりと命名された。

「サンダース！」

ストライクと入れ替わりで現れたのはサンダース。グリーンの命令の前にサンダースの素早い電撃がギャラドスを掠めたが、なんとかレッドはギャラドスにリターンレーザーを当てた。

(サンダースが狙う交代後出始めの先制攻撃、ガラガラならばー！)

レッドの狙いはあたり、サンダースが放った電光が出始めのガラガラに直撃する。しかしガラガラは全く意に介さずホネこんぼうをサンダースへ投合した。

「ミサイルばりー！」

グリーンはガラガラの姿を見てあの時のカラカラだと一瞬で見抜き少し微笑んだが、すぐに厳しい顔へ戻す。

サンダースの毛が逆立って波打ちと、空気を切る鋭い音を立てながらホネブーメランへと飛んで行く。ホネブーメランは空中で華道剣山のようになって勢いをなくし、サンダースに届く前に墜落した。

「じしんー！」

ガラガラが両手を地面に突き刺して大地を脈動させる。揺れた地面がサンダースを真下から叩き上げ、サンダースの体が宙に舞った。

(あさいつ)

レッドは即座に悟り、ガラガラに追加攻撃させる。

「ホネこんぼうー！」

「にどげりー！」

ガラガラが地面に落ちているホネこんぼうを拾い上げて空中のサンダースへ振り下ろす。しかしサンダースは身を振ってかわすと後ろ足でにどげりし、ガラガラをのけぞらせた。

「ホネブーメランー！」

のけぞったまま腕力だけで投合されたホネブーメランは着地中のサンダースに直撃し、今度こそサンダースを沈ませた。しかしガラガラもにどげりが急所にあたってしまったのか膝をつく。

「ラプラスー！」

5対4。次いでグリーンが繰り出したラプラス。水技を予想したレッドがガラガラを戻す。

予想はあたり、ラプラスが相手の出始めを狙ったハイドロポンプはフシギバナの花弁を濡らすだけに終わった。

「へえ。いい見極めだなレッド！ れいとうビーム！」

「!? はっぱカッターー！」

はっぱカッターとれいとうビームが激突すると、すぐにはっぱカッターが凍りついて



粉碎されていく。しかしれいとうビームが届いた場所にフシギバナはいない。

フシギバナはすぐにフィールドを旋回するように走ってラプラスへ距離を詰める。図体は大きくなつたが決して進化前と比べて鈍重になつたわけではなく、むしろ強化された筋力によつてその速度は上がっている。

「しびれごなー！」

そしてエリカから学んだ草ポケモン特有の戦術。例え弱点が多くても五分以上に戦える術がレッドとフシギバナにはある。

「みがわりー！」

「れいとうっ……ちいっ！」

ラプラスがしびれて動けず、グリーンが舌を鳴らした。

「はっぱカッター!!」

「れいとうビーム!!」

れいとうビームがフシギバナのみがわりを破壊すると同時に、れいとうビームを避けるように曲線を描いたはっぱカッターがラプラスに直撃する。ラプラスの甲羅がない頭から首を正確に撃ちぬき、ラプラスが頭を垂れて動かなくなつた。

5 対 3。

「ストライクウウ!!」

グリーンが苛立った声を隠さずにストライクを繰り出す。観客は挑戦者の奮戦ぶりに熱気と期待を膨らませていく。

「レッドオ頑張れ!! 勝てるわよお!!」

観客でカスミのような声援を送るような人物は多くいた。カスミの隣で戦況を見つめるタケシもまた、レッドの有利な展開に対して頬がゆるむ。

しかしレッド、そしてグリーンの並外れた实力を知る者、観客席のフジ老人とナツメだけは反応が違った。

(彼の实力、これだけではなからう)

(気をつけて……レッドっ)

(なんだっ。何を狙っている!?)

レッドの心に浮かぶは焦燥と不安。グリーンの強さをよく知っているつもりでレッドからすれば、この戦いぶりにはグリーンの意図を感じてならない。

苛立った様子を隠そうともしないグリーン。レッドは演技にしか見えない。まるでレッドに勝利への期待を抱かせた上で叩き落とす算段があり、手持ちの数体の犠牲と観客達の新たなチャンピオンの誕生を願う雰囲気諸々全てをベールに、グリーン自身が狙う勝ち筋を包み隠しているように見えて仕方がない。

レッドが争ってきたグリーンとは、そういう人間なのだ。

「しびれごな！」

「きりさく！」

ストライクがフシギバナへ肉迫すると同時にフシギバナはしびれごなを散布する。ストライクの鎌はフシギバナの頬を掠めるにとどまり、レッドはすぐにフシギバナをラッタに交換した。

「ひっさつまえば！」

「きりさく！」

ラッタの前歯とストライクの鎌が激突する。しかししびれごなを受けたストライクは手数で押され、羽を使い距離をとろうとした所でラッタのでんこうせつかに吹き飛ばされた。

これで5対2。

「ゲンガー！」

グリーン之苦虫を潰した表情は変わらない。ゲンガーに対して攻撃する術がないラッタはゲンガーのサイコキネシスをなんとか耐えると、レッドの元へ舞い戻りバタフリーと交代する。

「バタフリー、サイコキネシス！」

ゲンガーとバタフリーのサイコキネシスの激突。紫色のねんりきがバチバチと音を

立てて空間を歪ませるが、毒タイプを持つゲンガーは時間が立つにつれ根負けした。

グリーンは倒れたゲンガーを戻す。レッドはバタフリーを傍らに、無言だった。

「……」

「……」

表示だけなら5対1。しかしレッドは自身が勝利間近だとも、グリーンが弱くなっているなどとも微塵も思っていないかった。

レッドの脳裏に強烈に焼き付いている光景、シルフカンパニーでロケット団員の数多のポケモンを薙ぎ払ったであろうグリーンの相棒。

その一体が出てきた時、一体どうしたら勝てるのか。レッドの頭の中で最適解が一切浮かばない。その焦りがレッドの額から頬へ一筋の冷や汗として流れ、グリーンの方の口端を吊り上げさせた。

「リザードン、シヨータムだ！」

グリーンがボールを放る。モンスターボールが開くと共に爆炎の竜巻が巻き起こり、竜巻の中心から一対（つい）の翼が爆炎を薙ぎ払うように回転し、現れた龍は大きく羽を広げると同時に顎を開き雄叫びを上げた。

その姿が現れた瞬間、ワタル等グリーンの実力を知る一部の者達が戦慄した。

控室で戦況を見守るワタルはグリーンが見せてきた実力を思い返す。

(グリーンンの5体までを突破することは俺もできた。しかし、リザードンは違う)

強き者はまた強き者の實力を知る。その例に漏れず、バタフリーとレッドはリザードンの並々ならぬパワーを見ただけで悟った。

控室にはワタル他、四天王達が揃っている。

「オーキドの孫の勝ちだね」

「どうして？」

キクコの呟きに、カンナが疑問の声を上げる。ワタルが解説した。

「グリーン君の手持ちは、言うなればリザードンの1トツプ型。リザードンを活かすための戦術であり、リザードンの苦手なタイプを他の5体で弱らせ、あとはリザードンが圧倒的な力で一掃する。相手は满身創痕になった状態で、チャンピオンの最大の切り札を相手にしなければならぬ。グリーン君の試合が交代合戦になるのはグリーン君自身がそう仕向けているんだ。戦いの中でレッド君の全ての手持ちを把握し、そして今回はギャラドスに狙いを定めた」

「リザードン」

グリーンが天へ片手を伸ばして名を呼ぶと同時に、リザードンの牙の隙間から炎が漏れる。

レッドの思考が駆け出す。

(交代は無意味。バタフリーに相手を倒すだけの決定打はない。ならばー)

「バタフリー、どくどく!!」

「かえんほうしゃ」

グリーンが伸ばした腕を目標物へ向けると同時に、リザードンが起こした大炎がバタフリーを飲み込んだ。

「……よくやったぞ、バタフリー」

レッドが倒れ伏したバタフリーへリターンレーザーを当てる。

バタフリーは恐怖しながらも、レッドの命令に忠実に従っていた。捨て駒にせざるを得なかった相棒に対してレッドは涙をこらえて、グリーンへ戦意を向ける。

「行け。ギャラドス!!」

ギャラドスがリザードンに対峙すると同時に、今大会最大の歓声が鳴り響いた。リザードンとギャラドスの一戦が最後の分岐点であることを、この戦いを見つめる全ての人間がわかっている。

「足掻けよ最後まで」

グリーンの言葉はそれだけだ。

ギャラドスはサンダースの一撃を耐えたのが奇跡だった。そしてギャラドスの目に宿る闘志は、まだ水技を繰り出す余力があることを示している。

「行くぞギヤラドス！ ハイドロポンプ！」

「大文字!!」

ハイドロポンプと大文字の激突。ここでもまたリザードンは規格外の強さを示した。

「ハイドロポンプが……蒸発している!?!」

ギヤラドスが放った水流は大文字によって相殺され、リザードンとギヤラドスの間に大量の水蒸気を発生させた。その霧を切り裂くように、リザードンがギヤラドスへ突撃する。

「切り裂くー！」

「かみつくー！」

ギヤラドスのかみつきを食らいながらもリザードンが構わずその爪でギヤラドスを襲う。ギヤラドスが倒れ伏すと同時にレッドの最後の望みが絶たれた。

（……まだだ!）

レッドの闘志は尽きていない。しかし、ため息に変わった会場の雰囲気はレッドは察していた。

「……行け、ガラガラー！」

（最後まで、足掻いてみせる。恥かしくない戦いをしてみせる！ 例え勝利できなくても……!!）

「ガラガラ、じしん！」

ガラガラは滞空するリザードンに目もくれずホネこんぼうを大地に突き刺して大地を脈動させる。

（レッドとガラガラの目、血迷ったわけではなさそうだ。なにをする気だ？）

グリーンはすぐに答えを得た。ガラガラが起こした地震によってバトルフィールドが所々ひび割れ、大きく柱上に隆起し即席の岩場と化す。

ガラガラはすぐに身を岩場に隠した。隙を伺い奇襲するつもりだろう。

「なるほど、確かに北風ならまどうところだ。だがリザードンは太陽にもなれる！ほのおのうず！」

リザードンが放った炎は岩場の間をぬうように進み、地上そのものの温度を急上昇させる。たまらずガラガラが灼熱の地上を避けようと岩を駆け上がった。

「大文字！」

ガラガラは岩場の上で勇敢にホネこんぼうを構えたが、グリーンは付き合わずに大文字で薙ぎ払った。

スクリーンに表示される2-1のスコア。

「戻れ……ガラガラ。行け、ラッター！」

会場の空気、グリーンの確認、レッドの尽きかけている心の炎。全てを理解していな



がらラッタはリザードンへ駆け出していく。  
「ラッタ、ひっさつまえば！」

レッドが声を飛ばす。ラッタは岩場を高速移動で飛び跳ねながらリザードンへと距離を詰める。その鬼気迫る猛進が生む一つの奇跡。リザードンがラッタを捉えきれず姿を見失った。

「後ろだリザードン!! かえんほうしゃ！」

初めてグリーンンの怒号が飛ぶ。ラッタは岩場を影にしながらリザードンへと飛び上がり、ひっさつまえばを食らわさんとリザードンへと肉迫する。

しかしリザードンの口から吐出される炎の方が早かった。ラッタの体を炎が包む。しかし、ラッタの勢いは止まらない。リザードンの炎がラッタの根性に火を付け、ひっさつまえばがリザードンの首に炸裂する。

「グオ……！」

リザードンが一瞬呻く。が、リザードンはそのまま着地して戦闘続行可能であることを会場に見せつける。対してラッタは技を放ったまま空中で気を失い、地面に激突する前にレッドがリターンレーザーを当てた。

レッドの頬に、一筋の涙が伝う。

（なんて根性だラッタ……。俺の命令以上のことをお前は……。ありがとう）

レッドはフシギバナが入っている最後のモンスターボールを掴む。

グリーンの圧倒的な力、ポケモンとの呼吸、トレーナーとしての強さ、やっぱりグリーンの方がつよい。

諦めたくない。だが、レッドは力の差を確信してしまっていた。

「行け、フシギバナ」

スコアに刻まれる1対1。

レッドはもう、勝ちを望んでいない。フシギバナを呼んで一度振り返らせて、目を合  
わせた。

（いい戦意だフシギバナ。わかった。最後まで付き合う）

「さあフシギバナ……フシギバナ？」

フシギバナはリザードンへ向き直ると、雄叫びを上げた。まるで勝利を諦めたレッド  
を奮い立たせるように。

いや、間違いなくそのための雄叫びだった。レッドはそう確信しながらも、体の中の  
炎が燃え上がらない。

（フシギバナ……。いいんだ。お前たちはよくやってくれた。かつて泣き虫だった俺に  
とって、身に不相応のたくさんの栄光と絆をもたらしてくれた。俺はもうこれ以上、な  
にもいらな）

本当に？

「……………え」

フシギバナがリザードンへ駆け出していく。その背中が、音のない言葉をレッドへ向ける。世界がレッドとフシギバナだけになったように、時がとまる。

『本当に、もうなにもいらぬのか』

(俺は……、俺がここまで来れたのは、皆がいたからだ。皆がいなければ、俺はなにも為すことができなかつた！ 俺自身の力なんて一体どれだけ役に立ったか……………！)

『馬鹿言うなよ。相棒！』

(……………!!)

レッドの心に扉が開く。後は、進むだけ。

「レッドさん!!」

「……………！」

歓声の中確かに聞こえた、聞き間違はずのない声。レッドの背中を押す、最後のピース。

全身にほとぼしる激情、相棒とともに今一度前へ。

(ああそうだな、フシギバナ)

レッドの表情の変化。それに気づいた多くのレッドを応援する人々。

「レッド、降参するなら待つてやるぜ！」

リザードンをフシギバナへ向かわせながらグリーンが叫ぶ。だがレッドは帽子のつばを指で弾いて跳ね上げ、言葉に闘志を込めて放った。

「俺は決して諦めない。俺の一つ一つのバッジに込められたポケモントレーナーの魂が、あきらめようとする俺の心の背中を押してくれている。俺と仲間達の心と体を炊きつけて大炎となり、唸りを上げている！」

そうだ。何故業火に包まれながらもバタフリーはどくどくを正確にリザードンに当てた。

何故ギヤラドスは傷ついた体を奮い立たせてハイドロポンプを放った。

何故ガラガラは相手を傷つけるでもないレッドの指示を疑わなかった。

何故ラツタはレッドが言葉にしなかった岩陰の奇襲戦法を行った。

ピジョット。グリーンに初勝利するに至った最大の功労者。此度ピジョットが見せた最後のガッツでオニドリルと相打ったのをもう忘れたか！

「そうだよな、フシギバナ。この心意気と記憶、体中についた傷とその再生が導いてくれた一筋の栄光への道。俺達は決して歩みを止めたりはしない！」

レッドの脳裏に点在する勝利への戦術点が雷光の如く線につながっていく。

（バタフリーがもたらした猛毒、ギヤラドス、ガラガラ、ラツタが削ってくれた体力。フ

シギバナの一撃ならば、きつと。いや、必ず!!)

「フシギバナ、みがわり!」

「リザードン、かえんほうしゃ!」

フシギバナの身代わりが一瞬で蒸発する。しかし何とかフシギバナは自身を覆う大ききがある岩まで走り身を隠した。

限界まで時間を稼ぎ一撃を狙う。フシギバナの最後まで勝利を狙う動きに、会場のポルテージが限界を突破する。

岩場でフシギバナが再び身代わりを作り出す。体力的に最後の身代わりだった。

「レッド、来いよ。全部ひっくるめて叩き潰してやる」

グリーンの声がレッドに届いた。レッドはフシギバナと視線を交わして頷く。そして、フシギバナが岩場から姿を表した。

(レッドのフシギバナの身代わり。あれはソーラービームを貯めるための身代わりだ。観客たちもお前も奇跡を望んでる。だがなレッド、どう計算したって削り切れないぜ。口惜しいが、ノーチャンスだ)

グリーンの思考と同じ答えを出したトレーナーは多くいた。ワタルやキクコはもうグリーンの勝利を確信しているし、観客席で見つめるカツラもまた、炎ポケモンのスペシャリストである自身の知識からリザードンが耐えることを確信していた。だがカツ

ラはその確信を覆す奇跡をレッドに願っている。

リザードンの牙から炎が漏れだし、フシギバナが背中を揺らした。お互いにもう、命令を待つだけ。

グリーンとレッドが叫ぶ。

「かえんほうしゃ!」

「はっぱカッター!」

『!?!』

レッドは血迷ったのか。グリーンを含め多くの人間がそう思った。身代わりがあるこの局面、なぜはっぱカッターを?

しかしレッドとフシギバナの瞳に一点の曇りなし。かえんほうしゃがフシギバナの身代わりを燃やし尽くすと同時に、炎を避ける曲線を描いたはっぱカッターがリザードンに直撃した。

リザードンは倒れない。フシギバナを守る壁はもうなにもない。

「終わりだ、レッド!」

レッド、フシギバナ、それ以外のすべての人々がグリーンの勝利する未来を見た。

いや、レッドとフシギバナともう一人だけ例外がいる。

彼女はレッド達を誰よりも理解している。だからこそわかる。

あの日マサラタウンでレッドに教授した、ポケモンと絆を育むための言葉が、今体現されようとしている。

マサラタウン、レッドが旅立つ前に行った最後のトレーニング。レッドのフシギダネとエリカのナゾノクサの戦い。

ナゾノクサの攻撃にフシギダネが弾き飛ばされる。不安の色を浮かべたレッドに、エリカが精一杯伝えた言葉。

「レッドさん。ポケモン達の頑張りを信じて。どんな苦境に立たされてもポケモン達の勝利を信じて信じ抜いて。そうすればいつだってあなたのポケモン達は」

ピジョットも、バタフリーも、ギャラドスも、ガラガラも、ラッタも、フシギバナも、いつだって。

「あなたが勝つって、信じていますから」

グリーンが大文字を叫ぶ。レッドは笑った。

(フシギバナ、ありがとう)

フシギバナの花の中心に光が収束する。今更ソーラービームなど遅い。ますますグリーンが勝利を確信する。

相性差を跳ね返すための一撃、レッドはいつだって学び、それを活かしてきた。

「……………はかいこうせん!!」

レッドの言葉とともに、フシギバナが放った光は大文字をかき消し、リザードンを飲み込む。

その光景を観戦しに来た7人のジムリーダー、ポケモンだいすきクラブ会長、フジ老人、海を超えた時差の中チェレンや寝ぼけ眼をこするベル等と共にテレビにかじりつくブラックとホワイト。そして草原の中ヒノアラシと共にラジオを聞いていた少年が、手に持っていた黄色と黒の帽子を落とす――。

「ポケモン、人によつて捕獲され、支配され、戦わされ、命じる主人は友情を謳う。言語を発せず感情も曖昧、絆など所詮人の思い込みでしかない。モンスターボールから開放されたポケモンがどれだけ主人の元に残ると思う？」

「従う相手との友愛を錯覚して、一つの生物の生き死にを握った自分の罪から目を背ける。そんな奴らが心底嫌いだった。悪として、一度手に入れたならば道具として接することに何故徹しない」

「種族を超えた友情を謳うならば何故モンスターボールなんてものがある？ なあレッド、人とポケモンが心を通わすことができるのなら……今の世の中は、どこか間違っているんじゃないか？」

今思い出す。純粹な疑問をレッドへ向けるサカキを。

「つまらん事を聞いたな。忘れてくれ」



ふっとサカキは表情を崩し、レッドを称える。サカキの澄み切った笑顔に、レッドは声が出なかった。

「こんなボスでは人心も離れよう。ロケット団は解散する。じゃあな」  
「……これから、どこに行くんだ？」

サカキはレッドへグリーンバッジを放り、背を向けて歩き出す。

「ポケモントレーナーとしての高みを目指し続けているならば、また会うかもな」

サカキがジム奥の暗黒に消えていく。

「レッド、お前にはポケモンとの真の絆がある。ポケモンと接してきた多くの人間達が目指したものに、お前はなれるだろう」

あの時、何も言えなかった。

(サカキ、俺が皆と一緒に見つけた答えを、今度会ったら伝えるよ)

1-0のスコアが表示される。グリーンが震える手でモンスターボールを掴み、倒れて動かないリザードンにリターンレーザーを当てる。

『新っチャンピオン!! レッドオオオオオ!!』

アナウンサーの絶叫とともに、スタジアム上部から黄金の紙吹雪が一斉に放出され、色とりどりの花火が断続的に空を彩る。

レッドはゆっくりと歩いてフィールドのフシギバナに向かう。

フシギバナがレッドへ顔を向ける。レッドのくしゃくしゃの顔に釣られるように、フシギバナの目に涙が浮かんだ。

マサラタウンで出会った二人。フシギダネはフシギバナに進化し、レッドもまた外見も内面も大きく成長した。

だが変わらないことがある。

二人の心を繋ぐ光はいつだって切れはしない。今までも、そしてこれからも。

「勝った……勝ったぞ……！ フシギバナ……お前と俺と……皆で！ やった……！」

やってやった……！ 俺たち皆で……やってやったぞ……!!! 勝ったぞ!! 勝ったぞ

!! うああああ!!!」

レッドがフシギバナと額を合わせ、喜びに泣き叫んだ。グリーンが見ている、観客が見ている、世界中継するカメラが見ているが、関係なしに泣き叫んだ。

そしてそれを否定するものも、冷やかすものもいやしない。

「おい、レッドー！」

「あ……」

グリーン呼びかけにレッドが気づく。グリーンは大型スクリーン下のスペース、円形に設けられた王座を指さしている。

「さつさとステージの中央に行ってこい。あそこが殿堂入りを登録する場所だ」

それだけ言うと、グリーンはレッドが入場してきた挑戦者用の入場口へ向かう。グリーンはレッドとすれ違いざま、「ガラガラ泣かすなよ。あと次は負けねえから」とだけ言い残した。レッドとグリーン、二人にとってそれだけで充分だった。

レッドはフシギバナを戻す。そして「レッド」とコールし続けるスタジアムの中、玉座へと続く階段を登る。

登り切った先のステージには、穏やかな笑みを浮かべたオーキド博士が待っていた。

「グリーンの初防衛戦があると聞いて飛んでくれば、もう勝負がついておったわい。だが来てよかったぞ。新たなチャンピオンの誕生を見ることができるとは。おめでどうレッド」

玉座の後ろにはレッドの腰の高さの立方体の機械があり、その上部には綺羅びやかに裝飾された6つのくぼみがある。

「さあチャンピオン。共に戦ったポケモン達を、ポケモンリーグの歴史に永遠に記録しようではないか！」

レッドが頷く。そして一つずつ、仲間達が入ったモンスターボールをくぼみに当てはめていく。

「ピジョット」

優美なる大鳥。

「ギャラドス」

勇気ある昇り龍。

「バタフリー」

不撓不屈の蝶。

「ガラガラ」

冷静なる戦士。

「ラッタ」

根性の疾風獣。

「フシギバナ」

全てを共にした相棒。

最高の仲間達がスクリーンに順々に姿を表わしていく。

そして最後に映し出されるレッドの姿。気づけばステージを囲むように多くの観客が席を離れて詰めかけてきている。

タケシが微笑みながらレッドへサムズアップする。マチスがだいすきクラブの会長と肩を組んで体を揺らしてなんか歌っている。

キョウはレッドと目を合わせると微笑み、そしてすぐに身を翻して姿を消す。隣にい

たアンズはレッドへ賛辞を叫ぶのに夢中でキョウが姿を消した事に気づいていない。

カツラとフジ老人が拍手しながらレッドに頷く。ナツメが拍手しながらときおり目尻の涙を拭う。

あの人は、カスミに伴われていた。いつもの優雅な和服姿、しかしカスミに急かされながらも顔をあげようとしない。

レッドが名を呼ぶと、体をびくりと震わせた後、ハンカチで目元を拭いながらゆっくりと顔を上げた。

「……おめでとう、レッドさん」

涙で濡れている頬、震えている唇。だがレッドが今まで見た中で、一番のエリカの美しい笑顔。

「ありがとう」

殿堂入り装置の機械が光った。殿堂入り登録とともにポケモンの回復が終わった合図だったようだ。

そして全てのモンスターボールにポケモンの出現信号が送られ、レッドの回りを囲むように仲間達が現れる。

そのタイミングでオーキド博士からポケモンリーグトロフィーが授与される。

鳴り響く歓声。優勝者を称える荘厳な音楽。笑顔で各々叫ぶポケモン達。

レッドは仲間達を見渡し快心の笑みを浮かべたあと、トロフィーを両手で持ち、頭の上へ掲げた。

レッドの密着取材を終えたエニシダは、ポケモンジャーナルへ寄稿するとカントー地方から姿を消したという。彼に近いものはどこか遠くでデカイ事をやりたくなくなったと聞いているようで、彼の身を案じているものはいないようだった。

ジムリーダー達は相変わらず多忙な日々を送っている。ポケモンリーグ後、セキチクシテイジムリーダーが正式にアンズになり、またトキワジムリーダーは空位となり後任が決まるまでキクコが代行することになった。

レッドはリーグチャンピオン戴冠後、すぐにチャンピオンの座を返上した。これ自体は大したニュースにはならなかった。リーグチャンピオンは代々、グリーンのように防衛戦を行うためセキエイ高原に残るものと、即返上するものと半々の割合らしい。また新シーズンでは現四天王を含めた多くのトレーナー達がしのぎを削ることになるだろう。

『以上、新チャンピオン、レッド選手の素顔でした。次のニュースです……』

マサラタウンの自室。レッドは何の気なしにテレビをBGMにし、カーペットの上に座りながらリュック内の荷物を確認していた。モンスターボール6つも腰に付けており、今から準備することは特になくなっていく。

「レッドさん」

そう甘い声を出しながらエリカがレッドへ後ろから抱きつき、レッドの首へ腕を回しながら頬をつけ合う。レッドも微笑みながらエリカの腕に手を添え、顔を気持ちエリカへかたむける。

エリカの表情はうつとりとしていながらどこか切ない。薄く目を開きながらレッドの頬に唇をつける。

エリカとレッドは二人きりになるとよく互いの体温を感じ合っていたが、今日は格別エリカが甘える度合いが強い。

「すぐ戻ってくるよ」

「嘘。レッドさんのすぐはどれくらいですか？」

エリカのすねた声にレッドが困ったように笑う。レッドの旅支度、彼はこれからチャンピオンだけが探検を許されるハナダの洞窟と、セキエイ高原より西にあるシロガネ山を踏破するための準備をしていた。

またレッドはその踏破が終わったあと、さらに広い世界をめぐることをエリカに告げている。

(わかっていたけれど)

レッドがそういう選択をすることを、エリカは予測していた。しかし期待はしていな

かった。これからはカントー地方で二人で一緒に。期待していたのはそんな夢想。

「離れたくないです」

エリカがレッドの耳元でささやく。しかし言葉と裏腹に、エリカの心の中で踏ん切りはついていた。レッドを待つ、いつまでも。エリカの囁きはちよつとした意地悪に近い。

好いた女にそんなことを言われたら当然レッドの心が波立つ。レッドはふと思いつく。

「ハナダの洞窟とシロガネ山の踏破が終わったら、一緒に世界をめぐるたい。エリカさんと一緒に」

エリカの瞳を正面から見つめ、穏やかに言う。エリカは反射的に「はい」と答えて少し狼狽したが、すぐに視界一面がレッドで埋め尽くされて甘い味を感じ、目を瞑って堪能した。

レッドは草原の中回想を終え目を開ける。天気は快晴、少し風が強い。

シロガネ山の山頂が遥か先に見えるこの場所で、レッドは隣のフシギバナに手をついて一息をつく。

「さて、準備はいいか皆？」

レッドの後ろにはピジョットとラッタの姿。今レッドはポケモン界に徐々に浸透し



つつあるトリプルバトルの練習も兼ねてシロガネ山に挑もうとしている。

エリカからの手紙にはいくつもの時代の変遷がレッドへ伝えられている。カスミとの協力の下発表されたポケモンの性格による得意分野の発見や、オス・メスの判別、別地方からのダブル・トリプルバトルの普及、ポケモンのたまごの発見など。既にレッドの最年少優勝記録の偉業なんて風化しつつある。

しかしレッドは自身の優勝記録なんて少しも気にしてなかったし、むしろ変わりゆく世界が魅力的に見えて仕方がない。

エリカからの最新の手紙に同封されていた写真。レッドが発見した未知の鉱石によつて進化したクサイハナ——キレイハナというらしい——の姿が写っている。

頂点など過去の話。レッドとポケモン達は際限のない未知の世界へ進むのが楽しみで仕方がない。

「行くぞー！ 皆ー！」

次代に向かい雄叫びを上げ駆け出す3匹、ラッタ、ピジヨット、フシギバナ。レッドは誰よりもいち早く、新たな光へ疾風のように駆け出している。